

近世ドイツの印刷ビラ、新聞、モード雑誌の言語的特徴
一口語性の展開と構文の変化を中心にして

Sprachliche Merkmale von Flugblättern, Zeitungen und Modezeitschriften
in der modernen deutschen Sprache

Unter besonderer Berücksichtigung der Entfaltung von Mündlichkeit
und der Veränderungen der Satzkonstruktionen

学習院大学大学院

人文科学研究科 ドイツ語ドイツ文学専攻

博士後期課程

芹澤 円

1. 序論	6
1.1. ドイツ語圏における印刷メディアの歴史的発展	6
1.2. 論文の目的及び本論文の構成について	12
2. ことばの「近さ」と「遠さ」	15
2.1. Koch/Oesterreicher (1985) による「近いことば／遠いことば」の概念	15
2.2. Ágel/ Hennig (2006) による「近いことば性」の測定法	17
2.2.1. ミクロレベルにおける測定法	20
2.2.2. マクロレベルにおける測定法	24
3. 印刷ビラ・小冊子、最新報告、週刊新聞における「近いことば性」	32
3.1. 16 世紀における宗教改革に関わる印刷物の分析	32
3.1.1. 『マルティン・ルター氏の肖像』の印刷ビラ	34
3.1.2. 宗教的な小冊子に関する分析	46
3.1.3. 16 世紀の宗教改革に関する印刷物の言語的特徴	54
3.2. 16 世紀における「最新報告」の分析	55
3.2.1. エスリンゲンの乙女に関する「最新報告」の分析	55
3.2.2. アダム・シュテークマンの殺害行為に関する「最新報告」分析	64
3.2.3. 16 世紀「最新報告」の言語的特徴	77
3.3. 17 世紀初頭における週刊新聞の分析	79
3.3.1. 週刊新聞の一般的特徴	79
3.3.2. 1609 年の週刊新聞の分析	80
3.3.3. 17 世紀初頭における週刊新聞の言語的特徴	82
3.4. 宗教改革の印刷ビラにおけるレトリック分析	82
3.4.1. 印刷ビラ『ヨハン・フス』の分析	83
3.4.2. 印刷ビラ『ルターの敵対者』の分析	90
3.4.3. レトリック分析からの考察	98
4. 新聞における構文	101
4.1. 「最新報告」と週刊新聞の比較	101
4.1.1. 受動態の頻繁な使用	101
4.1.2. 複合的な名詞句および前置詞句の使用	103
4.1.3. 数珠つなぎ複合文の使用	104

4.2. 17 世紀初頭と 18 世紀末の新聞における構文比較	107
4.2.1. 副文の使用	107
4.2.2. 数珠つなぎ複合文	112
4.2.3. 動作名詞を使用した名詞句	117
4.3. 総括	119
4.3.1. 構文と句の構造変遷	119
4.3.2. 時間軸に沿って「物語る」テキスト	120
5.1. モード雑誌の誕生	122
5.1.1. 「モード」の範囲	122
5.1.2. タイトル変更と編者交代	124
5.2. 空間軸に沿った事物テキスト	125
5.2.1. 副文および句構造	125
5.2.2. 「記述する」テキスト	128
5.3. モード雑誌テキストの「近いことば性」	128
5.3.1. 分析対象の基本情報	128
5.3.2. 「近いことば性」の算出	130
5.4. モード雑誌における使用語彙に関するコーパス言語学的分析	138
5.4.1. 分析データ	139
5.4.2. 高頻度語の検索	140
5.4.3. 共起関係の測定	148
5.5. モードを魅せる語彙と表現	155
5.5.1. 扱うテキストの基本情報	155
5.5.2. 推奨	157
5.5.3. 高価値語	158
5.5.4. 比較級・最上級	159
5.5.5. 程度を高める表現	161
5.5.6. 五感に訴える形容詞	162
5.5.7. 物事を価値づける表現	163
5.5.7.1. 「モードである」こと	163
5.5.7.2. 賛同表現	165

5.5.7.3. 「人気」があること	166
6. 「近いことば性」の測定法の改良をめざして	168
6.1. 初期新高ドイツ語期の言語現象	168
6.1.1. 語末音消失	168
6.1.2. 多成分の動詞句	169
6.1.3. 枠外配置	169
6.2. 「遠いことば性」の要素	170
6.2.1. 受動態という構文使用	170
6.2.2. 外来語使用という要素	170
6.2.3. 基礎文の総単語数を上位に置く手法の問題性	171
6.3. 「近いことば性」の最終値の表示に関わる代案	173
7. 結論	177
参考文献	180

1. 序論

1.1. ドイツ語圏における印刷メディアの歴史的発展

本論文の目的は、印刷メディアが誕生しそして発達していく過程において、近世ドイツの文章語の言語的特徴がどのように変遷していったのかを解明することである。そこでまず始めに、ドイツ語圏における印刷メディアの歴史について概観する。

三大発明の一つに数え上げられる活版印刷は、1440年頃に、マインツで都市貴族の家系であるヨハネス・グーテンベルク（Johannes Gutenberg、1400頃-1468）によって発明された。この発明以前においては、書籍を作成するために欠かせなかったのは写字であり、文字はひとつひとつ丁寧に、人の手で書き写されていた。例えば、12世紀から13世紀にヨーロッパの各地で誕生した大学では、多くの筆耕による分担書写が行われていた。¹ 修道院や大学での書写に加え、当時の学生は、大学近辺にいる書写生に料金を支払って筆写を依頼することもあった。² しかしながらこのような作業では、一冊の本を作るのに膨大な時間がかかるのと同時に、人の手によるものであるため、写し間違いが起きたことは言うまでもない。活版印刷術の発展は、こうした書籍を作成する手順を、より速くより効率的にした。1520年までには、印刷所は神聖ローマ帝国とスイスにおいて、都市を中心として62カ所を数えるまでに成長した。³

しかし、活版印刷術が発達してきたとはいえ、書籍の概念は現在とはずいぶんと異なっていた。書籍は高価で、貴重な扱いを受けていた。つまり、書籍は一般的に出回るものではなかったと同時に、書籍を所有していることが上流階級であるというステータスとなっていたのである。森田（1993）はこのことに関して、「書籍は権威、身分のシンボルであり、読書はエリートの行為」⁴ であると述べている。

活版印刷術とともに、印刷物の生産向上のためになくはならなかったものは、紙の生産である。それまでの書籍に使用されていたのは羊皮紙と呼ばれる、動物の皮から作られたものであった。文字を皮の表面に書けるようにするためには、何度も繰り返し皮をなめす必要があり、これも非常に時間のかかる作業であった。また、一枚が厚いため、何百ペ

¹ 森田（1993: 23）を参照。

² フェーブル、マルタン（1985: 上巻 51-6）を参照。

³ 田辺・佐藤（1995: 100）を参照。

⁴ 森田（1993: 23）

ージにも及ぶ本は、それだけでかなりの厚みと重さを要し、持ち運びも困難であった。さらに、200 ページの本を作るために、25 頭もの羊が必要であったという例もある。⁵ したがって、「羊皮紙は、大量消費に適していたパピルスが消滅して以来、一般に使用される筆記材料となっていたが、生産量や価格の面からみて、文字文化、読書文化の発展を支える力はなかった」。⁶

このような状況の中で、紙の生産性が向上したことは、宗教改革時代に非常に大きな影響をもたらした。エンゲルジングは紙の価格について、次のように述べている。

フランクフルト・アム・マインでは未使用の白紙の値段が、1376 年から 1483 年までに 15% 下落し、1438 年から 1470 年までに 30%、1470 年から 1513 年までには実に 40% も低下したと推定されている。とはいえ、この地で使用されていた紙は、まだイタリア産がほとんどであり、この事情は北ドイツやスカンジナビアについても同じであった。

エンゲルジング (1985: 26)

需要が増加するにつれ、価格も安くなることから、紙の使用率はかなり増えたと考えられるわけである。

このように印刷技術と紙の生産性の両方が発展を遂げたことで、書籍の製造をより速く、そして安価に行うことができるようになった。これら双方の利点に着目したのが、宗教改革者たちである。彼らは「それ自体で独立完結しており、継続発行されたり、本の形に綴じられたりしていない」⁷ 形状の印刷ビラ (Flugblatt) と小冊子 (Flugschrift) を用いて宗教改革の思想や意図を著し、これらの印刷物を大量に流布させることによって、民衆に宗教改革の意義を訴えようと考えた。この種の印刷ビラ・小冊子の数は、1518 年から 1523 年の間に 3000 点を越えたという。⁸

印刷ビラは基本的に一枚刷りであるが、その構成において図像が主体となっているため、紙の大きさはある程度大きい。⁹ それに対して、小冊子は複数枚からなるが、小型で軽く

⁵ 永田 (2004: 35) を参照。

⁶ エンゲルジング (1985: 26)

⁷ 須澤・井出 (2009: 159)

⁸ 田辺・佐藤 (1995: 100) を参照。

⁹ 例えば、田辺・佐藤 (1995) に収められている印刷ビラ 75 点は、「カタログ解説」(田辺・佐藤 1995: 116-141) の記載によれば、おおよそ縦 30 センチから 40 センチ、横 20 センチから 30 センチ程のものである。

で持ち運びやすく作られていた。¹⁰ 「行商する書籍商が宿屋でも街角でも簡単に売ることができたし、いざ官憲の手入れなどの時にはただちにそれを隠す」¹¹ ためである。このように考えていくと、印刷ビラはその大きさ故に、検閲を免れなかったのではないかという疑問が湧く。ところが、一枚刷りであったという利点から、簡単に小さく折りたたむことが可能で、たたんで小さくしてしまえば、見つかりにくい形状になり得る。印刷ビラは、このような形態を保ちながら確実に民衆の間に広まっていった。

ドイツでは、16世紀に入っても、書籍に使用されていた言語は未だに大部分がラテン語であった。なぜなら、人文主義の時代において、ラテン語はさまざまな学問における言語であり、ローマの伝統を基盤とした法律制度で用いられる言語であったからである。¹²

[...]、ドイツで印刷された書籍全体のラテン語書籍とドイツ語書籍との割合は、1500年には、ドイツ語によるものが約80点で全体の5%未満で、残りの95%強はラテン語で印刷、1518年においても、ドイツ語によるものは約150点で全体の10%にすぎない。

須澤・井出 (2009: 157)

しかしながら、一般の民衆が話す言語は、当然ながらドイツ語であった。この時代は、修道院や学校などで習わなければ、ラテン語はもちろんのこと、ドイツ語でさえ読み書きをすることは難しかった。さらに、当時は読み書きができるかどうかで、社会的に階層が区別されていた時代でもあった。¹³ 当時の識字率は、都市部においてもおよそ10%から30%ほどで、全体としては、おそらく5%を越えることはなかったという。¹⁴ Schön (1987) は、16世紀のドイツにおいて文字を読むことができたのは、全人口の1%未満にすぎなかった¹⁵と述べている。このように、ほとんどの民衆がまだ文字とは無縁であり、また書籍が安価になっていったとしても、一般の民衆には書籍を買う余裕はほとんどなかった。¹⁶

文字を持たない、声に依存していた当時の民衆の生活を、オング (1991) は、「一次的な声の文化 primary oral culture (つまり、まったく書くことを知らない文化)」¹⁷ と呼んでい

¹⁰ 田辺・佐藤 (1995: 100) を参照。

¹¹ 田辺・佐藤 (1995: 100)

¹² ポーレンツ (1974: 103) を参照。

¹³ Scribner (1981: 2) を参照。

¹⁴ Scribner (1981: 2) を参照。

¹⁵ Schön (1987: 36) を参照。

¹⁶ 森田 (1993: 33) を参照。

¹⁷ オング (1991: 5)

る。すなわち、当時のほとんどの人々は、声で発せられた言語をとどめておく術を持っていなかったことになる。「声の文化」の世界に印刷ビラや小冊子を配布したところで、「読むこと」を民衆に任せていたのでは、なんら効果は上げられなかったはずである。そこで宗教改革者が注目したのは、「読み聞かせ」の機能であった。

15 世紀における大衆の読書には、主として三つのやり方、すなわち、自分の目で読むこと、他人の朗読を聴くこと、それに書物を眺めることという三様の方法があった。最初のやり方はまったく当たり前であり、二番目も同じことである。しかし、ここで当時の事情を委しく説明するために注釈しておかねばならないが、15 世紀に出た大衆向けの書物には、目で読むことも、耳で聴くことも、書物の内容を取り入れるやり方としてはまったく同等であると説くものが多かったのである。

エンゲルジング (1985: 49)

このように、15 世紀から確立されていた読書の形態が、16 世紀になってからも採られ、印刷ビラと小冊子についても取り入れられた。

確かにオング (1991) が言うように、「声の文化」は「人間どうしのやりとりはずっと大きく依存している」。¹⁸ そして、その言語のコミュニケーションは、さらに「人々を結びつけて集団にする」¹⁹ 力を持っている。しかしこれとは逆に、読むことは他人を必要としない単独の行為である。読書についてオングはさらに、話すことは人々を一体にするが、読むことは聴衆の一体性をくずすと述べている。²⁰ そうであるならば、大衆に一度に印刷ビラや小冊子を配り、個人で読んでもらうよりも、声（音声）を用いて「読み聞かせる」ほうが、聴衆の一体感が生みだされ、一度に宗教改革者の意図を伝えることができることになる。この意味において、声による読み聞かせを必要とさせた民衆の識字率の低さが、聴衆の一体感の形成を促進し、そのことが宗教改革に有利に働いたのだと言えよう。読み聞かせるという行為は、おおよそ「声の文化」だけでも「文字の文化」だけでも属すことのない、いわばこの二つの文化の、ちょうど間に位置する存在ということになる。

印刷ビラと小冊子の読み聞かせは、都市を中心として行われていた。例えば、ウルム (Ulm) では市参事会から「街角集会」(Winkelversammlung) などというレットルをはられ、苦情

¹⁸ オング (1991: 145)

¹⁹ オング (1991: 147)

²⁰ オング (1991: 157) を参照。

が申し立てられるほど、盛んに集団の読み聞かせが行われていた。²¹ また、読み聞かせだけでなく、民衆同士による、宗教に関する語り合いも存在していた。それは、宗教という少し重いテーマでありながら、飲み屋や飲食店において語り合われていた。²² それまで宗教的な話や説教そして聖書の内容などは専ら、教会へ行き、そこで聖職者から一方的に話してもらうという方法が一般的だった。ところが、印刷ビラが広まるようになってからは、民衆どうしの活発な宗教に関する話し合いが普及したのである。

印刷ビラを読み聞かせるに際して、木版画や銅版画による挿し絵が果たした役割はきわめて重要である。挿し絵として印刷ビラに使用された木版画は、多くの場合、「本文の内容を端的に示す [...] 表紙や挿し絵」²³ であった。これはつまり、文字が読めずとも、単に木版画を見ることによって、民衆がビラの内容を把握していたということになる。エンゲルジングが示した読書形態の一つ、すなわち「書物を眺める」という形態が16世紀の印刷ビラにも適用されていて、木版画を眺めることで印刷ビラの内容が理解されていたのである。また、印刷ビラにおいては、「どちらかといえば木版画が主体となっている場合が多」²⁴ く、印刷ビラを聴衆に読み聞かせる際には、「まさに紙芝居のように、木版画をみせながら伝達すべき内容を解説した」²⁵ と考えられている。このように、口頭でのコミュニケーションと、視覚を利用したコミュニケーションの両方を用いることで、聞き手によりわかりやすく、印刷ビラの内容を伝えようとしたのである。

このような状況のなかで、「最新報告 (Neue Zeitung)」と称される印刷物も登場した。²⁶ 「最新報告」とは、最近の出来事について書かれた一枚刷りの印刷ビラの総称であり、「多くの場合、挿し絵がつけられている」。²⁷ 最古の「最新報告」は、16世紀初めの1502年のものである。²⁸ この印刷物は定期的に刊行されていたわけではなく、なんらかの出来事が起こった際に出版されていた。挿し絵の付いた「最新報告」は、16世紀半ばから17世紀半ばにかけて多く刷られ、ドイツにおける新聞の先駆けとして重要な役割を演じた。²⁹

²¹ Scribner (1981: 68) を参照。

²² Scribner (1981: 68) を参照。

²³ 田辺・佐藤 (1995: 100)

²⁴ 森田 (1993: 35)

²⁵ 森田 (1993: 35)

²⁶ 現代ドイツ語で「新聞」を意味する *Zeitung* という単語は、「1300年頃にケルン地域において *zidung* として出現し、報告を意味する中世低地ドイツ語・中世オランダ語の *tidung* に基づいている」(Straßner 1997: 1) という。

²⁷ Schröder (1995: 16)

²⁸ シュトラスナー (2002: 10) を参照。

²⁹ Schröder (1995: 13-14) を参照。

しかしながら上述のように、当時のドイツにおける識字率が高かったわけではないので、「最新報告」は、「行商人が市場など人の集まる場所で人々を前に読んで聞かせたり、韻を踏んで歌ったり」³⁰ されていた。つまり、宗教改革に関する印刷ビラ同様に、民衆に対して書かれたテキストが読み聞かされていたのである。この「最新報告」にも挿し絵が付随しており、挿し絵はテキスト内容の理解を促すものとして不可欠であった。³¹

17世紀になると、ドイツでは週刊新聞が登場する。現存するドイツで最古の週刊新聞は、シュトラースブルク（Straßburg）における《Relation》とヴォルフエンビュッテル（Wolfenbüttel）における《Aviso》である。どちらも1609年のものであるが、実際にはこの年よりももう少し早い時期に発刊されていたと考えられている。この週刊新聞では、通信文が「さまざまな場所から新聞編集者へと送られ、一つの新聞に編成され」³² ている。一つの週刊新聞は「平均して6から8の通信記事から構成されて」³³ おり、挿し絵は付随していない。当時のドイツ近隣諸国の新聞事情に目をやると、これより少し遅れて、イギリスでは1621年に、フランスでは1631年に新聞が発行され始めた。³⁴ ドイツは当時、ヨーロッパ諸国において印刷新聞の先進国であったことになる。生じた出来事を定期的に伝えるという新聞という形態は、当時のドイツにて誕生したのである。

その後、ドイツでは「17世紀後半から『新聞』の発行が本格化」³⁵ し、さらにその後は「『雑誌』という形式が成立し [...]1740年代以降急速に発展」³⁶ した。17世紀末から18世紀にかけての啓蒙主義時代において、雑誌というものは大衆に向けたものではなく、「一般にこの種の雑誌は市民層にのみ普及した」。³⁷ 読者対象は教養市民に限られ、そのため読者数は少なかった。³⁸ 1720年から1760年には、とりわけ道徳週刊誌（Moralische Zeitschrift）がドイツの教養市民層の啓蒙を強化する役割を演じた。当時の道徳週刊誌では、多様なテーマが社交的な歓談文体で、また、物語形式、寓話形式、手紙形式、談話形式などで書かれていた。³⁹ さらに、若い女性や婦人に対しては教育の方法に関する助言等も示されていた。このような道徳週刊誌はその多くは、架空に設定された「私」という観点から執筆さ

³⁰ シュトラスナー（2002: 9-10）

³¹ 芹澤（2011: 7）を参照。

³² Gieseler/Schröder（1996: 33）

³³ Gieseler/Schröder（1996: 33）

³⁴ 鈴木（2000: 63）を参照。

³⁵ 赤木（2008: 1）

³⁶ 赤木（2008: 1）

³⁷ エンゲルジング（1985: 99）

³⁸ Polenz（2013: 35）を参照。

³⁹ Polenz（2013: 35）を参照。

れ、読者とのつながりを直接的に築こうとするものであった。このような内容と形式によって、道徳週刊誌は当時の市民層の知識や、倫理観、人生経験に影響を与えようとした。

40

そして 18 世紀後半になると、モード雑誌 (Modejournal) が登場し始める。宗教的教化や時事報告を行っていた印刷物が、今や贅沢や流行を伝えるためのメディアにもなったわけである。このようなことから当時のモード雑誌は、印刷物の機能変化を象徴する印刷物であったといえる。モード雑誌が初めて登場したのは、1758 年であり、『新しいモードと振る舞いに関する新聞』(„Der neuen Moden- und Galanteriezeitung“) という雑誌である。⁴¹ しかし、この雑誌は、約 1 年で廃刊となり、短命に終わった。それから約 30 年が経過し、2 番目のモード雑誌として 1786 年に『豪奢とモードのジャーナル』(„Journal des Luxus und der Moden“) が登場する。1786 年に刊行が開始され 1827 年まで発行された『豪奢とモードのジャーナル』は、最初の重要なモード雑誌とされる。このモード雑誌は、フランス、イギリス、オランダなどドイツ語圏以外のヨーロッパ諸国においても読まれていたという。この『豪奢とモードのジャーナル』は、「最盛期には一つの版が 2250 冊に達し [...] 少なくとも 2 万 5 千人の読者」⁴² がいたと見積もられており、現在のベストセラーに値すると言われている。⁴³

1.2. 論文の目的及び本論文の構成について

以上述べてきたドイツ語圏における印刷メディアの発展史を踏まえて、本論文では、次の問題を提起し、考察を進める。

16 世紀から 18 世紀にかけて、印刷ビラ (小冊子)、新聞、モード雑誌に書かれた文章語の言語的特徴はどのように変化したのか？

本論文では、この問題提起について、口語性と構文という観点を中心にして解明を行いたい。口語性に注目するのは、読み聞かせ、理解の容易さという点から、文章語において

⁴⁰ Polenz (2013: 35) を参照。

⁴¹ Krempel (1935: 26) を参照。

⁴² Kuhles (2000: 489)

⁴³ Kuhles (2000: 489) 及び、Kröll (1979: 162) を参照。

話しことば性の多寡が一つの大きな役割を演じていたと想定されるからである。さらに口語性のほかに、テキストの型および使用される語彙という点からもアプローチを行う。

まず第2章では、口語性の概念について考察する。Koch/Oesterreicher (1985) によって提唱された概念「近いことば (Nähesprache)・遠いことば (Distanzsprache)」に依拠して、口語性に関する理論的前提を提示する。(本論文のタイトルには、一般的理解がなされやすいように「口語性」という用語を用いたが、本論文内では「口語性」に代えて、この「近いことば性」という概念を用いることにする。) そのあと、この概念に依拠して Ágel/Hennig (2006) が考案した「近いことば性」を測定する方法を紹介する。この Ágel/Hennig (2006) の測定法モデルによって、書かれたテキスト内における「近いことば性」を測定することが可能となったのである。Ágel/Hennig (2006) の「近いことば性」測定法では、マイクロレベルとマクロレベルという2つのレベルにおいて「近いことば性」の値が算出される。そして最終的に両レベルでの値を平均した数値がそれぞれのテキストの「近いことば性」の値であるとされる。

続く第3章では、16世紀については宗教改革に関する印刷ビラ及び小冊子、そして「最新報告」を、17世紀については週刊新聞の記事を分析の対象とし、第2章で取り上げた Ágel/Hennig (2006) の「近いことば性」測定モデルを実際に援用しながら、それぞれのテキストの「近いことば性」の算出を試みる。また、16世紀の宗教的な印刷ビラをレトリックという観点からテキスト及び図像に関して分析する。書き手はレトリックによって、読み手(聞き手)との距離を近く取ろうとしたと推測されるからである。

第4章では、新聞に焦点を当てて分析を行う。まずは、17世紀の週刊新聞と同時代の最新報告を比較することで、17世紀の新聞テキストに特徴的な言語現象について考察する。次に17世紀初頭の新聞と18世紀末の新聞を、構文という観点から比較し分析する。17世紀初頭における週刊新聞のテキストについては、主文にいくつもの副文が連なる数珠つなぎ複合文 (abperlendes Satzgefüge) の使用が特徴的だとする先行研究がある。そこで、この言語的特徴に関して、17世紀初頭の週刊新聞と18世紀末の新聞を比較する。さらに、動作名詞を使用した名詞句の使用も対象として分析を行い、複合文と句構造という観点から新聞テキストの通時的変遷を分析する。最後に、Eroms (2008) において提唱された「テキスト化の戦略」の概念に依拠しながら新聞テキストを分析する。

第5章では、18世紀末に登場したモード雑誌『豪奢とモードのジャーナル』を対象にして、言語的特徴について考察する。その際、前置詞句に着目する。モード雑誌では、前置

詞句を使用することで事物の形状や位置そして素材等が表わされている。このような事物に関わるテキストに特有な空間の描写を、「テキスト化の戦略」という概念を用いながら分析を行う。そのあと、創刊年（1786年）におけるテキストを Ágel/Hennig（2006）の「近いことば性」測定法によって分析を行う。また、コーパス言語学の方法により、おおよそ30年間、約5年おきに1年間分の『豪奢とモードのジャーナル』のテキストを抽出し、名詞 Mode に焦点を当て通時的・量的な分析を行う。さらにまた、モードを魅力的に伝える方法にも着目し、モード雑誌に特徴的な語彙・表現についても分析する。

第6章では、第2章及び第4章において Ágel/Hennig（2006）の「近いことば性」測定モデルを援用しながら分析を行った結果を踏まえて、実際に分析を行う中で浮かび上がった方法論に関する疑問点を示し、それを改良する代案について考察する。「近いことば性」との対極にある「遠いことば性」の要素と認められるような言語現象を設定することや、最終的な「近いことば性」の値を示す図示法の改良法等を提案する。

第7章では、以上の分析で得られた成果を踏まえて、本論文の問題提起に対する答えを提示する。

2. ことばの「近さ」と「遠さ」

2.1. Koch/Oesterreicher (1985) による「近いことば／遠いことば」の概念

家族と話すときのことばと学術論文のことばとを比較したとき、その言語に話しことばと書きことばの区別があることは明らかであろう。この自明に思われる区別に関して、Koch/Oesterreicher は 1985 年にひとつの画期的なモデルを提案した。⁴⁴ このモデルにおいては、「話されることばと書かれることばは、もはや単純な二分法で分類されていない」。⁴⁵ 文字で書かれたことばよりも、話されたことばの方が話しことば性が常に高いわけではないのである。Koch/Oesterreicher が 1994 年に一部修正を施した図表をもとに、このモデルを説明する。

図 1：「近いことば」「遠いことば」モデル

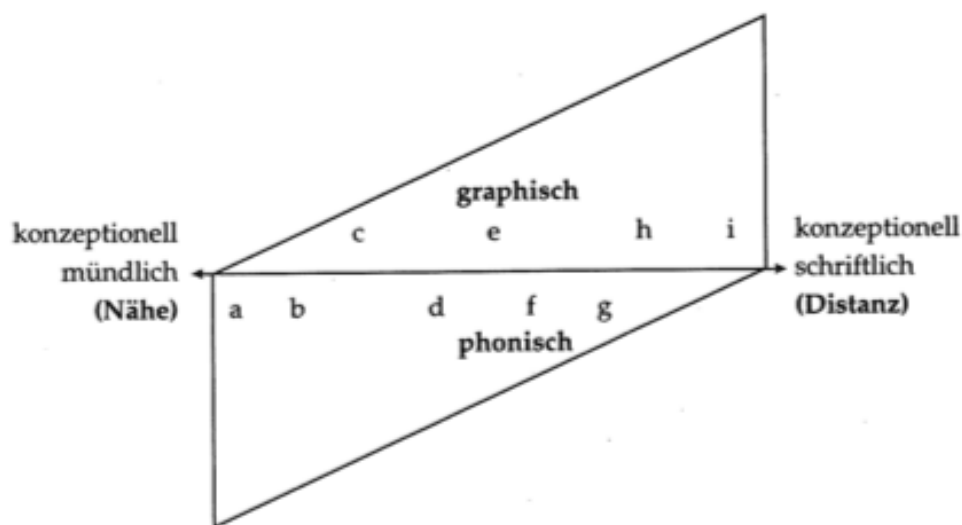


Abb. 44.1: Schematische Anordnung verschiedener Äußerungsformen im Feld medialer und konzeptioneller Mündlichkeit/Schriftlichkeit (a = familiäres Gespräch, b = Telefongespräch, c = Privatbrief, d = Vorstellungsgespräch, e = Zeitungsinterview, f = Predigt, g = wissenschaftlicher Vortrag, h = Leitartikel, i = Gesetzestext)

Koch/Oesterreicher (1994: 588)

Koch/Oesterreicher (1985) は 2 つの次元を峻別した。すなわち、物理的な「メディア」(音

⁴⁴ 高田 (2007: 69-70)、渡辺 (2009: 7) を参照。

⁴⁵ 高田・椎名・小野寺 (2011: 13)

声か文字か) という観点で話しことば／書きことばであることと、ひとが頭に抱く「理念」という観点で話しことば／書きことばであることを明確に区別した。したがって、このモデルでは、縦軸と横軸の区別が重要となる。縦軸では「メディア」が何であるかが問われており、下側のフィールドが「音声メディア」(phonisch)、上側のフィールドが「文字メディア」(graphisch) となっている。横軸では「理念」が問われ、左の極に「理念として話しことば的(近さ)」(konzeptionell mündlich [Nähe]) が、そして右の極に「理念として書きことば的(遠さ)」(konzeptionell schriftlich [Distanz]) が設定されている。⁴⁶ 左方向に位置づけられるほど、理念としての話しことば性が高くなる。ここで言う「近さ」と「遠さ」という用語は、とりわけ話し手と聞き手の間の心理的・コミュニケーション的な距離(親疎関係)を表している。⁴⁷

以上のことを踏まえて、具体的にこの表の c と g に着目してみると、c は「個人的な手紙」(Privatbrief) の位置を示し、図表の上側すなわち文字メディアのフィールドに属している。一方 g は、「学術的な講演」(wissenschaftlicher Vortrag) の位置を示し、下側すなわち音声メディアのフィールドに属している。この c の「個人的な手紙」は、文字で書かれたことばであるにも関わらず、図表においては g の「学術的な講演」よりも左側に位置づけられている。つまりこのことは、文字で書かれた「個人的な手紙」のことばが、音声で話された「学術的な講演」のことばよりも話しことば性が高いことを示している。心理的・コミュニケーション的な距離という観点から見直すと、c の「個人的な手紙」は親密な間柄同士のやりとりであり、心理的に近い距離にあるため、「近い」ことば、つまり話しことば性が高くなっていると言える。それに対して g の「学術的な講演」は音声メディアではあるが、講演をする側と講演を聞く側に心理的な距離があるため、c の「個人的な手紙」よりも、より「遠い」つまり書きことば性が高いと言える。

この Koch/Oesterreicher (1985) のモデルによって、文字テキストを話しことばに関する分析のデータとして扱うことが正当化された。⁴⁸ すなわち、文字でしか伝承されていない歴史的段階の言語の話しことば性の程度を、相対的に位置づけることが可能になった。

⁴⁶ Koch /Oesterreicher (1985) の図表では、前者は「近いことば」(Sprache der Nähe)、後者は「遠いことば」(Sprache der Distanz) と呼ばれている。

⁴⁷ 渡辺 (2009: 8) を参照。

⁴⁸ 高田・椎名・小野寺 (2011: 15) を参照。

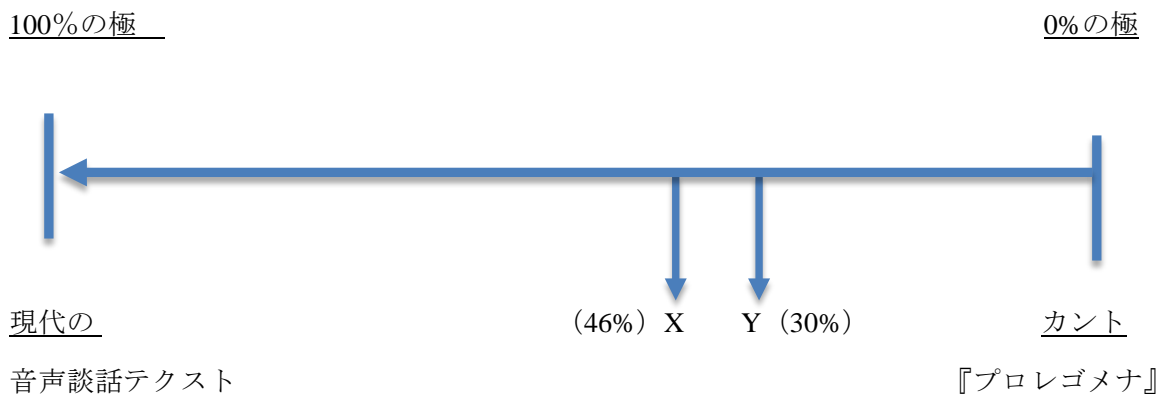
2.2. Ágel/ Hennig (2006) による「近いことば性」の測定法

Ágel/Hennig (2006) は、この Koch/Oesterreicher (1985) のモデルに依拠して、話しことば性を測定する具体的な方法を提案した。Ágel/Hennig (2006) は、話しことば性を「近いことば性」(Nähesprachlichkeit) という名称で呼んでいる。Ágel/Hennig (2006) は、当該のテキストに確認できる近いことば性の高い要素を一つずつ数え上げていくことで、各テキストの近いことば性が算出できるとした。そして最終的に得られた値を、左端に置かれた「近さのポール」(Nähepol) と右端に置かれた「遠さのポール」(Distanzpol) との間の座標軸上に相対的に位置づけ、テキスト同士の数値で比較を行う。本論文では以下、「話しことば(性)」、「口語」に代えて「近いことば(性)」を、「書きことば(性)」、「文語」に代えて「遠いことば(性)」という用語を統一的に用いることとする。

Ágel/Hennig (2006) のモデルでは、Koch/Oesterreicher (1985) と同様に横軸に座標が置かれ、その両極に特定のテキストが設定されている。左端には、規準テキストとして現代の音声談話(あるラジオの DJ と若い男の子の会話)を文字化したテキストが置かれている。⁴⁹ Ágel/Hennig (2006) は、このテキストから算出された近いことば性の値を便宜的に近いことば性が 100% であると設定した。同様に、右端にはカントの『プロレゴメナ』(1783) が、規準テキストとして置かれている。そしてこのテキストから算出された値を、便宜的に近いことば性が 0%、つまり遠いことば性が 100% であると設定した。このように、あらかじめ両極に規準を設けなければ、近いことば性と遠いことば性の度合いを比較できないからである。このモデルの狙いは、測定したテキストの値を最終的に座標軸上のどこかに位置づけることで、各テキストが有する近いことば性の程度を相対的に比較することである。例えばテキスト X の近いことば性が 46%、テキスト Y は 30% であるとする。この数値を座標軸上に位置づけると、テキスト X がテキスト Y よりもより左にあり、近いことば性 100% の極により近い距離に位置していることで、テキスト X のほうが近いことば性が高いということになる。

⁴⁹ Ágel/Hennig (2006: 36) 参照。

図 2 : Ágel/Hennig (2006) によって設定された近いことば性の座標軸



このことに関して Ágel/Hennig (2006) は次のように述べている：

パーセンテージの算出によって数学的な精密性を示唆することがわれわれの研究の意図でないことを、ここで明言しておきたいと思う。われわれが重要だと考えるのは、次の点である。すなわち、ひとつには、ある種類の談話もしくは（コーパス）テキストを近さのポールと遠さのポールの間のどこに位置づけるかについて単に純粹に思弁的ではない方法を可能にすること、もうひとつには、このようにすることで [...] われわれのコーパステキスト同士の比較を保証することである。

Ágel/Hennig (2006: 35)

Koch/Oesterreicher (1985) のモデルでは、先ほどの c「個人的な手紙」と g「学術的な講演」では、確かに c の方が近いことば性がおおよそ高いことを示すことはできる。しかし、実際に c と g とがどの程度近いことば性に差があるのかという点について数値化して示すことはできなかった。この点を考慮して、パーセンテージにより数値的に示すことができるようにしたものが Ágel/Hennig (2006) のモデルであると言える。

Ágel/Hennig (2006) は、近いことば性を分析する際に、二つのレベルからのアプローチが必要であるとする。一つは語や語句に関するマイクロレベル (Mikroebene) での分析であり、もう一つは文全体を包括的に俯瞰するマクロレベル (Makroebene) での分析である。Ágel/Hennig (2006) は、テキストを特徴づけるような「文形成上のパターン (Schema)」⁵⁰ をマクロレベルで見通すことで、テキストの近いことば性がより正確に把握できると考え

⁵⁰ Ágel/Hennig (2006: 34)

た。⁵¹

Ágel/Hennig (2006) はその著書の最後において、「近いことば性の高さ」に関わる要素を 76 種類、リストアップしている。例えば、このモデルにおける近いことばと遠いことばを区別する規準の一つに、「統合的」(integrativ) であるのか、それとも「凝集的」(aggregativ) であるのかという点がある。マイクロレベルの観点から言えば、統合的な *woran* という疑問詞が使用できるところで「凝集的な疑問詞」*an was* を使用している場合は、この *an was* は近いことば性のある要素と判定される。⁵² また、Ágel/Hennig (2006) によれば、*dißer boeßer Gesell* という形容詞の語尾変化のように、(本来ならば *boeße* であるところ) 先行する指示代名詞の語形変化に引きずられて余分な *r* が形容詞語尾に追加されている場合は、「凝集的な名詞群の格変化」とみなされ、近いことば性があると判定される。⁵³ さらに、マクロレベルの観点から言えば、例えば「自由テーマ」(*freies Thema*)⁵⁴ や、「付け足し」(*Nachtrag*)⁵⁵、「枠外配置」(*Ausklammerung*) といったものは、文の周縁に凝集的に位置することから、近いことば性があるとされる。⁵⁶ この他にも「心態表示」(*Abtönung*) や「情緒の表出」(*Emotionsausdruck*)、さらに「語用論的省略」(*pragmatische Ellipse*)⁵⁷ なども、近いことば性が高い要素と見なされる。

このように近いことば性が高いと思われる要素を分析テキスト内に見つける毎に、1 ポイントとしてカウントする。そしてカウントされたそのような要素の総数を、最終的にテキストの総単語数で割る。そこから近いことば性の値を導きだしていく。

⁵¹ Ágel/Hennig (2006: 34) を参照。

⁵² Ágel/Hennig (2006: 388) を参照。

⁵³ Ágel/Hennig (2006: 388) を参照。

⁵⁴ 自由テーマの例として挙げられているのは、*Hermann und Karl für die macht es eine grose last*. における *Hermann und Karl* である。つまりこれは、「文の左端にある、文外部の文周縁構造 (Satzrandstruktur) であり、統語的に後続文を投影する構造の構成要素ではないが、語用論的な投影を引き起こし、[聞き手による] 受容を制御する」(Ágel/Hennig 2006: 391) ものと定義されている。

⁵⁵ 付け足しの例としては、*in der Underpfaltz sunsten wonhafft wahr zur Neystatt bey der großen Linden* における *zur Neystatt bey der großen Linden* である。つまりこれは、「右側の文周縁部にある非統合的な構造であり、先行文の投影構造の構成要素ではなくて、むしろ、既の実現された投影構造の要素が、付け足しによって精密化される」と定義されている (Ágel/Hennig 2006: 39 を参照)。

⁵⁶ Ágel/Hennig は、文の周縁にある構造 (Satzrandstruktur) を原則的に非統合的としている (Ágel/Hennig 2006: 53) を参照。

⁵⁷ 語用論的省略とは、「アピール機能を有さない、状況に拘束された短縮形であり、[...] 例えば友人の新しい家を見た際の、*Schönes Haus!* という発言」(Ágel/Hennig 2006: 395) である。ここでは、*Das ist* のような主語と述語が省略されたと考えることができる。

2.2.1. ミクロレベルにおける測定法

では、17世紀の週刊新聞の記事の一節を例にして、ミクロレベルの分析の仕方を示す。まずは、対象とするシュトラースブルクの週刊新聞《Relation》から、1609年の「3月18日付けのウィーンからの報告」のテキスト全文を以下に示す。⁵⁸

Alhie stehen alle sachen Gott lob wol/ dann auff 12. diß durch bemuehung der Mehrerischen Stende zwischen Kön: May: vnd der Osterreichischen Stenden eine vergleichung geschehen/ welche *Tactation* dann morgens von 7. biß 9. vhr in die nacht gewehrt/ diese vergleichung aber hat Erzherzog Leopoldo/ Baepstischem *Nunctio*, *Clessel*, vnd andern Raechten sehr mißfallen/ deßwegen sie darwider *protestiert*, haben aber nichts damit außgericht/ dann diese fürsichtigkeit gebraucht worden das man jeden *puncten* ab sonderlich *tractiert*, vnnd so oft einer geschlossen mit guten Teutschen worten auffß Bappier gebracht vnd alsbald von jhrer May: mit den beywesenden Rächten/ auch den Mehrerischen vnnd Oesterreichen abgesanden mit eignen haenden vnderschieden worden/ darueber dann dieser tagen vnter der gemeine ein grosses Frolocken gewst[sic!]/ jetzt ist man im werck/ die abgehandelte *puncten* in eine Ordnung zubringen/ vnd alsdann die Hauptversicherung darüber zuthun. Sonst vernimbt man beyläufftig soviel/ das Kön: May: vielfaltige vrsachen nottrunglichen hier zu bewegt haben/ sonderlich aber weil dieselbe weder vom Bapst/ König in Sprania/ noch andern benachtbarten[sic!] *Potentaten* einiger rechten hülff nit vergewisset/ vnd ohne das in denen Landen in so grossen Schulden läßt stecken/ diese zulassung oder bewilligung soll sich wie man sagt/ weiter nicht erstrecken als was der Stende alte Freyheiten/ vnd Kayser Maximiliani seeligster gedaechtniß/ *Concessionen* auff die Augspurgische *Confeßion* vermögen/ vnd sie von 40. Jahren biß anher erweisen können/ als nemblich welche Kirchen der Spittal sie in solcher zeit in gehabt/ sie sich derselben mit fürweissung ihrer *Privilegien* hinfüro gebrauchen mögen/ inmittelst aber die newe *exercitia* in Stätten vnd Maercken/ so wol ob als vnter der Ens/ sonderlich aber in den Landtheusern/ zu Wien vnd Lintz/ bis auff weitem bescheid einstellen/ dargegen aber alle 4 Stende von denselben orten den freyen außgang vngehendert haben/ auch ihnen vnerwehrt sein solle/ das wann einer Kranck sich durch einen Predicanten Augspurgischer *Confeßion* troesten/ *Communiciern* vnnd Kinder tauffen lassen mögen/

⁵⁸ 出典：Schöne, Walter (Hg.) (1940): *Die Relation des Jahres 1609 in Faksimiledruck*. Leipzig. (ページ数なし)

die Hochzeiten aber einzusegnen/ soll bey den Catholischen verbleiben/ die Ersetzung der Oberkeit vnd Empter aus jhrer May: Cämmerer vnd geheimer Rähten/ soll hinfuero durch jhr gemeine Wahl geschehen/ vnd der Jenige so die meiste Stimme hat/ er sey gleich Lutherisch oder Bapistisch/ nach gelegenheit jhrer *qualidet* zulassen/ auch die Regierung vnd Cammer mit gleicher anzahl der Personen/ von beyden Religion ersetzt/ die vbrige *Gravamina* dabey die Catholischen nit wenig *Intereßiert*, auff kuenfftigen Landtag erörtert/ desgleichen alle bey gericht erhalten *executionen*, so wider die abwesenden ergangen/ allerdings *Caßirt* worden/ vnd die gegentheil verbunden sein/ solche *de novo* anzubringen. Alles Kriegsvolck solle alsbald beyderseits abgedanckt/ alles was vorgangen verziehen in ewigkeit nicht mehr sollen gedacht werden/ vnd also ein general Perdon ertheilt aller orten *publicirt*, vnd gar in Truck gebracht werden/ deß Mißverstands halben so Kay: May: mit dem König gehabt/ soll Erzherzog Leopoldus sampt dem Graffen von Sultz/ vnd Herrn: Hagenmueller auff deß Königs so tieffe *accommodation* auch ein gute *resolution* von Prag mit gebracht haben/ so ist auff 12. diß Ertzherzog Maximilian vor geschehenem beschlus nach Insbruck auff gebrochen/ der ist aber alsbald mit eignem Currir dieses Schlus erinnert worden/ vn(d) solle Erherzog Leopoldus taeglich wider nach Prag/ oder Preßburg verreisen.

上記のテキスト冒頭部分を使用しながら、マイクロレベルの測定法を紹介したい。(なお、この表示法は、Ágel/Hennig (2006) を一部修正したものである。) ⁵⁹

(本文) Alhie stehen alle sachen Gott lob wol/
 (分析) →Lokaldeixis →Temporaldeixis →Interjektion
 (訳) ここでは、ありがたや、全てが上手くいっている。

例えば最初の単語 Alhie 「ここでは」は、「場所の直示表現」(Lokaldeixis) という話しことばの要素としてみなされ、「近いことば性」が 1 ポイントあると数えられる。つまり、「ここ」という意味を持つ直示的な表現は、話し手 (送り手) と聞き手 (受け手) との間に共通の認識があつて初めて機能する表現であり、「近いことば」的であるとみなされる。また、二つ目の単語 stehen 「(状況が) ~である」は、「時制の直示表現」(Temporaldeixis) とい

⁵⁹ Ágel/Hennig (2006 : 66) では、マクロレベルの分析例を記載している。それは例えば基礎文 1 を一枠で囲み、基礎文 x は二重の枠で囲むといった表示法である。このような分析の示し方をヒントにして、本論文では、本文と分析を二段に分け、対象となる要素を枠で囲うという方法を採用した。

う近いことばの要素として数えられる。また、Gott lob「ありがたや」は、間投詞(Interjektion)という「近いことば」の要素としてカウントされる。このようにして全てを数え上げていくと、17世紀の週刊新聞の記事には「近いことば」の要素が22カウントされた。以下の表において、「近いことば」の要素としてカウントされた22の要素を示す。

表1：17世紀初頭の週刊新聞におけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素とカウントされる項目	「近いことば性」の要素の分類
alhie	場所の直示表現
stehen	時制の直示表現
Gott lob	間投詞
hat...mißfallen	時制の直示表現
haben ... außgericht	時制の直示表現
ist... im Werk	時制の直示表現
vernimbt	時制の直示表現
soll sich ... erstrecken	時制の直示表現
soll...verbleiben	時制の直示表現
soll...geschehen	時制の直示表現
der Jenige	左方配置
(soll)...ersetzt	時制の直示表現
(soll)...eroertert	時制の直示表現
(soll) ...verbunden sein	時制の直示表現
solle ...abgedanckt ...(werden)	時制の直示表現
sollen gedacht werden	時制の直示表現
(sollen) ... publiziert (werden)	時制の直示表現
(sollen) ... gebracht werden	時制の直示表現
soll mit gebracht haben	時制の直示表現
ist ...auff bebrochen	時制の直示表現
ist ... erinnert worden	時制の直示表現

22 数え上げられたうち、その多くは時制の直示表現であった。また例えば、*vnd der Jenige so die meiste Stimme hat/ er sey gleich Litherisch oder Bapistisch/* には、「近いことば」的な要素として、「左方配置」と判断される要素がある。「左方配置」とは「文の左端における文周縁構造」⁶⁰ であり、*left dislocation*⁶¹ のことである。⁶² ここでは、*der Jenige so die meiste Stimme hat/ er* 「最高得票を得たその人が、彼が」のうち、*der Jenige* が左方配置された要素であり、*er* が核文内にて *der Jenige* を再度指示する要素である。

カウントされたすべての近いことばの要素 (22) を総単語数 (506 語) で割ることで、0.0434 という数値が得られる。これは 100 語あたり約 4.34 回の「近いことば性」の要素があったことを意味している ($22 \div 506 = 0.0434 \dots$)。

次に、上のようにして得られた値を上述した規準テキストと比較する必要がある。*Ágel/Hennig* (2006) が座標軸の一番左に想定した規準テキスト (現代のラジオでの談話) は、*Ágel/Hennig* (2006) の計算によると、マイクロレベルにおいて 0.63 という値が算出されている。⁶³ これは 100 語につき 63 回の「近いことば性」の要素があることを示している。そこで、この 0.63 という値が 100% の「近いことば性」(座標軸の左端) とされるのであれば、17 世紀の週刊新聞の記事は一体何% の「近いことば性」があると考えられるのだろうか。その値を求めると、6.88% という値が算出される (0.63 (規準テキスト) : 100 (% の「近いことば性」があると設定) = $0.0434 : X$ (%))。これは、*Ágel/Hennig* (2006) が設定した談話テキストを 100% の「近いことば性」があるとしたときに、17 世紀の週刊新聞のテキストには 6.88% の「近いことば性」があることを示している。

⁶⁰ *Ágel/Hennig* (2006: 393)

⁶¹ *Elspaß* (2005: 236)

⁶² 「ドイツ語の文構造の上で枠構造が形成される場合、文は最大三つの区域にまで分割される [...] 枠の前域 (Vorfeld)、枠に囲まれた区域を中域 (Mittelfeld)、枠の後方の位置を後域 (Nachfeld) と呼ぶ」(川島 1994: 953)。この前域よりも左側に位置される要素のことを指す。「左方配置の場合、外側へ出された要素は [...] 核文内にある再帰的な代用形 (Pro-Form) によって再度言及される」(*Elspaß* 2005: 236) ことになる。マイクロレベルでカウントされる近いことばの要素は、*Ágel/Hennig* (2006) のモデルに先駆けて、*Elspaß* (2005) において研究されている。*Elspaß* は 19 世紀にアメリカへ移民としてわたったドイツ人の手紙をもとに、書かれた日常語と高尚な文章語を比較し、その相違を明らかにした。*Elspaß* の研究には、左方配置を始め、定動詞欠如の構文や縮小語尾など、文レベルから語彙レベルまでに及ぶ、日常語と文章語の違いが示されている。

⁶³ *Ágel/Hennig* (2006: 39) を参照。

2.2.2. マクロレベルにおける測定法

次に、「近いことば性」のマイクロレベルの測定を行う際に使用したテキストを再度使用して、マクロレベルではどのようにして「近いことば性」の高さを算出するのかを例示する。

(本文)	<u>Alhie stehen alle sachen</u>	<u>Gott lob wol/</u>
(分析)	→基礎文 1 (主文: Alhie から wol まで)	→NNS
(本文)	<u>dann auff 12. diß durch bemühung der Mehrerischen Stende</u>	
(分析)	→基礎文 x (副文: dann から geschehen まで)	
	<u>zwischen Kön: May: vnd der Osterreichischen Stenden eine vergleichung geschehen/</u>	

マクロレベルで基本とされるのは、主語と動詞を一つずつ持ち合わせているような「基礎文 (Elementar-Satz)」である。これを基本的単位にして、主文 (主節) であるものは「基礎文 1」、副文 (従属節) は「基礎文 x」として数えていく。さらに形式的には文ではないが文と等しい要素、つまり「文相当表現 (Nicht-Satz)」もマクロレベルで扱われる。例えば、間投詞のように感嘆を表す文相当表現は「近いことば」的な表現とみなされ、「近いことば的な文相当表現」(NNS: Nähe-Nicht-Satz) というカテゴリーで「近いことば性」の要素に分類される。(以下、「近いことば的な文相当表現」を NNS と略記する。) 間投詞は、マイクロレベルでもマクロレベルでもそれぞれ 1 ポイントとして数えられる。上の文において、1 行目の Alhie から wol までの「ここでは、ありがたや、全てが上手くいっている」という文は、主語 *alle sachen* と述語 *stehen* が作る主文であって基礎文 1 に分類される。また *Gott lob* は感嘆を表す文相当表現として、マクロレベルでは NNS として算出される。さらに例文 2-4 行目の *dann auff 12. diß durch bemühung der Mehrerischen Stende zwischen Kön: May: vnd der Osterreichischen Stenden eine vergleichung geschehen/* (というのも、今月の 12 日に、メーレンの諸身分の人々の尽力によって、国王陛下とオーストリアの諸身分の人々の間に、調停が成立したからである) という文は、従属接続詞 *dann* によって導かれた副文であり、基礎文 x に分類される。

このようにして、テキスト内にそれぞれのカテゴリーに分類される要素がいくつあるのかを数え上げていく。以下の表にマクロレベルで得られたそれぞれの分類分けを示す。

表 2 : 17 世紀初頭の週刊新聞におけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Alhie stehen alle sachen Gott lob wol	E-1
Gott lob	NNS
dann auff 12. diß durch bemuehung der Mehrerischen Stende zwischen Kön: May: vnd der Osterreichischen Stende eine vergleichung geschehen	E-x
welche <i>Taetaion</i> dann morgens von 7. biß 9. vhr in die nacht gewehrt/	E-x
diese vergleichung aber hat Erzherzog Leopold/ Baepstischem <i>Nunctio, Clessel</i> , vnd andern Raechten sehr mißfallen /	E-1
deßwegen sie darwider <i>protestiert</i> ,	E-x
haben aber nichts damit außgericht/	E-1
dann diese fürsichtigkeit gebraucht worden	E-x
das man jeden <i>puncten</i> ab sonderlich tractiert,	E-x
vnnnd so oft einer geschlossen mit guten Teutschen worten auffß Bappier gebraucht	E-x
vnd alsbald von jhrer May: mit den beywesenden Raechten/ auch den Mehereischen vnnnd Oesterrechen abgesanden mit eignen haenden vnderschieden worden/	E-x
darueber dann dieser tagen vnter der gemeine ein grosses Frolocken gewst/	E-x
jezt ist man im werck/	E-1
die abgehandelte <i>puncten</i> in eine Ordnung zubringen/	E-x
vnd alsdann die Hauptversicherung darüber zuthun.	E-x
Sonst vernimbt man beyläuffig soviel /	E-1
das Kön: May: vielfaltige vrsachen nottrunglichen hier zu bewegt haben/	E-x
sonderlich aber weil dieselbe weder vom Bapst/ König in Sprania/	E-x

noch andern benachbarten <i>Potentaten</i> einiger rechten hülff nit vergewisset/	
vnd ohne das in denen Landen in so grossen Schluden läßt stecken/	E-x
diese zulassung oder bewilligung soll sich wie man sagt/ weiter nicht erstrecken als was der Stende alte Freyheiten/	E-1
wie man sagt/	I-UBS
wie man sagt	E-x
vnd Kayser Maximiliani seeligster gedaechtnis/ <i>Concessionen</i> auff die Augspurgische <i>Confeßion</i> vermögen /	E-x
vnd sie von 40. Jahren biß anher erweisen können /	E-x
als nemblich welche Kirchen der Spittal sie in solcher zeit in gehabt/	E-x
sie sich derselben mit fürweissung ihrer <i>Privilegien</i> hinfüro gebrauchen mögen /	E-x
inmittelst aber die neue <i>exercitia</i> in Stätten vnd Maercken/ so wol ob als vnter der Ens/ sonderlich aber in den Landtheusern/ zu Wien vnd Lintz/ bis auff weitem bescheid einstellen (soll)/	E-x
dargegen aber alle 4 Stende von denselben orten den freyen außgang vngehindert haben (solle)/	E-x
auch ihnen vnerwehrt sein solle/	E-x
das wann einer Kranck sich durch einen Predicanten Augspurgischer <i>Confeßion</i> troesten (lassen mögen)/	E-x
<i>Communiern</i> vnnd Kinder tauffen lassen mögen /	E-x
die Hochzeiten aber einzusegnen/	E-x
soll bey den Catholischen verbleiben/	E-1
die Ersezung der Oberkeit vnd Empter aus jhrer May: Cämmerer vnd geheimer Rächten / soll hinfuero durch jhr gemeine Wahl geschehen/	E-1
vnd der Jenige so die meiste Stimme hat/ er sey gleich Litherisch oder Bapistisch (soll)/ nach gelegenheit jhrer <i>qualidet</i> zulassen/	E-1

so die meiste Stimme hat/	E-x
er sey gleich Litherisch oder Bapistisch (soll)/	E-x
so die meiste Stimme hat/ er sey gleich Litherisch oder Bapistisch (soll)	I-UBS
auch die Regierung vnd Cammer (soll) mit gleicher anzah der Personen/ von beyden Religion ersetzt/	E-1
die vbrige <i>Gravamina</i> dabey die Catholischen nit wenig <i>Intereßiert</i> , auff kuenfftigen Landtag erörtert /	E-1
die Catholischen nit wenig <i>Intereßiert</i> ,	E-x
desgleichen alle bey gericht erhalten <i>executionen</i> , so wider die abwesenden ergangen/ allerdings <i>Caßirt</i> worden/	E-1
so wider die abwesenden ergangen/	E-x
vnd die gegentheil verbunden sein/	E-1
solche <i>de novo</i> anzubringen.	E-x
Alles Kriegsvolck solle alsbald beyderseits abgedanckt/	E-1
alles was vorgangen verziehen in ewigkeit	E-x
nicht mehr sollen gedacht werden/	E-1
vnd also (alles was) ein general Perdon ertheilt aller orten	E-x
(alles was) ... (sollen) <i>publicirt</i> (werden)	E-x
vnd gar (soll) in Truck gebraucht werden/	E-1
des Mißverständs halben so Kay: May: mit dem König gehabt/ soll Erzherzog Leopoldus sampt dem Graffen von Sultz / vnd Herrn: Hagenmueller auff des Königs so tieffe <i>accommodation</i> auch ein gute <i>resolution</i> von Prag mit gebracht haben /	E-1
so Kay: May: mit dem Koenig gehabt/	E-x
so ist auff 12. diß Erzherzog Maximilian vor geschehenem beschlus nach Insbruck auff gebrochen/	E-1
der ist aber alsbald mit eignem Currir dieses Schlus erinnert worden/	E-1
vn(d) solle Erzerzog Leopoldus taeglich wider nach Prag/ oder	E-1

Presburg verreisen.	
---------------------	--

表で示した分類をそれぞれ数え上げると、17世紀の週刊新聞の記事では次のような数値が得られる。

表3：マクロレベルでの要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	I-UBS
506	1	53	20	33	2

表にある I-UBS (ein integrativer unterbrochener Satz) とは、「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」⁶⁴ と定義されている。I-UBS とは、マトリョーシカ人形の構造のように、一つの基礎文の中にさらに別の基礎文が含まれているような入れ子構造を持つ文を示している。このような構造は、「近いことば性」とは反対の「遠いことば性」が高いものと見なされる。(したがって、後述のように、この値が低いほど、近いことば的と算出される。)

Ágel/Hennig (2006) の計算法に従い、上記の結果を以下の4つの a)-d)の計算式に当てはめ、さらなる値を算出する必要がある。

表4：マクロレベルでの4つの計算値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基 礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS と全基礎文
0.018	0.606	26.5	9.370

a) の計算式では、文相当表現と基礎文の割合を算出する。つまり、「近いことば性」の高い文相当表現(感嘆表現など)が多ければ多いほど、つまりこの数値が高いほど、「近いことば性」が高いことになる。b) では基礎文 1 (主文) と基礎文 x (副文) が使用されている割合を測る。基礎文 x に比べ基礎文 1 が相対的に多い程、つまりこの数値が高いほど、

⁶⁴ Ágel/Hennig (2006: 64)

「近いことば性」が高いことになる。c) ではいわゆる入れ子構造の基礎文の頻度を測定する。入れ子構造の基礎文が少ないほど、つまりこの計算式での数値が高いほど、「近いことば性」は高くなる。d) では基礎文が何語で構成されているのかを分析している。基礎文を構成する語数が少ないほど、つまりこの数値が低いほど、「近いことば性」が高いことになる。⁶⁵

この4つの計算式で得られた値から、マクロレベルでの「近いことば性」の高さをパーセントに換算する。マクロレベルにおいても、ミクロレベル同様に規準テキストが必要となる。

そこでマクロレベルの近いことば性という領域においては、比較の基礎となるテキストが二つ必要である。つまり、典型的に近いことばと言えるテキストと、典型的に遠いことばと言えるテキストである。マクロレベルのチェックを受けるべきテキストは、文法的な領域において典型的に近いことばと言えるテキストと典型的に遠いことばと言えるテキストとの間に位置づけられるべきである。

Ágel/Hennig (2006: 34)

Ágel/Hennig (2006) は、典型的に「近いことば」である規準テキスト（座標軸左端）として、ミクロレベルのときと同じ座標軸左端の現代のラジオでの談話を用いる。もう一つの典型的に「遠いことば」であるテキスト（座標軸右端）はカントの『プロレゴメナ』である。⁶⁶ この二つの規準テキストの4つの値は、Ágel/Hennig (2006) によって算出されており、以下の表の通りである。⁶⁷

⁶⁵ 下記に示した表5を参照。a)-c)では「近いことば性」100%の規準テキストの値の方が、「近いことば性」0%の規準テキストの値よりも大きいことがわかる。しかし、d)の値だけは、数値の大きさが逆転している。この値のために、d)のカテゴリーに限っては数値が低い方が「近いことば性」が高いことを示している。

⁶⁶ Ágel/Hennig (2006: 65) を参照。

⁶⁷ Ágel/Hennig (2006: 68) の表を参照し、一部変更した。

表 5 : 規準テキストのマクロレベルの 4 つの計算値

規準テキスト	a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 / 基礎文 x	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
現代の音声談話	0.704	4.07	114.0	4.55
『プロレゴメナ』	0.041	0.75	8.1	8.74

この表 5 で示されている現代の音声談話のそれぞれの値を「近いことば性」が 100%あると仮定し、反対に『プロレゴメナ』の 4 つの値はそれぞれ「近いことば性」が 0%とする。そして a)、b)、c)、d) 各々の 4 つのカテゴリーについてそれぞれ座標軸を作り、17 世紀の週刊新聞の記事で得られた値に「近いことば性」が何パーセントあるのかを算出する。今回の 17 世紀の週刊新聞のテキストには NNS が観察されなかったため、例えば b) を例に解説してみると、現代の音声談話の値は表 5 にある通り 4.07、『プロレゴメナ』の値は 0.75 である。つまり、座標軸全体の長さは 3.32 の値 ($4.07 - 0.75 = 3.32$) をもったものであることになる。17 世紀の週刊新聞の値の位置を座標軸で示すと、次のようになる。

図 3 : カテゴリー (b) の座標軸上における近いことば性の値



この図からもわかるように、17 世紀初頭の週刊新聞の記事の b) の値は 0.606 であり、近いことば性 100% の値 (4.07) からは 3.464 離れていることになる ($4.07 - 0.606$ (17 世紀の週刊新聞の記事の値) = 3.464)。つまり、「近いことば性」100% の値 (座標の左端) から 104.337% 相当分、座標の右方に向けて離れていることになる ($3.464 \div 3.32 \times 100 = 104.337\dots$)。この結

果から、17世紀初頭の週刊新聞のb)の値は-4.33%の「近いことば性」があることがわかる。同様に、残りのa)、c)、d)も値を算出すると、以下のような結果が得られる。

表6：マクロレベルでの「近いことば性」の値

分析対象	a) NNS／ 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文)／基 礎文 x (副文)	c) 全基礎文 ／中断され ている基礎 文 (I-UBS)	d) 総単語数 ／NNS+全基 礎文
17世紀初頭の週刊新聞	-3.46%	-4.33%	17.37%	-15.03%

a)、b)、d)に関する計算式の結果では、マイナスの値が得られた。これは、Ágel/Hennig (2006) が遠いことば性が 100%あると想定した右端の規準テキストより、17世紀の週刊新聞の記事のほうがさらに「遠いことば性」が高かったことを示している。d) の値の結果からわかるように、17世紀初頭の週刊新聞のテキストでは特に一文を構成する単語数が多く、そのため「遠いことば性」の度合いがより高くなっていると考えられる。

Ágel/Hennig (2006) は a)-d)の値を平均し、得られた値をマクロレベルでの「近いことば性」の値としている。上記の表6で得られたのは4つの値であるので、すなわち-3.46、-4.33、17.37、-15.03の平均値を算出すると、-1.36という値が得られる。すなわち、17世紀初頭の週刊新聞では、マクロレベルにおいて-1.36%の「近いことば性」があったことがわかる。

ミクロレベルにおいて「近いことば性」の値は 6.88%あり、マクロレベルにおいては-1.36%の値であったことから、この2つの値を平均し、最終的に17世紀初頭の週刊新聞には2.76%の近いことば性があったということになる。

3. 印刷ビラ・小冊子、最新報告、週刊新聞における「近いことば性」

3.1. 16 世紀における宗教改革に関わる印刷物の分析

第 1 章ですでに述べたとおり、この時代に流布した印刷ビラと小冊子という文字テキストは、文字の読める者が文字の読めない者に読み聞かせていた。印刷ビラと小冊子は形態が異なるものの、宗教改革者の理念を広めるという点において同等の意味を持っていた。Schwitalla (1983) は、1450 年から 1550 年までの時期の小冊子を次のような物として特徴づけている。

- a) はじめから綴じられておらず、表紙が付けられていなかった。
- b) より大きいテキストの一部として出版されずに、独立したテキストとして出版された。
- c) それがある特定の読者層宛に書かれたとしても、根本的には、ことばの読み書きができる人なら誰でもそれを読み、そして聞いてよい、という意図とともに配布された。
- d) それが受け手に対して特定の意向と見解を伝えようと意図しているものであるため、公益のための議論をめぐる時局にかなった問題が扱われており、公益のために、社会の重要な問題を解決することに貢献しようとした。
- e) これらの社会問題に関する読者や聴衆の立場性を固定しようとした、もしくは変えようとした。そして場合によっては具体的に行動するように、もしくは行動をやめるように要求した。

Schwitalla (1983: 14)

ただし Schwitalla (1999) 自身が、これらの特徴付けないし定義づけに対して、いくつか懐疑的な姿勢を見せている。例えば、小冊子が複数枚によって構成されるという点に関しては、独立した印刷ビラが後に 11 枚まとめて小冊子の形で出版されたこともあった。⁶⁸ しかしながら、Schwitalla (1999) は「複数枚であるという形式的な基準は、小冊子を印刷ビラから区別するには十分である」⁶⁹ と述べている。つまり、例外的に一枚刷りの印刷ビラが集積されて小冊子として出版されることもあったものの、印刷物の枚数は小冊子と印刷ビラを境界付ける最も基本的な要素だと言える。その他にも、装丁されていた小冊子も存

⁶⁸ Schwitalla (1999: 5) を参照。

⁶⁹ Schwitalla (1999: 7)

在し、「外から見たのでは小冊子として構想されたのか、書籍として構想されたのか判断できない」⁷⁰ ものもあったことを、Schwitalla (1999) は挙げている。小冊子のほとんどが全紙四つ折り判のクオート (Quart) であり、印刷ビラはほとんどが全紙二つ折り判のフォリオ (Folio) であった。⁷¹ そして、「小冊子の多くが散文であるのに対し、大体の印刷ビラは韻文が使用されている」。⁷² また、「ほとんどの小冊子には挿し絵が付けられていないのに対して、印刷ビラには挿し絵が付けられていた」。⁷³ さらに、「小冊子を使用する伝達目的というのは、傾向として攻撃的でセンセーショナルな内容を含む印刷ビラよりも、明確に論証することである」⁷⁴。最後の点に関連することとしては、「例えば、知識階層に向けた論証的な小冊子が書かれると、大衆向けには攻撃的な印刷ビラが書かれるという具合に、同じ争い事について補い合った」⁷⁵ ことが指摘されている。Fehr (1924) によれば、「怒涛の宗教改革の時代において、印刷業者は、学者には書籍を、知識階層には小冊子を、そして民衆には印刷ビラをとというふうに三様に、彼らの技能をうまく発揮した」。⁷⁶ つまり、それぞれの印刷物は、特定の受け手 (読者層) に向けられていたことがわかっている。

音声によって読み聞かせられたこれらのテキストには、文の短さや呼びかけ語の多用など、高い「近いことば性」が見られるという指摘がなされている。例えば Schwitalla (2000) は、「小冊子というメディアは、口語性を容易に思い起こさせる」⁷⁷ と述べ、「宗教問答の著者の中には、文の長さに関して意図的に簡易な文体にしようと努力した者もいる。その文はほとんどが短く、今日的な話しことばに近い」⁷⁸ としている。また Schwitalla (1999) は、小冊子に「しばしば話しことば的な手法 (感嘆表現、呼びかけ、疑問文) や諺、慣用語なども使用された」⁷⁹ ことを指摘している。この「近いことば性」の高さは、初期宗教改革時代に「宗教改革の中心的なテーマの内容を扱っていた [...] 論証的な教義文書の大部分が対話形式 (Dialog) で」⁸⁰ 書かれていたことと関連している。Schuster (2001) においても、小冊子では「そのドイツ語が広範囲にまた広く広がっていくことを目的にして、

⁷⁰ Schwitalla (1999: 6)

⁷¹ Schwitalla (1983: 15) を参照

⁷² Schwitalla (1999: 7)

⁷³ Schwitalla (1999: 7)

⁷⁴ Schwitalla (1999: 7)

⁷⁵ Schwitalla (1999: 7)

⁷⁶ Fehr (1924: 3)

⁷⁷ Schwitalla (2000: 674)

⁷⁸ Schwitalla (1999: 36)

⁷⁹ Schwitalla (1999: 36)

⁸⁰ Schwitalla (1983: 67)

習慣的な対話の仕方 (Dialogstradition) を文字化するよう大いに努められた」⁸¹ と述べられている。印刷ビラについても Meuche (1976) が、「宗教改革と農民戦争時代の印刷ビラには独自の印刷ビラことば (Flugblattsprache) が生じた」⁸² と指摘し、「そのことばというのは、短さ、具体性、対比 [...] などによって特徴付けられる」⁸³ としている。

このような先行研究を踏まえ、以下では、宗教改革に関する印刷物テキストに実際にどの程度の「近いことば性」があったのかを測定する。宗教改革に関する印刷ビラ 1 点と、小冊子 1 点を分析対象とする。

3.1.1. 『マルティン・ルター氏の肖像』の印刷ビラ

宗教改革に関する印刷ビラとして、1550 年頃にマルティン・ルターに関して書かれた「マルティン・ルター氏の肖像」(,Ware Contrafactur Herrn Martin Luthers‘) というタイトルで流布した宗教的な印刷ビラを分析する。⁸⁴ まずは、対象となる全テキストを以下に示す。⁸⁵

Allmechtiger Ewiger Gott/ wie ist nur die Welt ein ding/ wie sperret sie den leutten die meüler auff/ wie klein vnd gering ist das vertrauen der menschen auff Gott/ wie ist das Fleisch so zart vnd schwach/ vnnd der Teüffel so gewaltig vnd geschefftig/ vnd nur durch seiner Apostel vnd Weltweisen/ wie zeuhet sy so baldt die handt ab/ vnd schnurt dahin/ leufft die gemeine ban(e)/ vnd den weitten weg der hellen zü/ da die Gottlosen hin gehören / vnd sihet nur allein bloß an/ was prechtig vnd gewaltig/ groß vnd mechtig ist/ vnd ein ansehen hat: Wan(n) ich mein augen dahin wenden sol/ so ist es schon mit mir auß/ die glocke ist schon gegossen/ vnd das vrtheyl gefellet. Ach Gott/ ach Gott O Gott/ du mein Gott/ du mein Gott/ stehe du mir bey/ wider aller welt vemunfft vnd weißheit/ thue du es/ du must es thün/ du allein/ ist es doch nit mein/ sonder dein sache/ hab ich doch vor mein person allhie nichts züschaffen/ vnd mit disen grossen Herren der Welt züthün / wölt ich doch auch wol gütte geruhige tåg haben vnd vnuerworren sein/ aber dein dein ist die sach Herre/ die gerecht vn(d) Ewig ist/ stehe mir bey/ du trewer Ewiger Gott/ ich

⁸¹ Schuster (2001: 20)

⁸² Meuche (1976: 8)

⁸³ Meuche (1976: 8)

⁸⁴ Schilling (1990) によれば、当時の印刷ビラの 80%以上の作者が未だ不明なままである (Schilling1990: 13 を参照)。小冊子の作者に関しては、小野 (2006:145) を参照。

⁸⁵ 出典: Harms, Wolfgang/Schilling, Michael (Hg.) (1997): *Die Wickiana. Die Sammlung der Zentralbibliothek Zürich, kommentierte Ausgabe, Teil I/II* (Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. Jahrhunderts, Bd. 6/7), Tübingen. S. 107.

verlasse mich auff keine(n) menschen/ es ist vmb sunst vnd vergebens/ es hincket alles was fleischlich ist/ vnd nach fleisch schmecket. O Gott Gott O Gott/ hörest du nicht mein Gott/ bist du Todt? Nein/ du kanst nicht sterben/ du verbirgst dich allein. hast du mich zu erwölet/ das ich die warheit fördern sol/ ich frage dich/ wie ich es dan(n) gewiß weiß/ Ey so wallt[sic!] es Gott/ Dan(n) ich mein lebenslang/ nie wider solche grosse Herrn zusein gedacht/ hab mir es auch nie vorgenom(m)en/ Ey Gott/ so stehe mir bey/ in dem nam(m)en deines lieben Suns Jesu Christi/ der mein schutz vnd schirm sein sol/ ia mein feste burgck/ durch krafft vnd sterckung deines Heyligen Geistes. Herr wo bleibst du? du mein Gott/ wo bist du/ kom(m)/ kom(m)/ ich bin bereit/ auch mein leben darumb zülaffen/ gedultig wie ein Lemlein/ dan(n) gerecht ist die sache vnd dein/ so will ich mich von dir nit absundern Ewigklich/ d(a)z sey beschlossen/ Ewiglich sage ich in deinem nam(m)en/ die Wellt müß mich vber mein gewissen wol vngezwungen lassen/ vnd wan(n) sy noch voller Teüffel were/ vnd solt mein leyb/ der doch zöuor deiner hende wreck vnd geschöpff ist/ drüber zu grundt vnd boden/ ia zü drüemern gehn/ dafür aber dein Wort vnd Geist mir gütt ist/ vnd ist auch nur vmb den leyb zuthün/ die Seel ist dein vnd gehört dir zu/ vnd bleibt auch dir Ewig/ Gott hulff mir. Amen in Gottes nam(m)en Amen.

この「マルティン・ルター氏の肖像」のテキストでは、マイクロレベルにおいて以下のような「近いことば性」の高い要素が確認できる。まずは、それぞれ数え上げられた項目を以下の表に示す。

表7:「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ピラにおけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素とカウントされる項目	「近いことば性」の要素の分類
Allmechtiger Ewiger Gott	呼びかけ
ist ... ein Ding	時制の直示表現
sperret ... auf	時制の直示表現
ist ...klein vnd gering	時制の直示表現
ist ... zart vnd schwach	時制の直示表現

zeuhet ... ab	時制の直示表現
schnur...dahint	時制の直示表現
leufft ... zü	時制の直示表現
sieht ... an	時制の直示表現
gehören	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
ansehn hat	時制の直示表現
ich	人称の直示表現
mein (Augen)	人称の直示表現
ist ... aus	時制の直示表現
(mit) mir	人称の直示表現
ist gegossen	時制の直示表現
(ist) gefellet	時制の直示表現
Ach Gott	情緒の表出
Ach Gott	情緒の表出
O	間投詞
O Gott	情緒の表出
du	人称の直示表現
mein Gott	人称の直示表現
du	人称の直示表現
mein Gott	人称の直示表現
stehe ...bei	人称の直示表現
stehe	命令形
du	強調
wider aller wellt vemunfft vnd weißheit	枠外配置
thue	人称の直示表現
thue	命令形
du	強調

must thün	時制の直示表現
du	人称の直示表現
ist doch nit mein	時制の直示表現
mein	人称の直示表現
sonder (ist) dein sache	時制の直示表現
dein(sache)	人称の直示表現
hab ich doch vor mein person allhie nichts zuschaffen	定動詞第一位の平叙文
hab	時制の直示表現
hab	語末音消失
ich	人称の直示表現
mein (person)	人称の直示表現
wölt ich doch auch wol gutte geruhige täg haben	定動詞第一位の平叙文
und vnuerworren sein	定動詞第一位の平叙文
ich	人称の直示表現
dein	人称の直示表現
dein	人称の直示表現
dein dein	繰り返し
Herre	呼びかけ
stehebei	時制の直示表現
stehebei	命令形
mir	人称の直示表現
du trewer Ewiger Gott	人称の直示表現 (呼びかけ)
ich	人称の直示表現
verlasse	時制の直示表現
mich	人称の直示表現
es ist vmb sunst vnd	時制の直示表現

vergebens	
hincket	時制の直示表現
O Gott Gott	呼びかけ
O Gott	情緒の表出
hörest	時制の直示表現
du	人称の直示表現
mich	人称の直示表現
mein Gott	呼びかけ
bist ... Todt	時制の直示表現
du	人称の直示表現
du	人称の直示表現
kanst	時制の直示表現
du	人称の直示表現
verbirgst	時制の直示表現
hast du mich zu erwölet	定動詞第一位の平叙文
verbiirgst	時制の直示表現
dich	人称の直示表現
hast erwölet	時制の直示表現
du	人称の直示表現
mich	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
frage	時制の直示表現
dich	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
Ey	情緒の表出
ich	人称の直示表現
mein (lebenlang)	人称の直示表現
hab mir es auch nie	定動詞第一位の平叙文

vorgenom(m)en	
hab vorgenom(m)en	時制の直示表現
hab	語末音消失
mir	人称の直示表現
Ey Gott	情緒の表出
stehebei	時制の直示表現
stehebei	命令形
in dem namen deines lieben Suns Jesu Christi	枠外配置
deines	人称の直示表現
mein (Schutz vnd schirm)	人称の直示表現
ia	強調
mein (feste burgck)	人称の直示表現
Herr	呼びかけ
du	人称の直示表現
bleibst	時制の直示表現
mein	人称の直示表現
du mein Gott	呼びかけ
bist	時制の直示表現
du	人称の直示表現
kom(m)	命令形
kom(m)	時制の直示表現
kom(m)	命令形
kom(m)	時制の直示表現
ich	人称の直示表現
bin ... bereit	時制の直示表現
mein (leben)	人称の直示表現
ist gerecht	時制の直示表現
(ist) dein	人称の直示表現

will	時制の直示表現
ich	人称の直示表現
mich	人称の直示表現
(von) dir	人称の直示表現
Ewigklich	枠外配置
sage	時制の直示表現
ich	人称の直示表現
deinem nam(m)en	人称の直示表現
mich	人称の直示表現
mein (gewissen)	人称の直示表現
mein (leyb)	人称の直示表現
deiner (hende werck)	人称の直示表現
ia	強調
dein (Wort)	人称の直示表現
mir	人称の直示表現
ist (dein)	時制の直示表現
(ist) dein	人称の直示表現
gehört ...zu	時制の直示表現
bleibt	時制の直示表現
dir	人称の直示表現
mir	人称の直示表現
Amen in Gottes nam(m)en	間投詞
Amen	間投詞

「近いことば性」の要素として例えば、*O Gott* は、「情緒の表出」である。「おお、神よ」という表現は、感情的であり近いことば的であるということになる。また、「時制の直示表現」や *du* を使用した「人称の直示表現」がカウントされた。さらに、マイクロレベルにおいては、Ágel/Hennig (2006) のモデルでは、命令形は2ポイントの「近いことば性」を数えることとなっている。すなわち「一つのポイントとしては命令形であること、そしてもう

一つのポイントとしては人称の直示表現 (Personaldeixis) であること」に対してである。⁸⁶ したがって、例えば上のテキストにある命令形 *stehe bei* には、ミクロレベルで2ポイントが与えられる。「マルティン・ルター氏の肖像」に含まれる近いことばの要素の合計は、137ポイントである。137を全体の単語数が449語で割ると、0.305という値が得られる ($137 \div 449 = 0.305\dots$)。これは100語あたり30.5回の「近いことば」の要素があったことになる。この結果を基準テキストの値である0.63と比較することで、48.41%という値が得られる ($0.63 : 100 = 0.305 : X$)。したがって、「マルティン・ルター氏の肖像」には、ミクロレベルで48.41%の「近いことば性」がある。

次に、「マルティン・ルター氏の肖像」のテキストについてマクロレベルにおいて「近いことば性」の要素としてカウントされる項目を、以下の表に示す。

表8: 「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラにおけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Allmechtiger Ewiger Gott	NNS
wie ist nur die Welt ein ding	E-1
wie sperret sie den leutten die meüler auff	E-1
wie klein vnd gering ist das vertrauen der menschen auff Gott	E-1
wie ist das Fleisch so zart vnd schwach	E-1
vnnnd der Teüffel so gewaltig vnd geschefftig	E-1
vnd nur durch seiner Apostel vnd Weltweisen	NNS
wie zeuhet sy so baldt die handt ab	E-1
vnd schnurt dahin /	E-1
leufft die gemeine ban(e) vnd den weitten weg der hellen zü	E-1
da die Gottlosen hin gehören	E-x
vnd sihet nur allein bloß an	E-1
was prechtig vnd gewaltig (ist) groß (was) vnd mechtig ist	E-x
vnd ein ansehen hat:	E-x
Wan(n) ich mein augen da hin wenden sol	E-x

⁸⁶ Ágel/Hennig (2006: 52)

so ist es schon mit mir auß	E-1
die glocke ist schon gegossen	E-1
vnd das vrtheyl gefellet	E-1
Ach Gott	NNS
ach Gott	NNS
O Gott	NNS
du mein Gott	NNS
du mein Gott	NNS
stehe du mir bey	E-1
thue du es	E-1
du must es thün	E-1
du allein	NNS
ist es doch nit mein / sonder dein sache	E-1
hab ich doch vor mein person allhie nichts zuschaffen vnd mit disen grossen Herren der Wellt zuthün	E-1
wölt ich doch auch wol gütte geruhige täg haben	E-1
vnd (wölt ich) vnuerworren sein	E-1
aber dein dein ist die sach	E-1
Herre	NNS
die gerecht vn(d) Ewig ist	E-x
du trewer Ewiger Gott	NNS
ich verlasse mich auff keine(n) menschen	E-1
es ist vmb sunst vnd vergebens	E-1
es hincket alles	E-1
was fleischlich ist	E-x
vnd (was) nach fleisch schmecket	E-x
O Gott Gott	NNS
O Gott	NNS
hörest du nicht	E-1

mein Gott	NNS
bist du Todt?	E-1
Nein	NNS
du kanst nicht sterben	E-1
du verbirgst dich allein	E-1
hast du mich darzu erwölet	E-1
das ich die warheit fördern sol	E-x
ich frage dich	E-1
wie ich es dan(n) gewiß weiß	E-x
Ey	NNS
so wallt es Gott	E-1
Dan(n) ich mein lebenslang / nie wider solche grosse Herrn zusein gedacht	E-x
hab mir es auch nie vorgenom(m)en	E-1
Ey Gott	NNS
Ey Gott/ so stehe mir bey/ in dem nam(m)en deines lieben Suns Jesu Christi/ der mein schutz vnd schirm sein sol/ ia mein feste burgck	E-1
in dem nam(m)en deines lieben Suns Jesu Christi/ der mein schutz vnd schirm sein sol/ ia mein feste burgck	E-x
in dem nam(m)en deines lieben Suns Jesu Christi/ der mein schutz vnd schirm sein sol/ ia mein feste burgck	I-UBS
Herr	NNS
wo bleibst du?	E-1
du mein Gott	NNS
wo bist du	E-1
ich bin bereit /	E-1
auch mein leben darumb züllassen	E-x
dan(n) gerecht ist die sache vnd dein	E-x

so will ich mich von dir nit absundern	E-1
d(a) sey beschlossen	E-1
Ewiglich sage ich in deinem nam(m)en	E-1
die Wellt müß mich vber mein gewissen wol vngezwungen lassen	E-x
vnd wan(n) sy noch voller Teüffel were	E-x
vnd solt mein leyb / der doch zuor deiner hende werck vnd geschöpff ist drüber zu grunde vnd boden (gehn) ia zu drüern gehn	E-1
der doch zuor deiner hende werck vnd geschöpff ist	E-x
der doch zuor deiner hende werck vnd geschöpff ist	I-UBS
darfür aber dein Wort vnd Geist mir gütt ist	E-x
vnd ist auch nur vmb den leyb zuthün	E-x
die Seel ist dein	E-1
vnd gehört dir zu	E-1
vnd bleibt auch dir Ewig	E-1
Gott hulff mir	E-1
Amen in Gottes nam(m)en	NNS
Amen	NNS

ここで注意しなければならないのは、命令形がマクロレベルにおいて何にも分類をされていないということである。というのも、「命令形は、人称の関連性がマクロレベルにおいて実現されない」⁸⁷ からである。その代わりに、マイクロレベルにおいて命令形には2つの「近いことば性」の要素が与えられる。

マクロレベルにおいて上記のようにカウントした結果、NNSが20、基礎文1が43そして、基礎文xが18、I-UBSが2となる。

⁸⁷ Ágel/Hennig (2006: 52)

表 9 : 「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラにおけるマクロレベルでの「近いことば」の要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	I-UBS
449	20	61	43	18	2

数え上げられたそれぞれの項目を以下の表の 4 つの計算式 a) から d) に当てはめ、計算すると、a)では 0.327、b)では 2.388、c)では 30.5、d)では 5.543 という結果が得られた。

表 10 : 「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラにおけるマクロレベルでの 4 つの計算値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
0.327	2.388	30.5	5.543

この結果からそれぞれ 4 つの項目から以下の 4 つのパーセンテージが得られる。

表 11 : 「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラにおけるマクロレベルでの「近いことば性」の値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
43.13%	49.33%	21.15%	76.30%

この 4 つの計算式で得られたパーセンテージの値の平均を算出すると、47.47%という値が得られる。

ミクロレベルで得られた 48.41%という値と、マクロレベルで得られた 47.47%という値から平均値を算出すると、「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラのテキストには、最終的に 47.94%の「近いことば性」の値があると言える。

3.1.2. 宗教的な小冊子に関する分析

次に宗教改革に関する小冊子として、「第2の盟友。イースター等の前の40日間の断食について。これによってキリスト者がいかに痛ましい負担を強いられているかについて。」

(„Der ander bundtsgnosz. Vom fasten der .xl. tag vor Osteren vnd andern, wie do mit so jämerlich wirt beschwärt das Christenlich volck.“) というタイトルの小冊子进行分析する。これは、Eberlin von Günzburg が断食に抗議した小冊子である。この宗教的な小冊子は1521年に流布した。この小冊子のうち、16頁1行目から17頁21行目までの総語数539語の部分进行分析対象とした。以下に、対象としたテキスト部分を示す。⁸⁸

Es haben zü samem geschworen vnser fünffzehen, wir wöllen entdecken gemeinen christen, mit was lästerlicher vntrüglicher burde sy beladen sind, vnd sol vnser jetlicher sin rat vnd arbeit vff ein tag vßrichten mit anschlag vnd würckung, Also das jetlicher ee dann er anfach sich zü bedencken vor dem helgen[sic!] Crucifix got bitten vmb inspruch vnd hylff solichs ze thün nach seinem gefallen, nach solichem vßgericht hab ich anderer bundtsgnoß mich bedacht zü schriben von dem viertzig täglichen fasten dar ab alle menschen klagen, vnd stande mir got by, das ich die warheit schryb. Eüch allen ist zü wissen, das alle christenheit welche läben wöllen yn ghorsam Römisch bischoffs iärlich gezwungen werden vff dem predig stül vnd im bychthuß zü fasten vom äscher mitwoch biß ostern alle tag on dispensierung vnd vßzug, eins hab dann erlobnüß von seim bychtvatter, den es vor faßnacht heimgeladen hab zü huß vnd im sein kragen gefült, vnd im verheissen dar zü ein gut fasten küchlin. Nun beger ich lieben fründ, ziehen minen rot yn härtzlich vnd vemünfftig vrthail, dar nach beschliesent was eüch gefalt. Ist es nit ein blinder volg, das ir glouben geben den vollen, büchigen predigern so sy eüch sagen christlich kirch hab gebotten by todt sünd ze halten so vyl tag vnvhörlich zü fasten. Das ist aber noch schimpfflicher, so sie vffzeichnen in mathematischer vßrechnung welche da von entschuldiget siend, oder nit, vnd doch da by allwegen ein angel der scrupuly lassen yn den gewissen, als ob man vyllicht aigner blödigkeit zu vyl gloube, do mit vnvhörlich vnriw bleibt yn christlichen härtzen, vnd do durch solich buchvätter vnd märlin prediger all weg zü schaffen haben mit den leüten, so sy parnosisch[sic!] im

⁸⁸ 出典：Enders, Ludwig (Hg.) (1869): *Ausgewählte Schriften. Johann Eberlin von Günzburg*. Bd. 1. Halle a.S. (Flugschriften aus der Reformationszeit XI). (ページ数なし)

gewissen vrtailen vnd erschrecken. Wie wol nit darthon mag werden gebot der gemeinen christenheit von disem vasten, doch ob schon gebot do von gefunden wurde, mag nit dargethon werden grüntlich, das soliche fast betröff die gmein by todtünd. Es sol auch nit da für gehalten werden. Im herten gsatz moysi ist vyl vom fasten gschriben, aber an keim ort findest, verpflichtet zu todtünd, so jemandt es vbergieng. Wie ist dann ein gouckelman so kün vnd darff on hüthaben sagen, im newen gsatz sy solichs yn gemelter gestalt gebotten. So doch im newen wir gar erläßt sind von solichen schweren bürdin, als auch vßweißst sant Paulus lere. Sich wie groß arbeit ist im teütschen land, durch auß in allen menschen, also das man sagt, ein Cardinal hab solichs ein mol gesehen vnd an gezaigt dem bapst, wie arbeitsam teütsche nation sy vnd nit yn vff zu legen sy[sic!] grosse fasten, doch hab man solich fasten yn nit abgenummen, sunder meer für ein vberzalig werck lon bliben. hn gantzen jar ist nit grösser arbeit im fäld dann in der fasten. Do zu ist teütschland an vyl orten nachgültiger narung, an wenig orten ist wein. An vil orten müß man by grosser arbeit benüig[sic!] sein an kalten erbiß, bonen, vnd durren byren, hutzlen genant. An keim ort wachßt boum öl. Wer wolt sagen das den arbeitsamen leyen vffgelegt werde von der milten barmhertzigen muter der Christenheit ein so schwär ioch, das gütwillig christen yn stäte vnruw der gewissen setzte, so sie solich tyrannisch gebot etwan vß burgerlicher not vberträten.

この小冊子のテキストについて、マイクロレベルにおいて「近いことば」の要素としてカウントされる要素は、以下の表のとおりである。

表 12 : Eberlin von Günzburg の小冊子におけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素とカウントされる項目	「近いことば性」の要素の分類
haben geschworen	時制の直示表現
wir	人称の直示表現
gemeinen christen	付け足し
mit was	凝集的な疑問詞
vff	音声語
vßrichten	音声語

mit anschlag vnd würckung	枠外配置
vnsen	人称の直示表現
nach seinem gefallen	枠外配置
hab ...mich bedacht	時制の直示表現
hab	語末音消失
ich	人称の直示表現
mich	人称の直示表現
stande ...bey	時制の直示表現
mir	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
Eüch	人称の直示表現
ist	時制の直示表現
hab	語末音消失
hab	語末音消失
beger	時制の直示表現
beger	語末音消失
ich	人称の直示表現
lieben fründ	呼びかけ
minen (rot)	人称の直示表現
eüch	人称の直示表現
Ist...ein blinder volg	時制の直示表現
ir	人称の直示表現
eüch	人称の直示表現
ist...schimpfflicher	時制の直示表現
in mathematischer vßrechnung	枠外配置
vßrechnung	音声語
yn den gewissen	枠外配置
yn christlichen herten	枠外配置
mit den leüten	枠外配置

mag nit dargehton werden	時制の直示表現
sol gehalten werden	時制の直示表現
Wie ist...kün	時制の直示表現
darff	時制の直示表現
wir	人称の直示表現
von solichen schweren bürdin	枠外配置
wir sind	時制の直示表現
vßweiß	音声語
ist groß	時制の直示表現
hab	語末音消失
hab	語末音消失
vff	音声語
hab	語末音消失
ist nit grösser	時制の直示表現
dann in der fasten	付け足し
ist	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
müß benüigig sein	時制の直示表現
hutzeln genant	付け足し
wachßt	時制の直示表現
vffgelegt	音声語
vß	音声語

上の表のように、この小冊子では、「近いことば性」の要素として 57 ポイントがカウントされた。この数えられた値を全体の単語数である 539 語で割ると、0.105 という値が得られる ($57 \div 539 = 0.105\dots$)。この値は、100 語あたり 10.5 回の「近いことば」の要素があったことを意味している。この値を規準テキストの値である 0.63 と比較すると、16.66% という値が得られる ($0.63 : 100 = 0.105 : X$)。したがって、当該の小冊子が有するマイクロレベルにおける「近いことば性」は、16.66%である。

次に、この小冊子をマクロレベルで分析してみる。まずは、このテキストについてマクロレベルにおいて「近いことば性」の要素としてカウントされる項目を、以下の表に示す。

表 13 : Eberlin von Günzburg の小冊子におけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Es haben zû samen geschworen vnser fünffzehen	E-1
wir wöllen entdecken gemeinen christen	E-1
gemeinen christen	NNS
mit was lästerlicher vntrüglicher burde sy beladen sind	E-x
vnd sol vnser jetlicher sin rat vnd arbeit vff ein tag vßrichten	E-1
Also das jetlicher ee dann er anfach sich zû bedencken vor dem helgen Crucifix got bitten vmb inspruch vnd hylff	E-x
sich zû bedencken	E-x
bitten vmb inspruch vnd hylff	E-x
solichs ze thün	E-x
nach sollichem vßgericht hab ich anderer bundsgnoß mich bedacht	E-1
zû schriben von dem viertzig täglichen fasten	E-x
dar ab alle menschen klagen	E-x
vnd stande mir got by	E-1
das ich die warheit schryb	E-x
Eüch allen ist zû wissen	E-1
das alle christen heit welche läben wöllen yn ghorsam Römisch bischoffs iärlich gezwungen werden	E-x
welche läben wöllen	E-x
welche läben wöllen	I-UBS
vff dem predig stül vnd im bychthuß zû fasten	E-x
eins hab dann erloubnüß von seim bychtvatter	E-x
den es vor faßnacht heimgeladen hab	E-x

vnd im sein kragen gefült	E-x
vnd im verheissen dar zû ein gût fasten küchlin	E-x
Nun beger ich	E-1
lieben fründ	NNS
ziehen minen rot yn hartzlich vnd vernünfftig vrthail	E-x
dar nach beschliesent	E-x
was eüch gefalt	E-x
Ist es nit ein blinder volg	E-1
das ir glouben geben den vollen, büchigen predigern	E-x
so sy eüch sagen	E-x
christlich kirch hab gebotten by todt sünd ze halten	E-x
by todt sünd ze halten	E-x
so vyl tag vnvffhörlich zû fasten	E-x
Das ist aber noch schimpfflicher	E-1
so sie vffzeichnen	E-x
welche da von entschuldiget siend	E-x
oder nit	E-x
vnd doch da by allwegen ein angel der scrupuly lassen	E-x
als ob man vyllicht aigner blödigkeit zû vyl gloube	E-x
do mit vnvffhörlich vnruw bleibt	E-x
vnd do durch solich buchvätter vnd märlin prediger allweg zû schaffen haben	E-x
so sy parnosisch im gewissen vrtailen vnd erschrecken	E-x
Wie wol nit darthon mag werden gebot der gemeinen christenheit von disem vasten	E-x
doch ob schon gebot do von gefunden wurde	E-x
mag nit dargethon werden grüntlich	E-1
das soliche fast beträff die gmein by todtsünd	E-x
Es sol auch nit da für gehalten werden	E-1

Im herten gsatz moysi ist vyl vom fasten gschriben	E-1
aber an keim ort findest	E-1
verpflicht zû todtsünd	E-x
so jemandt es vbergieng	E-x
Wie ist dann ein gouckelman so kün	E-1
vnd darff on hüthaben sagen	E-1
im newen gsatz sy solichs yn gemelter gstalt gebotten	E-x
So doch im newen wir gar erläßt sind	E-x
als auch vßweiß sant Paulus lere	E-x
wie groß arbeit ist im teütschen land durch auß in allen menschen	E-x
also das man sagt	E-x
ein Cardinal hab solichs ein mol gesehen	E-x
vnd angezaigt dem bapst	E-x
wie arbeitsam teütsche nation sy	E-x
vnd nit yn vff zu legen sy grosse fasten	E-x
doch hab man solich fasten yn nit abgenummen	E-x
sunder meer für ein vberzalig werck lon bliben	E-x
Im gantzen jar ist nit grösser arbeit im fäld	E-1
dann in der fasten	NNS
Do zu st teütschland an vyl orten nachgültiger narung	E-1
an wenig orten ist wein	E-1
An vil orten muß man by grosser arbeit benüigig sein an kalten erbiß, bonen, vnd durren byren,	E-1
hutzeln genant	NNS
An keim ort wachßt boum öl	E-1
Wer wolt sagen	E-1
das den arbeitsamen leyen vffgelegt werde (von der milten barmhärtzigen muter der Christenheit) ein so schwär ioch	E-x

das gütwillig christen yn stäte vnruw der gewissen setzte	E-x
so sie solich tyrannisch gebot etwan vß burgerlicher not vberträgen	E-x

上の表のように、マクロレベルではNNSが4、基礎文1（主文）が21、基礎文x（副文）が50、そして別の基礎文によって中断された基礎文（I-UBS）が1観察される。この結果を表にまとめると、以下のようになる。

表 14 : Eberlin von Günzburg の小冊子におけるマクロレベルでの「近いことば性」の要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	I-UBS
539	4	71	21	50	1

「近いことば」の要素として数え上げられたそれぞれの項目を以下の表の4つの計算式 a) から d) に当てはめ、結果を以下の表に示す。

表 15 : Eberlin von Günzburg の小冊子におけるマクロレベルでの4つの計算値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
0.056	0.42	71	7.186

この結果から、a)、b)、c)、d)について、以下の表のようなパーセンテージが得られる。

表 16 : Eberlin von Günzburg の小冊子におけるマクロレベルでの「近いことば性」の値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
2.26%	-9.93%	59.39%	37.08%

この b) から d) の 4 つの結果を平均すると、Eberlin von Günzburg の小冊子には、マクロレベルでは 22.2%の「近いことば性」があると言うことができる。

この小冊子においては、ミクロレベルの「近いことば性」の値は 16.66%であり、一方、マクロレベルの「近いことば性」の値は、22.2%であった。この二つの値を平均すると、19.43%という値となる。従って、Eberlin von Günzburg の小冊子のテキストには、最終的に 19.43%の「近いことば性」があると測定される。

3.1.3. 16 世紀の宗教改革に関する印刷物の言語的特徴

以上の各テキストにおける近いことば性について、比較し考察してみたい。

16 世紀における宗教改革に関する印刷物を分析すると、結果としてそれぞれ印刷ビラでは 47.94%、そして小冊子では 19.43%という「近いことば性」の値がえられた。同時代において、宗教改革という同様のテーマを扱っているにもかかわらず、印刷ビラと小冊子とは、メディアの形態の違いだけでなく、テキストの「近いことば性」の値にも違いが確認できた。挿し絵が付随した「マルティン・ルター氏の肖像」の印刷ビラでは、ルターが神に語りかけているテキスト構成になっている。例えば、*O Gott/ hörest du nicht mein Gott/ bist du Todt?* に見られるように感情を表すような *O Gott* や神を *du* と呼ぶことによる、人称の直示表現が多く観察された。このような要素は、ミクロレベルの「近いことば性」の要素として数えられるため、この印刷ビラに高い「近いことば性」の値を与える一つの要因となっているといえるだろう。また、マクロレベルにおいて、*mein Gott* のような呼びかけや、*nein* といった応答詞は NNS (Nähe-Nicht-Satz) として数えられ、「近いことば性」の要素として測定される。さらに、主文の数が副文の数よりも多かったことも、高い「近いことば性」の値につながったと考えられる。一方で Eberlin von Günzburg の小冊子では、印刷ビラの場合とは異なり、語りかけるというよりは、モノローグの文体となっており、黙読が想定されていた。そのため、論理関係を明確に表現する副文、すなわち基礎文 x が多く使用されていたと考えることができる。この小冊子は、ミクロレベルにおける「近いことば」の要素として人称の直示表現である *ich* や *wir* の使用が観察されるが、マクロレベルでは、主文より副文の使用される頻度が高いため、このことが「近いことば性」を低くする要因となっている。このような点から、ルターに関する印刷ビラよりも Eberlin von Günzburg の小冊子の方が、「近いことば性」の値が低くなったと考えられる。

3.2. 16 世紀における「最新報告」の分析

この節で分析対象として扱う「最新報告」(Neue Zeitung) は、本論文の 1.1 でも少し触れたように、「近代の新聞雑誌のルーツを成すもの」⁸⁹ とみなされ、「1480 年頃にドイツ語地域で発生し、ヨーロッパ全域に広がり、そして 17 世紀末までにさまざまな内容と外形で存在が確認できる」⁹⁰。「最新報告」には、「主に少し前に起こった出来事について一つもしくはいくつかの報告がその土地のことばによって叙述されており、[...] 多くの場合、挿し絵がつけられている」。⁹¹ さらに Schröder (1995) によれば、「特に 16 世紀半ばから 17 世紀半ばは、挿絵付きの印刷ビラにとって重要な時代で、かなり早い段階から新聞が個々に書かれ印刷の形状で発刊された」⁹² という。定期的な発行という形態はとらなかったものの、「最新報告」によってこの時代から紙媒体を使用した報道が始まったといえる。

3.2.1. エスリンゲンの乙女に関する「最新報告」の分析

16 世紀の「最新報告」として、2 つのテキストを分析する。

まず一つ目は、1549 年に流布した「エスリンゲンの乙女」(,Die Jungfrau zu Eßlingen‘) である。この印刷ビラでは、エスリンゲンに住む、お腹が異常に膨れてしまった一人の乙女について書かれている。テキストは散文部分と韻文部分で構成されているが、「近いことば性」を分析することが目的であるので、散文部分のみを分析の対象とした。以下に、対象部分となるテキストを示す。⁹³

Dise Junckfraw ist von from(m)en ehrlichen aeltern Wingartleuten geporn/ so wonhafftig seind zu Eßlingen/ in der vorstatt Blaesen/ in der Schirmnacher gassen/ vnd ist jr vatter Hans Vlmer/ die mueter Margreta/ vnd haben noch bey leben vier toechter/ vnder welchen die aelteste/ so auff der heiligen drey Koenig tag dises 49. jars/ 22.jar alt ist/ mit solcher vnerhoerten vnd vbernatürlichen geschwulst (wie hie vor augen abgemalt) beladen ist/ vnd wirt jetzt in dem Aprill dises 49. jars vier

⁸⁹ Schröder (1995: 18)

⁹⁰ Schröder (1995: 16)

⁹¹ Schröder (1995: 16)

⁹² Schröder (1995: 13-14)

⁹³ 出典：田辺幹之助、佐藤直樹（編）(1995)『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館. 39 頁.

jar/ daß sie hat angefangen zu geschwellen/ vnd lenger dann drey jar kein warme speiß genossen.
 So wirt es auff S. Jacobs tag drey jar/ daß jr leib beschlossen gewesen/ also daß sie ein zeitlang alle
 jr vber flüssigkeit vnd reinigung/ durch den mund hat von sich geben. Aber in zuekünfftigem
 Herbst wirt es zwei jar/ daß weder oben noch vnden mehr etwas von jr kom(m)en/ Vnd gelebt sie
 keiner andern auffenthaltung/ dan(n) Apoteckischer labung/ eingemachts dings vnd obs/ dessen sie
 sich zu erfrischung des munds thuet gebrauchen/ doch als bald wider außspeiet/ auch kein wein
 trinckt/ sonder allein die hitz vn(d) dürre zu leschen jren mund mit wasser kuele/ dan(n) sie weder
 essen noch trincken verdaewen kan/ Vnd seind sonst noch alle glider/ on den bauch/ glidmaessig/
 zart vnd ran/ Doch fahet jr auch jetzt der halß an etwas auff zulauffen vnd zu geschwellen. Der
 Bauch aber (welcher so groß ist/ wie diser strich 16. ringßweis begreifen/ mit schlaiern vn(d)
 handzweheln gebunden) nim(m)et noch taeglich je mehr zue/ vnd wechst/ Vnd so sie den selbigen
 etwan zuuil beweget oder bemuehet/ beumet er sich erschroecklich so hoch auff/ also daß er jr auch
 das angesicht bedecked/ vnd ist jr groester schmerz/ daß sie nun drey viertel jar im(m)erdar zu beth
 ligen/ vnd mit angespannten fuessen den schweren last auff jren knien halten mueß. Doch ist sie in
 allem disen fast gedültig/ freundlichs gesprächs/ schoenen angesichts/ gueter farb/ rotten munds/
 vnd ist derhalben von Key. Mai. Doctoren vnd Hoffgesind/ auch sonst von Fürsten vn(d) Herren/
 vnd Edelleuten on zal/ nit on grosse verwunderung besichtiget worden/ vn(d) wirt noch taeglich
 von vilen so durch reisen (deren jeder das meß mit sich nim(m)t) ersuchet. Dieweil aber rneniglich
 auch ein truck daruon begeret/ bin ich Hans Schiesser Maler zu Wormbs (dieweil ich auch das
 vorige Junckfräwlin von Rod/ das so lange zeit nicht hat gessen/ ab contrafect hab) auch jetzunder/
 fürnemlich von diser krancken Person/ vnd nachmals von jren ältern vnd andern der Statt Eßlingen
 gebetten worden/ dises wunder/ souilich selbs persoendlich gesehen/ vnd von jr bericht bin worden/
 an tag zu bringen vnd zu publicieren/ vnd jr solchs zü zuschicken/ auff das die jhenigen so das meß
 von jr bringen/ auch jr selbs Contrafactur vnd gestalt moechten zeigen/ Welchs ich auff jr aller
 begeren/ als jederman zu dienen geneigt/ nit hab woellen vnderlassen. Der Allmechtige Schoepffer
 dises vnd aller anderer wunder/ vnd oebrist Artzt/ woelle sie in Christenlicher gedult vnd
 gelassenheit handthaben/ vnd vns zu erkantnis seines Goettlichen willens/ vnd besserung vnsers
 sündlichen lebens komen lassen/ Amen.

「エスリンゲンの乙女」について、マイクロレベルで「近いことば」的と判断される要素
 を以下の表にまとめる。

表 17 : 「エスリンゲンの乙女」におけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素 とカウントされる項目	「近いことば性」の要素 の分類
ist geporn	時制の直示表現
in der vorstatt Blaesen	付け足し
in der Schirmnacher gassen	付け足し
ist jr vatter Hans Vlmer	時制の直示表現
haben ... vier toechter	時制の直示表現
wirt	副文内で動詞が定動 詞第二位
hat angefangen	副文内で動詞が定動 詞第二位
wird ... drey jar	時制の直示表現
wird es zwei jar	時制の直示表現
gelebt	時制の直示表現
seind...glidmaesig/zart vnd ran/	時制の直示表現
fahet an	時制の直示表現
jetzt	時の副詞
nim(m)et ...zue	時制の直示表現
wechst	時制の直示表現
Vnd so sie den selbigen etwan zuuil beweget oder bemuehet	凝集的な従属接続詞
beumet sichauff	時制の直示表現
ist jr groeste schmerz	時制の直示表現
ist...gedültig...rotten munds	時制の直示表現

ist besichtig worden	時制の直示表現
wirt ersuchet	時制の直示表現
ist jr groeste schmerz	時制の直示表現
ist jr groeste schmerz	時制の直示表現
ich	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
(ab contrafect) hab	語末音消失
(nit) hab (woellen vnderlassen)	語末音消失
ich	人称の直示表現
ich	人称の直示表現
hab	語末音消失
vns	人称の直示表現
vnsers	人称の直示表現
Amen	情緒の表出

上の表に示したように、「近いことば性」の要素は全体で 33 あり、その大半は時制の直示表現である。時制の直示表現以外の要素として、例えば付け足し (Nachtrag) や人称の直示表現が確認される。付け足しは、(注 55 でも書いたように)「右側の文周縁部にある非統合的な構造」であり、先行する要素が「付け足しによって精密化される」と定義されている。⁹⁴「エスリンゲンの乙女」では、*Dise Junckfraw ist von from(m)en ehrlichen ältern Wingartleuten geporn/ so wonhafftig seind zu Eßlingen/ in der vorstatt Bläsen/ in der Schirmnacher gassen/* (下線は筆者による)「この乙女は信心深く正直者の葡萄畑労働者を両親として生まれ、その両親はエスリンゲンに住んでいる。ブレーゼン郊外の、シルムナッハーの小路内にて。 (下線は筆者による)」⁹⁵ という文が見られた。この文では既に情報として提示された居住地エスリンゲンに対し、文の右方向に二つの付け足しの要素 (街の名前、路地の名前) を並べていくことで、叙述内容をさらに詳細に示している。また *jetzt* のような時の副詞や *hab* のような語末音消失 (Apokope) も観察された。Ágel/Hennig (2006)

⁹⁴ Ágel/Hennig (2006: 394)

⁹⁵ 田辺・佐藤による訳 (田辺・佐藤 1995: 127)

は、「個々の従属接続詞がカメレオンのように（いわばオールラウンダーのごとく）他の領域に適合する時に、これを凝集的な構造を与える形式としてみなす」⁹⁶ と述べている。*Vnd so sie den selbigen etwan zuuil beweget oder bemuehet* 「ある日、彼女がしばらくの間動いたり [動こうと] 努力したりしたところ」⁹⁷ における *so* は、この「凝集的な従属接続詞」(aggregativer Subjunktör) と考えられる。

マイクロレベルにおいて「近いことば性」のある要素として数え上げられた 33 ポイントを総単語数 500 で割ると、0.066 という値が得られる。これは、100 語あたり 6.6 回の「近いことば性」の要素があったことを示している。規準テキストでは 100 語あたり 63 回の「近いことば性」の要素があるとされているので、この基準テキストの値と比較して、「エスリンゲンの乙女」のテキストのマイクロレベルの値を求めると、 $0.63 : 100 = 0.066 : X$ という計算式が成り立ち、「エスリンゲンの乙女」にはマイクロレベルで 10.47% の近いことば性があることになる。

次に、「エスリンゲンの乙女」について、マクロレベルにおいて「近いことば性」の要素としてカウントされる項目を、以下の表に示す。

表 18 : 「エスリンゲンの乙女」におけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Dise Junckfraw ist von from(m)en ehrlichen aeltern Wingartleuten geporn/	E-1
so wonhafftig seind zu Eßlinge	E-x
in der vorstatt Blaesen	NNS
in der Schirmnacher gassen/	NNS
vnd ist jr vatter Hans Vlmer/	E-1
die mueter Margreta/	E-1
vnd haben noch bey leben vier toechter/	E-1
vnder welchen die aelteste/ so auff der heiligen drey Koenig tag dises 49. jars/ 22.jar alt ist/ mit solcher vnerhoerten vnd vbernatürlichen geschwulst (wie hie vor augen abgemalt) beladen	E-x

⁹⁶ Ágel/Hennig (2006: 389)

⁹⁷ 田辺・佐藤による訳 (田辺・佐藤 1995: 127)

ist/	
vnder welchen die aelteste/[so auff der heiligen drey Koenig tag dises 49. jars/ 22.jar alt ist/ mit solcher vnerhoerten vnd vbernatürlichen geschwulst (wie hie vor augen abgemalt) beladen ist/	I-UBS
so auff der heiligen drey Koenig tag dises 49. jars/ 22.jar alt ist/	E-x
wie hie vor augen abgemalt	E-x
daß sie (die aelteste) hat angefangen zu geschwellen/	E-x
vnd lenger dann drey jar kein warme speiß genossen.	E-x
So wirt es auss S. Jacobs tag drey jar/	E-1
daß jr leib beschlossen gewesen	E-x
alsodaß sie ein zeitlang alle jr vberflüssigkeit vnd reinigung/ durch den mund hat von sich geben.	E-x
Aber in zuekünfftigem Herbst wirt es zwei jar	E-1
daß weder oben noch vnden mehr etwas von jr kom(m)en	E-x
Vnd gelebt sie keiner andern auffenthaltung dan(n) Apoteckischer labung/ eingemachts dings vnd obs/	E-1
dessen sie sich zu er- frischung des munds thuet gebrauchen	E-x
doch als bald wider außspeitet/	E-x
auch kein wein trinckt	E-x
sonder allein die hitz	E-x
vn(d) dürre zu leschen jren mundmit wasser kuele/	E-x
dan(n) sie weder essen noch trincken verdaewen kan/	E-x
Vnd seind sonst noch alle glider/ on den bauch/ glidmaessig/ zart vnd ran/	E-1
Doch fahet jr auch jetzt der halß an etwas auff zulauffen vnd zu geschwellen.	E-1
Der Bauch aber (welcher so groß ist/ wie diser strich 16. ringßweis begreifen/ mit schlaiern vn(n) handzweheln gebunden) nim(m)et	E-1

noch taeglich je mehr zue/	
(welcher so groß ist/ wie diser strich 16. ringßweis begreiffen/ mit schlaiern vn(d) handzweheln gebunden)	E-x
wie diser strich 16. ringßweis begreiffen/ mit schlaiern vn(d) handzweheln gebunden)	E-x
vnd wechst	E-1
Vnd so sie den selbigen etwan zuuil beweget oder bemuehet/	E-x
beumet er sich erschroecklich so hoch auff/	E-1
also daß er jr auch das angesicht bedecked/	E-x
vnd vnd ist jr groester schmerz/	E-1
daß sie nun drey viertel jar im(m)erdar zu beth ligen (mueß)/	E-x
vnd mit angespanten fuessen den schweren last auff jren knien halten mueß.	E-x
Doch ist sie in allem disen fast gebültig freundlichs gespraechs/ schoenen angesichts/ gueter farb/ rotten munds/	E-1
vnd ist derhalben von Key. Mai. Doctoren vnd Hoffgesind/ auch sonst von Fürsten vn(d) Herren/ vnd Edelleuten on zal/ nit on grosse verwunderund besichtiget worden/	E-1
vn(d) wirt noch taeglich von vilen so durch reisen (deren jeder das meß mit sich nim(m)t) ersuchet	E-1
(deren jeder das meß mit sich nim(m)t)	I-UBS
(deren jeder das meß mit sich nim(m)t)	E-x
Dieweil aber meniglich auch ein truck daruon begeret/	E-x
bin ich Hans Schiesser Maler zu Wormbs (dieweil ich auch das vorige Junckfraewlin von Rod/ das so lange zeit nicht hat gessen/ ab contrafect hab) auch jetzunder/ fürnemlich von diser krancken Person/ vnd nachmals von jren aeltern vnd andern der Statt Eßlingen gebetten worden	E-1
(dieweil ich auch das vorige Junckfraewlin von Rod/ das so lange	E-x

zeit nicht hat gessen/ ab contrafect hab)	
(dieweil ich auch das vorige Junckfraewlin von Rod/ das so lange zeit nicht hat gessen/ ab contrafect hab)	I-UBS
[das so lange zeit nicht hat gessen/]	E-x
dises wunder/ souil ich selbs persoendlich gesehen/ vnd von jr bericht bin worden/ an tag zu bringen	E-x
souil ich selbs persoendlich gesehen/	E-x
vnd von jr bericht bin worden/	E-x
vnd zu publicieren/	E-x
vnd jr solchs zü zuschicken/	E-x
auff das die jhenigen / auch jr selbs Contrafactur vnd gestalt moechten zeigen/	E-x
so das meß von jr bringen	I-UBS
Welchs ich auff jr aller begeren/[als jederman zu dienen geneigt / nit hab woellen vnderlassen.	E-x
Welchs ich auff jr aller begeren/ als jederman zu dienen geneigt / nit hab woellen vnderlassen.	I-UBS
als jederman zu dienen geneigt /	E-x
Der Allmechtige Schoepffer dises vnd aller anderer wunder/ vnd oebrist Artzt/ woelle sie in Christenlicher gedult vnd gelassenheit handthaben/	E-1
vnd (woellen) vns zu erkantnis seines Goettlichen willens/ vnd besserung vnsers sündlichen lebens komen lassen/	E-1
Amen.	NNS

上の表に示したように、マクロレベルでは NNS（「近いことば的な文相当表現」）が 3、基礎文 1 が 19、基礎文 x が 33 そして I-UBS（「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」）が 5 観察される。この結果をまとめると、次の表のようになる。

表 19 : 「エスリンゲンの乙女」におけるマクロレベルでの「近いことば性」の要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	I-UBS
500	3	52	19	33	5

これらの結果から、以下の表の 4 つの計算式 a) からを計算すると、a)では 0.057、b)では 0.575、c)では 10.4、そして d)では 9.090 という結果がえられる。これらの値は、以下の表にまとめることができる。

表 20 : 「エスリンゲンの乙女」におけるマクロレベルでの 4 つの計算値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
0.057	0.575	10.4	9.090

以上の結果から、それぞれの項目のパーセンテージを算出した結果、a)では 2.41%、b)では -5.27%、c)では 2.17%そして d)では -8.35%という結果が得られる。

表 21 : 「エスリンゲンの乙女」におけるマクロレベルでの「近いことば性」の値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS と全基礎文
2.41%	-5.27%	2.17%	-8.35%

ここで a)-d)の値を平均すると、「エスリンゲンの乙女」にはマクロレベルにおいて -2.26%の「近いことば性」があるということになる。

最新報告「エスリンゲンの乙女」において、ミクロレベルでは 10.47%、マクロレベルでは -2.26%の「近いことば性」の値が得られる。したがって、これら 2 つの値を平均して、最終的に「エスリンゲンの乙女」のテキストには 4.10%の「近いことば性」があると測定される。

3.2.2. アダム・シュテークマンの殺害行為に関する「最新報告」分析

「最新報告」として二つ目に、1556年に流布した「アルザスのオーバーネーエン居住のアダム・シュテークマンの殺人行為」(,Die Mordtat des Adam Stegmann zu Obernehen in Elsaß‘)を分析する。この「最新報告」は、実在の人物アダム・シュテークマンが実の子供3人を殺害した事件を扱っている。まずは以下に、対象とするテキストを示す。⁹⁸

Es hat sich auff Freytag nach Ostern diß 56. Jars begeben/ das Adam Stegman/ Ein Burger zu Obernehen/ sein Haußfrawen Walburg genandt/ in die Reben geschickt hat mit jrem Eltesten Son/ der Albrecht geheysen/ vnd neunjar alt gewesen ist. Als nun die Fraw in die Reben gangen/ hat er Adam Stegman noch drey Kinder bey jm daheym gehabt/ Nemlich/ ein tochter/ die hat Annalein geheysen/ die ist jetzt vergangen Weyhnachten/ sibenjar alt worden/ vnd ein Kneblein das hat Gabriel geheysen/ were jetzt zu Pffingsten vier jar alt worden/ vnd noch ein junges kind in der Wiegen gelegen/ das hat Martine geheissen/ vnd ist nicht mehr dann 22. Wochen alt gewesen. Wie er nun sein Frawen hat woellen in die Reben schicken/ hat er sich etwas bloedigkeyt des Haupts angenommen daheym zu bleyben/ vnd zu jr gesagt/ sie soll den schlencken oder kloben an der thür anlegen/ auff das die Kind nicht hinauß lauffen. Wie er nun bey den Kindern allein gewesen/ hat er sich darnach für sein Hauß thür gesetzt/ das jn etliche Nachbarn vnd leute gesehen haben/ vnd ist bald widerurnb ins hauß hinein gangen/ vnd aus anreytzung vnd eingebungen des leydigen Sathans/ disen grewlichen vnd erschroeklichen mort an seinen eygnen Kindern begangen/ Nemlich/ so hat er das Annalein zum ersten angriffen/ vnd in ein arm gestochen/ da hat das Mägdlein der flucht begeret/ vnnd ist der Kammer zu gelauffen/ Da es aber ihm nicht hat mögen empfliehen/ hat es sich gegen jm zu wehr gestellt/ vnd so ritterlich gewehret/ das ers bey den Zoepffen ergriffen/ vnd jm die auß dem Haupt gerissen/ vnd hats dermassen in die hendt gestochen vnd verwundet / das er sich nicht mehr hat mögen erwehren/ da hat er jm zu letzt die gorgel abgestochen. Darnach ist er an das Kneblein gerathen/ welchs Gabriel hieß/ das hat er auff die Brust gestochen/ gegen dem hals zu/ da jhm der stich nicht hat woellen gerathen/ das er nicht durchgangen ist, hat ers ins gemecht[sic!] gestochn vnd inn die Stirn/ vnd also hat dis arm Kindlein sein leben in der stuben geendet. Das dritt

⁹⁸ 出典：田辺幹之助、佐藤直樹（編）（1995）『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館。（41頁）

Kindlein/ welchs noch in der Wiegen gelegen ist/ vnd Martine geheysen/ das hat jhn an gelachtet/ da hat er jhm ein stich vier oder funff inn das helslein gegeben/ von hinden zu/ darnach in den Bauch neben dem Nebelein/ das jhme eingeweyd herauß gedrungen ist/ vnd also dises vnschludige Kindlein sein leb(e)n nach ge(e)ndet. Nach solchen drey begangnen mordten/ hat sich vorgeandter Adam Stegman/ widerumb für die Thür heraus gesetzt/ auff ein bloch/ da seind etliche leut für gangen/ haben zu jm geredt/ vnd gesagt: Adam wie lebstu? Hat er ihnen geantwort/ wie solt ich leben ich gehör an Galgen. Da haben sich die Leut seiner red vnd antwort verwundert/ vnd gesagt/ Warumb gehörstu an Galgen? Adam geantwort/ Darumb/ da hab ich meine Kinder vmbbracht. Da haben sie gesagt: Ey nein Adam/ es ist nicht also/ warumb woltestu deine eygne Kinder vmbbringen? vnd haben sich ob diser seiner red entsetzt. Da hat er zu jhnen gesagt/ So kommet her/ ich wills euch zeygen/ vnnnd hat sie also ins haus hinein gefuehret/ vnd jhnen die begangene mordt gezeyget/ Da sie nun solchs gesehen/ seind sie sehr übel erschrocken. Inn dem allem/ ist die Mutter aus dem Reben kommen mit jhrem Eltesen Sone/ da hat er den selbigen Son heysen zu jhm kommen/ vnd jm die handt bieten/ des sich der Son entsetzte/ vnd doch zu letzt jhm die handt gebotten/ Da hat er zu jhm gesagt: Schaw Son das du dich froembtlich vnd ehrlich haltest/ vnd nicht zum Schelmen werdest/ wie ich/ dann ich gehoer an Galgen. Da ist die Mutter in die Kammer kommen/ vnd hat das Annalein jhr Tochter inn der Kammer todt funden. Als sie nun inn die stuben gieng/ sahe sie das mittelste Kindlein/ das Gabriel hies/ auch todt da ligen/ Da eylet sie zu dem juengsten Kindlein/ das in der Wiegen lag/ vnd verhoffet das selbige noch lebendig zu finden/ da sie aber sahe/ da es auch todt ward/ ist sie in gross(e) Onmacht gefallen/ also/ das die Nachbars Weyber vil mit jhr zu schaffen gehabt haben/ vnd sie von dannen inn ein ander hauß gefuehret/ das sie desto baß getroeftet würde. Nach dem hat die Oberkeyt des selbigen orts/ jhn gefencklich angenommen/ vnd die ermördten Kinder hat man denselbigen tag zusammen in ein Todtenber gelegt vnd ye das Jüngste dem Eltesten mit seinem Heuptlein inn den Geeren[sic!] oder schos gelegt/ vnd sie auff den Kirchhoff gefuehret/ da hat sie meniglich jung vnd alt besehn vnd am Sambstag hernach seind sie nach Mittag also daselbst begraben worden. Vnd ligt diser Adam Stegman noch gefangen.

それでは、どのような要素がミクロレベルでの「近いことば」要素と考えられるのかを以下の表に示す。

表 22 : アダムの子殺しにおけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素と カウントされる項目	「近いことば性」の要素の 分類
hat begeben	時制の直示表現
Ein Burger zu Obemehen	付け足し
(er) Adam Stegman	付け足し
(bey jm) daheym	付け足し
mit jrem Eltesten Son	枠外配置
hat er Kinder ... gehabt	時制の直示表現
Nehmlich	オペレーター作用域の構造
hat geheysen	時制の直示表現
die ist ... worden	時制の直示表現
jetzt	時の副詞
ein Kneblein	左方配置
jetzt	時の副詞
hat geheysen hat Gabiriel geheysen	時制の直示表現
hat Martine geheissen	時制の直示表現
ist nicht mehr dann 22. Wolchen alt gewesen	時制の直示表現
hat wöllen schicken	多成分の動詞句の語順
hat angenommen	時制の直示表現
(hat) zu jr gesagt	時制の直示表現
hat er sich für sein Hauß thür gesetzt	時制の直示表現
ist ...hinein gegangen	時制の直示表現
Nehmlich	オペレーター作用域の構造

hat angriffen	時制の直示表現
hat begeret	時制の直示表現
ist ... zu gelauffen	時制の直示表現
hat mögen empfehlen	多成分の動詞句の語順
hat sich... gestellt	時制の直示表現
(hat) ... gewehret	時制の直示表現
hat es...gestochen	時制の直示表現
hats	音声語
(hat) ...vermündet	時制の直示表現
hat mögen erwehren	多成分の動詞句の語順
hat abgestochen	時制の直示表現
ist er an das Kneblein gerathen	時制の直示表現
auf die Brust gestochen	時制の直示表現
gegen dem hals zu	付け足し
hat wöllen gerathen	多成分の動詞句の語順
hat ... insgemech gestochn	時制の直示表現
ers	音声語
hat geendet	時制の直示表現
Das dritt Kindkein	左方配置
hat an gelachet	時制の直示表現
hat gegeben	時制の直示表現
von hn den zu	枠外配置
hat sich ...gesetzt	時制の直示表現
auff ein bloch	付け足し
da ...für	凝集的副詞

seind gehen	時制の直示表現
haben geredt	時制の直示表現
Adam	呼びかけ
lebstu	音声語
lebstu	人称の直示表現
Hat ... geantwort, hat... geantwort	定動詞第1位の平叙文
solt leben	直説話法内の時制の直示表現
ich	直説話法内の人称の直示表現
solt	語末音消失
ich	直説話法内の人称の直示表現
gehör	直説話法内の時制の直示表現
gehör	語末音消失
haben sich ... verwundert	時制の直示表現
(haben) gesagt	時制の直示表現
gehörstu	直説話法内の時制の直示表現
gehörstu	直説話法内の音声語
gehörstu	直説話法内の人称の直示表現
(hat) geantwort	時制の直示表現
hab	直説話法内の語末音消失
ich	直説話法内の人称の直示表現

meine	直説話法内の人称の直示表現
hab vmbbracht	直説話法内の時制の直示表現
haben gesagt	時制の直示表現
Ey	直説話法内の情緒の表出
Adam	直説話法内の呼びかけ
ist nicht also	時制の直示表現
woltestu vmbbringen	直説話法内の時制の直示表現
woltestu	直説話法内の音声語
woltestu	直説話法内の人称の直示表現
deine	直説話法内の人称の直示表現
haben sich entsetzt	時制の直示表現
hat gesagt	時制の直示表現
kommet her	直接引用の時制の直示表現
ich	直説話法内の人称の直示表現
wills zeygen	直説話法内の時制の直示表現
wills	直説話法内の音声語
euch	直説話法内の人称の直示表現
hat gefuehret	時制の直示表現
(hat)... gezeuget	時制の直示表現
seind erschrocken	時制の直示表現

ist ... kommen	時制の直示表現
mit jhrem Eltesten Sone	枠外配置
da	時の副詞
hat ...heyssen	時制の直示表現
da	時の副詞
hat ...gesagt	時制の直示表現
Schaw	直接引用の人称の直示表現
Schaw	直説話法内の命令形
Son	直説話法内の呼びかけ
du	直説話法内の人称の直示表現
dich	直説法内の人称の直示表現
ich	直説話法内の人称の直示表現
ich	直説話法内の人称の直示表現
gehör	直説話法内の語末音消失
ist kommen	時制の直示表現
hat funden	時制の直示表現
ist ward	時制の直示表現
ist gefallen	時制の直示表現
hat...angenommen	時制の直示表現
hat ... gelegt	時制の直示表現
(hat)... in ein Todtenber gelegt	時制の直示表現
(hat)... inn den Geeren ... gelegt	時制の直示表現

(hat) ... gefohret	時制の直示表現
da hat sie ...besehn	時制の直示表現
seind begraben worden	時制の直示表現
ligt gefangen	時制の直示表現

上の表の通り、「アダム・シュテークマンの殺人行為」にはマイクロレベルで「近いことば性」の要素が 111 カウントされる。人称の直示表現や時制の直示表現が多く観察されるのに加えて、様々な要素が確認できる。例えば、*Nemlich/ ein tochter/ die hat Annalein geheysen* における *Nemlich* は、オペレーター作用域の構造 (Operator-Skopus-Struktur) と考えられる。これは、Ágel/Hennig (2006) によれば、「2つの部分からなる構造で、その中では通常左にある要素 (オペレーター) が後続する構造 (作用域) に対し理解するための助け船と」⁹⁹なり、その例として *Kurzum es war ein schöner Abend.* のなかの *kurzum* が挙げられている。¹⁰⁰ また、「音声語」(phonishes Wort) もいくつか観察された。音声語に属する例として、Ágel/Hennig は「*kannst* と *du* というように通常 2つの語に書き分けられるものが *kannste*」¹⁰¹ のように縮約される例を挙げている。また、「呼びかけ」(Anredenominativ) なども観察された。さらに分析対象には、「従属的主文」(abhängiger Hauptsatz) という要素も観察された。従属的主文とは「上位の文部分に依存しているが、主文の語順そして主文の特徴を持つ」¹⁰²もののことであり、*wir meinen, Nähe-Distanz-Theorie ist spanned.* という例の場合、*Nähe-Distanz-Theorie ist spanned* の部分が「従属的主文」とされている。¹⁰³ さらに「左方配置」も観察される。これらはすべて、「近いことば性」の要素である。

「アダム・シュテークマンの殺人行為」では、「近いことば性」の要素が 111 カウントされ、総単語数が 775 語である。111÷775 を計算すると、0.147... という値が得られる。これは、100 語中に 14.7 回の「近いことば性」の要素があったことになる。これを規準テキスト（「近いことば性」100%）の値、すなわち 0.63 と比較すると、0.63 : 100 = 0.147 : X という計算式が成り立つ。結果として、23.33%の「近いことば性」がマイクロレベルにあったことになる。

⁹⁹ Ágel/Hennig (2006: 394)

¹⁰⁰ Ágel/Hennig (2006: 394)

¹⁰¹ Ágel/Hennig (2006: 394)

¹⁰² Ágel/Hennig (2006: 387)

¹⁰³ Ágel/Hennig (2006: 387)

次に、この最新報告について、マクロレベルにおいて「近いことば性」の要素としてカウントされる項目を、以下の表に示す。

表 23 : アダムの子殺しにおけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Es hat sich auff Freytag nach Ostern diß56. Jars begeben	E-1
das Adam Stegman / Ein Burger zu Obernehen / sein Haußfrawen Walburg genandt / in die Reben geschickt hat	E-x
Ein Burger zu Obernehen /	NNS
der Albrecht geheysen	E-x
vnd neun jar alt gewesen ist	E-x
Als nun die Fraw in die Reben gangen	E-x
hat er Adam Stegman noch drey Kinder bey jm daheym gehabt	E-1
Adam Stegman	NNS
daheym	NNS
Nemlich	NNS
ein tochter die hat Annalein geheysen	E-1
die ist jetzt vergangen Weyhnachten / siben jar alt worden	E-1
vnd ein Kneblein das hat Gabriel geheysen were jetzt zu Pfungsten vier jar alt worden	E-1
das hat Gabriel geheysen	E-1
vnd noch ein junges kind in der Wiegen gelegen	NNS
das hat Martine geheissen	E-1
vnd ist nicht mehr dann 22. Wochen alt gewesen	E-1
Wie er nun sein Frawen hat wöllen in die Keben schicken	E-x
hat er sich etwas blödigkeit des Haupts angenommen	E-1
da heym zu bleyben	E-x
vnd (hat) zu jr gesagt	E-1
sie soll den schlencken oder kloben an der thür anlegen	E-x

auff das die Kind nicht hinauß lauffen	E-x
Wie er nun bey den Kindern allein gewesen	E-x
hat er sich darnach für sein Hauß thür gesetzt	E-1
das jn erliche Nachbarn vnd leute gesehen haben	E-x
vnd ist bald widerumb ins hauß hinein gangen	E-1
vnd (hat) aus anreyrzung vnd eingebungen des leydigen Sathans / disen grewlichen vnd erschröctlichen mort an seinen eygnen Kindern begangen	E-1
Nemlich / so hat er das Annalein zum ersten angriffen	E-1
Nehmlich	NNS
vnd (hat)gestochen	E-1
da hat das Mägdlein der flucht begeret	E-1
vnnnd ist der Kammer zu gelauffen	E-1
Da es aber ihm nicht hat mögen empfliehen	E-x
hat es sich gegen jm zu wehr gestellt	E-1
vnd (hat) so ... gewehret	E-1
das ers bey den Zöpffen ergriffen	E-x
vnd jm die auß dem Haupt gerissen	E-x
vnd hats dermassen in die hendt gestochen	E-1
vnd (hat) verwundet	E-1
das er sich nicht mehr hat mögen erwehren	E-x
da hat er jm zu lrtzt die gorgel abgestochen	E-1
Darnach ist er an das Kneblein gerathen	E-1
welchs Gabriel hieß	E-x
das hat er auff die Brust gestochen	E-1
gegen dem hals zu	NNS
da jhm der stich nicht hat wöllen gerathen	E-x
das er nicht durchgangen ist	E-x
hat ers ins gemecht gestochrn vnd inn die Stirn	E-1

vnd also hat dis arm Kindlein sein leben in der stuben geendet	E-1
Das dritt Kindlein / welchs noch in der Wiegen gelogen ist / vnd Martine geheysen / das hat jhn an gelachtet	E-1
welchs noch in der Wiegen gelogen ist	E-x
vnd Martine geheysen	E-x
da hat er jhm ein stich vier oder funff inn das helslein gegeben von hin den zu	E-1
darnach in den Bauch neben dem Nebelein /	E-x
das jhme eingeweyd herauß gebungen ist	E-x
vnd also dises vnschludige Kindlein sein leb(e)n nach ge(e)ndet	E-x
Nach solchen drey begangnen mordten / hat sich rorgenandter Adam Stegman widerumb für die Thür heraus gesetzt	E-1
auff ein bloch	NNS
da seind erliche leut für gangen	E-1
haben zu jm geredt	E-1
vnd (haben) gesagt	E-1
Adam	NNS
wie lebstu?	E-1
Hat er ihnen geantwort	E-1
wie solt ich leben	E-1
ich gehör an Galgen	E-1
Da haben sich die Leut seiner red vnd antwort verwundert	E-1
vnd (haben) gesagt	E-1
Warumb gehörstu an Galgen?	E-1
Adam geantwort /	E-1
Darumb	NNS
da hab ich meine Kinder vmbbracht	E-1
Da haben sie gesagt	E-1
Ey nein Adam	NNS

es ist nicht also	E-1
warumb woltestu deine eygne Kinder vmbbringen?	E-1
vnd haben sich ob diser seiner red entsetzt	E-1
Da hat er zu jhnen gesagt	E-1
ich wills euch zeygen	E-1
vnnb hat sie also ins haus hinein gefuehret	E-1
vnd (hat) jhnen die begangene mordt gezeyget	E-1
Da sie nun solchs gesehen	E-x
seind sie sehr übel erschrocken	E-1
Inn dem allem / ist die Mutter aus dem Reben kommen mit jhrem Eltesen Sone	E-1
da hat er den selbigen Son heyssen zu jhm kommen	E-1
vnd (hat...heyssen) jm die handt bieten	E-1
des sich der Son entsetzte	E-x
vnd doch zu letzt jhm die handt gebotten	E-x
Da hat er zu jhm gesagt	E-1
Son	NNS
das du dich frömbklich vnd ehrlich haltest	E-x
vnd nicht zum Schelmen werdest	E-x
wie ich	NNS
dann ich gehör an Galgen	E-1
Da ist die Mutter in die Kammer kommen	E-1
vnd hat das Annalei jhr Tochter inn der Kammer todt funden	E-1
Als sie nun inn die stuben gieng	E-x
sahe sie das mittelste Kindlein / das Gabriel hies / auch todt da ligen	E-1
das Gabriel hies	E-x
Ds eylet sie zu dem jüngsten Kindlein	E-1
das in der Wiegen lag	E-x

vnd verhoffet das selbige noch lebendig zu finden	E-1
da ist abse sahe	E-x
da ist auch todt ward	E-x
ist sie in gross(e) Onmacht gefallen	E-1
das die Nachbars Weyber vil mit jhr zu schffen gehabt haben	E-x
vnd sie von dannen inn ein ander hauß geführet	E-x
das sie desto baß getröftet würde	E-x
Nach dem hat die Oberkeyt des selbigen orts / jhn gefencklich angenommen	E-1
vnd die ermördten Kinder hat man denselbigen tag zusammen in ein Todtenber gelegt	E-1
vnd (hat) ye das Jüngste dem Eltesten mit seinem Heuptlein inn den Geeren oder schos gelegt	E-1
vnd (hat) sie auff den Kirchhoff gefohret	E-1
da hat sie memglich jung vnd alt besehn	E-1
vnd am Sambstag hernach seind sie nach Mittag also daselbst begraben worden	E-1
Vnd ligt diser Adam Stegman noch gefangen	E-1

上の表から、「アダム・シュテークマンの殺人行為」には、マクロレベルの「近いことば性」の要素として、NNS が 13、基礎文 1 が 68、基礎文 x が 34 という結果が得られる。以下の表としてまとめることができる。

表 24：アダムの子殺しにおけるマクロレベルでの「近いことば性」の要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)
775	13	102	68	34

以上の結果から a)、b)、そして d)を計算すると、a)では 0.127、b)では 2、そして d)では 6.565 という結果が得られる。それぞれ得られた値を以下の表に示す。

表 25 : アダムの子殺しにおけるマクロレベルでの 4 つの計算値

a) NNS／全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) ／基礎文 x (副文)	c) 全基礎文／ 中断されている基 礎文 (I-UBS)	d) 総単語数／ NNS+全基礎文
0.127	2	-	6.565

上記の値から、それぞれの項目のパーセンテージを計算した結果は、以下の表のとおりである。

表 26 : アダムの子殺しにおけるマクロレベルでの「近いことば性」の値

a) NNS／全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) ／基礎文 x (副文)	c) 全基礎文／ 中断されている基 礎文 (I-UBS)	d) 総単語数／ NNS+全基礎文
12.97%	37.65%	-	51.90%

これら a), b), d) で得られた 3 つの値を平均すると、アダムの子殺しについて書かれた「最新報告」は、マクロレベルにおいて 34.17%という「近いことば性」があることになる。

この「最新報告」は、ミクロレベルにおいて 23.33%の「近いことば性」の値、マクロレベルでは 34.17%という「近いことば性」の値が得られる。この 2 つの値を平均して、当該のテキストには 28.75%の「近いことば性」があると測定される。

3.2.3. 16 世紀「最新報告」の言語的特徴

以上のように、分析を行った 2 つの 16 世紀の「最新報告」に関しては、「エスリンゲンの乙女」では 4.10%、そして「アダムの子殺し」では 28.75%の「近いことば性」の値が得られた。この 2 つの「最新報告」の間に、約 25%の「近いことば性」の値の違いがあるのはなぜであろうか。ミクロレベルで考えてみると、「アダムの子殺し」には直接話法が多用

されていることが、その理由として挙げられるだろう。例えば、以下のような部分である。

1) da seind etliche leut für gangen/ haben zu jm geredt/ vnd gesagt Adam wie lebstu? Hat er ihnen geantwort/ wie solt ich leben ich gehör an Galgen. Da haben sich die Leut seiner red vnd antwort verwundert/ vnd gesagt/ Warumb gehörstu an Galgen? Adam geantwort/ Darumb/ da hab ich meine Kinder vmbbracht. Da haben sie gesagt: Ey nein Adam/ es ist nicht also/ warumb woltestu deine eygne Kinder vmbbringen?

2,3 人の人がやってきて彼に話しかけた [。] アダム、機嫌はどうかね。答えて曰く俺は、もう生きてはいられない。俺は縛り首だ [。] 人びとはひそひそと「彼の話しや答えは変だ」と言い、尋ねた [。] どうしてお前が縛り首なのか [。] アダムは答えた [。] 自分の子どもを殺しちゃったからだよ [。] 人びとは言った [。] おいおいアダム何かの間違いだらう [。] なぜ自分の子どもを殺したいなどと思ったのか [。] (「エルザスのオーバーハウゼン居住のアダム・シュテークマンの殺人行為」)¹⁰⁴ ([] は筆者による)

「アダムの子殺し」では、直接話法が多く使用されることによって、登場人物同士の間でかわされる会話内に、*ich* などの人称の直示表現や *Adam* といった呼びかけが、ミクロレベルの「近いことば」の要素として多く数え上げられた。このように話されたことばをそのまま再現するような直接話法が使用されるテキストでは、「近いことば性」の値が高くなる。

「エスリンゲンの乙女」にも、*ich* という人称の直示表現が観察されたが、これは、*ich selbs persönlich gesehen* 「私は自ら個人的に見聞し」¹⁰⁵ や、*bin ich Hans Schiesser Maler zu Wormbs (dieweil ich auch das vorige Junckfräwlin von Rod/ das so lange zeit nicht hat gessen/ ab contrafect hab)* 「ヴォルムスの画家、不肖ハンス・シーサーは(長い間何も食べていない、かのロートの乙女の肖像も描いたので)」¹⁰⁶ という具合に、「最新報告」の書き手が1人称で登場しているものである。¹⁰⁷ また、マクロレベルでは「エスリンゲンの乙女」のテキストにおいては、例えば *als jederman zu dienen geneigt/* という基礎文によって中断された文 *Welchs ich auff jr aller begeren/ als jederman zu dienen geneigt/ nit hab woellen vnderlassen.* が

¹⁰⁴ 田辺・佐藤による訳 (田辺・佐藤 1995: 128)

¹⁰⁵ 田辺・佐藤による訳 (田辺・佐藤 1995: 127)

¹⁰⁶ 田辺・佐藤による訳 (田辺・佐藤 1995: 127)

¹⁰⁷ 書き手を表す1人称の直示表現は、「アダムの子殺し」の最新報告ビラにも、本論文 3.3.で扱う 17 世紀初頭の週刊新聞にも観察されない。

5 つ観察される。これは、「近いことば性」を下げる I-UBS（「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」）である。

上記のような項目の違いによって、2 つの「最新報告」において、約 25% の「近いことば性」の違いが生じたと考えられるであろう。

3.3. 17 世紀初頭における週刊新聞の分析

3.3.1. 週刊新聞の一般的特徴

Polenz (2013) は、週刊新聞以前のメディア、すなわち「印刷ビラ、小冊子、特定のテーマに関して時折流布していた報知集、そして書状」¹⁰⁸ と比較することによって、新しく登場した「新聞」というメディアの特徴を以下のように示している（通し番号及び [] は筆者による）。

1) 内容は、相当に時局を反映したものであった。というのも、毎週（後に毎日）記事の内容が郵便で到着するとただちに、その内容が刊行されたからである。郵便局長は、編集者の先駆けであった。

2) 世界に関する知識が変わり得て、またさまざまに関連し合っていることを明らかにした。なぜなら人びとは、新奇な事柄、前代未聞の事柄、しかしまた、不正確な事柄や矛盾した事柄、もしくは（情報源が制限され）異同のある考え方や、異なる評価もしくは訂正に常に直面していたからである。今日の意味で探究を行うことは、まだ不可能であった。

3) [扱われる] テーマには規制が無く、また 18 世紀後半までは編集する上でほとんど手が加えられなかったため、テーマが多様であった。このようなテーマの多様性というのは、本や図書館に慣れ親しむ機会の無かった人びとにも、すべてに通用するような教育に対する興味を呼び起こし、そしてその興味を満たした。1668 年のハンブルク新聞において扱われたテーマは、次のように配分される：57% が政治（戦争を含む）、12.5% が自然、11.2% が上流階級での生活（とりわけ宮廷に関する報告）、8.5% が経済と交通、6.5% が教会、3% が法、そして 0.35% が文化に関してである。

¹⁰⁸ Polenz (2013: 19)

4) 他の地域や外国の出来事そして情勢が、報知の最も大きい部分を形成していた。なぜなら生活圏の土地（都市や領土内）の出来事に関する報告は、非公開と検閲を考慮したために避けられたからである。もしくは、その他の（口語での）情報源があったために、当該の地域に関する報告は不必要であった。例えば、17世紀の新聞において（1622年から斡旋されたが）地域的に商業広告を掲載することは、まだあまり意味をなさなかった。

5) 報知は、超地域的な組織化のなかで流された。すなわち、遠方に関する報知は専門の代理人（新聞記者）によってますます多く収集され[...]、新聞の内容と形式は、徐々に大きく統一されていた。新聞は、ルター訳聖書以降に国家的な文章語に至る道のりにおいて、統一的な言語変種を普及させ広めるための最も効果的な手段となった。

6) 新聞は整理したり（検閲故に）論評したりすることはなしに（すなわち純粋に報知新聞として）出版された。しかし、伝統的に世論を煽動するパンフレットや小冊子とは異なり、このような新聞は、読まれた情報もしくは読み聞かされた新しい情報に関してさまざまに議論を呼ぶきっかけとなった。

Polenz (2013: 19-20)

また、シュトラスナー（2002）は「新聞というジャンルを決定づけるすべての特徴」として、「周期性、時事性、全般性、公共性」¹⁰⁹の4つを挙げている。当時誕生した週刊新聞は、この4つの特徴を兼ね備えていると言える。

3.3.2. 1609年の週刊新聞の分析

本節で分析対象とする週刊新聞《Relation》の記事は、1609年の「3月18日付けのウィーンからの報告」である。この記事には、オーストリアの「最新の」政治状況が書かれている。テキストの総単語数は、505である。この分析対象は、本論文ですでに（2.2.1.および2.2.2.で）Ágel/Hennig（2006）の「近いことば性」測定法の例示として示した分析対象と同一のものである。2.2.1.および2.2.2.ですでに、当該テキストのマイクロレベルとマクロレベルの「近いことば性」の値に関しては述べた。すなわち、この週刊新聞記事「3月18

¹⁰⁹ シュトラスナー（2002: 31）

日付けのウィーンからの報告」は、マイクロレベルにおいて「近いことば性」は 6.88%である。また、マクロレベルにおいては、以下の表に示すように、NNS が 1、基礎文 1 が 20、基礎文 x が 33、そして I-UBS（「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」）が 2 例観察される。

表 27：1609 年週刊新聞《Relation》の記事におけるマクロレベルでの「近いことば性」の要素の実数

総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	I-UBS
506	1	53	20	33	2

以上の結果から、以下の表に示す a) から d) の計算式を算出すると、それぞれ a) では 0.018、b) では 0.606、c) では 26.5、そして d) では 9.370 という結果が得られる。

表 28：1609 年週刊新聞《Relation》の記事におけるマクロレベルでの 4 つの計算値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基 礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS と全基礎文
0.018	0.606	26.5	9.370

以上、それぞれ 4 つの項目から得られた値を元に、それぞれのパーセンテージを算出した結果を、以下の表に示す。

表 29：1609 年週刊新聞《Relation》の記事におけるマクロレベルでの「近いことば性」の値

a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基 礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + 全基礎文
-3.46%	-4.33%	17.37%	-15.03%

この4つの結果を平均すると、1609年の「3月18日付けのウィーンからの報告」テキストには、マクロレベルでは最終的に-1.36%の「近いことば性」があると言える。

ミクロレベルでは6.88%の「近いことば性」、そしてマクロレベルでは-1.36%の「近いことば性」の値が得られる。これら2つの値を平均して、1609年の「3月18日付けのウィーンからの報告」テキストには、2.76%の「近いことば性」があると測定される。

3.3.3. 17世紀初頭における週刊新聞の言語的特徴

17世紀初頭の週刊新聞を分析すると、ミクロレベルの「近いことば性」の要素はほとんどカウントされなかった。また、マクロレベルではI-UBS（「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」）が2件観察されたほか、基礎文1よりも基礎文xの方が多く観察される。そしてなにより、一つの基礎文を形成する語数が多いことが大きな理由で、マクロレベルではマイナスの値が算出される結果となった。以上のように、今回分析対象とした17世紀初頭の週刊新聞のテキストには、最終的に2.76%の「近いことば性」が算出されるわけである。新聞報道の先駆けとされる16世紀の「最新報告」と比べて、17世紀の週刊新聞の「近いことば性」が低いというこの結果を踏まえると、新聞報道の言語は、通時的に見ると、17世紀に入って「近いことば性」をさらに失い、書きことば性を高め、書き手と読み手の距離も隔てられていったとすることができよう。

3.4. 宗教改革の印刷ビラにおけるレトリック分析

16世紀において、印刷ビラは通常、小冊子とは異なり、木版画による図像が大きな部分を占め、その下に言語による説明文が付されていた。特に、文字を理解しない民衆にとって、図像が付いた印刷ビラは重要な情報源となった。民衆の心を宗教改革に向かわせるために、宗教改革の書き手たちは印刷ビラの中に、図像と言語の両面においてさまざまな工夫を凝らして、書き手と読み手（聞き手）の間の距離を近く取ることができ、情報が民衆に可能な限り効果的に伝わるように努めた。その際に重要であったのは、レトリック（修辞法）であった。古代の理論家が「良き弁論の芸術（わざ）」¹¹⁰と呼んだレトリックとは、

¹¹⁰ プレット（2000：17）

「弁論に関する方法」¹¹¹ であり、「納得させ、確信させる技術」¹¹² である。

そこで本節では、宗教改革期に宗教改革側から配布された印刷ビラ 2 点を例にして、言語テキストだけではなく、図像の分析も行い、印刷ビラの情報がどのような説得的効果をめざして受け手へ発信されたのかを考察する。

3.4.1. 印刷ビラ『ヨハン・フス』の分析

この章で分析対象とする印刷ビラの基本情報とテキストは、次の通りである。

- a. タイトル : **Johann Hus** / ヨハン・フス
- b. 作者 : 不詳
- c. 年代 : 1546 年頃¹¹³
- d. 翻訳 : 田辺幹之助による翻訳を元に、筆者が検討を加えて再度翻訳し直した。

<図像>

出典 : 田辺幹之助, 佐藤直樹 (編) (1995) 『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』 国立西洋美術館. (巻末資料 1)

<言語テキスト>

(ドイツ語の言語テキストは筆者が文字に起こした。オリジナルの右端が一部切れているため、文字が判別できない箇所については、筆者が前後関係等からドイツ語の再構成を試み、[]を使用して記す。)

¹¹¹ プレット (2000 : 16)

¹¹² プレット (2000 : 17)

¹¹³ 1546 年はルターが没した年である。

Johan Huss	ヨハン・フス
Als man thet schreiben Tause[nd Jar]	主キリストの誕生後
Vierhundert funfftzehen furwar	まことに 1415 年が
Nach der geburt des Herrn Chr[isti]	記された時
Wart zu Costnitz auffm Concili	コンスタンツにおける会議にて
5 Verbrennet / der viel heilig man	至聖の人ヨハン・フスが焚刑にあった
Johan Hus das er nicht nam an	彼は悪魔に由来する
Die abgötisch kirch zu Rom	偶像崇拜のローマ教会を
Welche vom Teuffel vrsprung no[m]	受け入れなかった
Er sprach ich gleub allzeit allein	彼は言った
10 Ein Christlich kirch in gemein	常に普遍的なキリスト教会のみを信じる
Welche allein in Christum gleubt	その教会はキリストのみを信じ
In welcher Christus ist das heu[bt]	キリストが長であり
Vnd nicht der Babst der Antechri[st]	反キリストである教皇が長ではない
Darumb er wart zur selben frist	それ故に彼はその時に
15 Vons Sathans Sinagog verbr[ant]	サタンのシナゴグによって焼かれた
Wir versammelt aus allem landt	あらゆる国から集まった人々に向かっ
Dieser Johannes Hus gantz fre[y]	て
Sagt an seim end ein Prophecey	このヨハン・フスは堂々と
Sprach itzt ein Gans ihr braten	自身の終わりにあたって預言を述べて
20 Vber hundert jar das halt in hut[ein]	こう言った あなたはそのことを隠してい
So wert kommen ein weisser sch[wan]	たが
Den wert ihr vngebraten lan	100 年間その鷺鳥は守られる
Wert lieblich singen inn die welt	すると 1 羽の白い白鳥がやって来るで
Martinus Lutherus wart geme[lt]	あろう
Welchen im Geist der heilig man	あなた方はその白鳥を焼かせることはしな
25 Gesehen hat gancz lobesan	いであろう
Das der solt kommen in dem Ge[ist]	その白鳥は世界に向けて快く歌うだろう
Elie welchs er hat beweist	こうしてマルティン・ルターが告げ知らさ
Reichlich vber die dreissig jar	れた

- 30 Gottes wort gepredigt lauter kla[r]
 Vns allen zu heil vnd fromen
 Biss ihn Gott hat hingenomen
 In stiller rhw ins Himels stath
 Wie Johan Hus weissaget hat
- 35 Drumb seind diese Propheten b[ereit]
 Heilig zu halten alle zeit
 Obs schon dem bapst vnd seiner (1 語欠)
 Vordreust /so bleibes doch ewig (1 語欠)
- 40 Zu Magdeburgk bey Jörg S(欠)
 ier bey Sanct Peter.
- 聖人は霊の中に誉れ高く見てとった
 彼がエリアの霊のうちに來る定めにあるこ
 とを
 そしてそのことを彼（ルター）は証明した
 30年以上の間
 神の言葉を偽らず明確に伝え
 我々全てに平安と敬虔をもたらした
 神がルターを平穩な安らぎの中で天へ召す
 まで
 ヨハン・フスが預言したように
 だからこそこれらの預言者たちは
 常に神聖にし続ける覺悟がある
 たとえ教皇とその（1 語欠）には不快であ
 っても
 それはしかし永遠にあり続ける（1 語欠）
 マグデブルクにて、教会の隣（近隣）に住
 まいするイエルク・S印刷所にて[印刷]

図像はビラ全体の左3分の2を占めている。中央には、黒い服を着たヨハン・フスが横向き姿勢、全身で描かれている。右手には紙を、左手は大地と平行に出している。彼の両側には一本ずつ木が並び、その両方に天使がとまっているのが見える。



図像下には、木の根元にそれぞれ白鳥と、焼かれている鶯鳥がいる。その鶯鳥は首を紐で縛られ、棒につながれている。

第一に目につくのは、黒い服である。これは服装による権威付けであると言える。¹¹⁴ これによってビラを見る側に、フスの学識ある立場を瞬時に理解させると共に、テキストの内容にも、神の言葉との関連を連想させ、さらなる権威を付属させる。では、フスが持つこの紙は何を意味するだろうか。例えば、1521年や1522年に出された「マルティン・ルターの肖像画」ビラをはじめとする、3分の2以上のルター肖像画ビラにおいて、彼は聖書を手にしている。¹¹⁵ これは福音主義を根底とするルターにとって、聖書が彼の最大の象徴であったと同時に、ドイツ語聖書を完成させた人物ということからだ。¹¹⁶ このように考えていくと、このフスが手にする紙は、活発な執筆活動を象徴しているのではないかと思われる。現に神学者でもあるフスは、1412年にヨハネス23世に対する『反贖宥状論』、1413年には『教会について』など、教皇や教会に対する批判を書き表している。つまり、フスが単なる聖職者にとどまることなく、自らの生命を危険にさらしながらも、カトリック教会の腐敗を積極的に訴えたという、当時で言えば100年以上も前の事実を、この印刷ビラが配られた時代の民衆に知らしめるために、フスに紙を握らせたと考えることができる。

次に鷺鳥と白鳥、さらに木を見ていこう。これらは、言語テキストの内容にあわせて描かれたものだ。「鷺鳥を意味する彼の名前はよくもじって使われて」¹¹⁷ いる。田辺・佐藤（1995）に言及されている「彼」とはもちろんフスのことである。フスと鷺鳥がもじられるのは、チェコ語で鷺鳥を *husa* と言うことからきている。フスが1415年のコンスタンツ宗教会議によって、焚刑にあった様子を、当該の挿絵では鷺鳥を焼く描写によって表していると言えるだろう。また、テキスト内容から鷺鳥が白鳥になって蘇ることが述べられており、鷺鳥と白鳥の双方がフスを表している可能性がある。さて、この二羽の背後に位置している木は、一見すると図像における単なる背景装飾とも見てとれる。しかし、こうも考えられないだろうか。ここでの木は、それぞれの鳥と天をつなぐ一本の梯子のような役割を果たしている。鷺鳥の場合は死後に神に召され、また白鳥の場合は生のある間、神の恩寵を受ける。つまり、フスが神との永遠のつながりがあることを表し、神から認められた存在であることを示している。神とのつながりを表すことは、フスによるカトリック批判の活動が正しいものであったことを主張している。

¹¹⁴ チャルディーニ（2007: 355）を参照。

¹¹⁵ Scribner（1981: 17）を参照。

¹¹⁶ この点について、Scribner（1981: 16）はルターを *a man of the Bible* と呼んでいる。

¹¹⁷ 田辺・佐藤（1995: 140）

ではここからは言語テキストを見ていく。まず、読み取れない単語を除いた全てにおいて、脚韻 (Reim) が使用されている。¹¹⁸ 「読み聞かせ」が行われていた背景を考えると、聞きやすさを得るために韻が踏まれていたことは容易に想像がつく。5 行目では、フスを *viel heilig* 「至聖の」と修飾することで、まずフスを聖人化し、フス自身に対する権威付けを行っている。さらには、火刑の判決は間違いであったこと、ひいてはカトリック教会そのものが間違いであることを主張し、カトリック教会に対する信頼を聞き手から喪失させようとしている。7 行目から 8 行目にかけて、ローマ・カトリック教会 (Rom) を悪魔 (Teuffel) と関連づけている。悪魔は元来、聖書においてキリストの敵とされてきた。そのため、当時の民衆にとって、一番身近な悪を代表しているのが悪魔だ。悪魔は悪の中でも絶対的な位置を占め、慈悲の余地を与えない。そのため、カトリック教会の墮落を絶対に許さない立場を表明すると同時に、「カトリック教会＝悪魔」というイメージを聞き手に植え付けようとしている。

9 行目には、*allzeit allein* 「常に～のみ」という頭韻 (Alliteration) を含む、誇張法 (Hyperbel) が使われている。頭韻により、聞き手にはリズム良く聞こえ、さらに聞き手である民衆に対し、「常に普遍的なキリスト教会のみ」と述べることで、後述されている反キリストからの差別化を図っている。この差別化はまた、11 行目にもみられる *allein* にも当てはまることである。10 行目から 13 行目にかけて、*Christlich* 「キリストの」、*Christum* 「キリスト (対格)」、*Christus* 「キリスト (主格)」、*Antechrist* 「反キリスト」という語尾変化、もしくは接辞を含んではいるものの、キリストの意味をあらわす単語が同語反復 (Tautologie) されている。ここでは、キリストと「反」キリストというコントラストをまず明確に示すとともに、団結した「反カトリック」への認識を高めようとしている。

19 行目から 24 行目まで、フスの預言内容が諷諭 (Allegorie) を用いながら述べられている。ここで登場するのが、図像にも描かれている鷺鳥と白鳥だ。鷺鳥がフスを表していることは、図像分析の段階で述べたが、ここではさらに深く、この二羽の鳥についてみていく。鷺鳥は、野生の雁を飼育用に変種させたものであるから、ここでは雁と考えるべきであろう。雁は神秘的な預言能力を持つ鳥として知られており、¹¹⁹ この「預言」としての相似からも、雁 (鷺鳥) がフスに当てはめられたことは想像がつく。その預言内容をみ

¹¹⁸ 1 行目に記した Jar は、オリジナルからは (紙の切断のため) 読み取ることができないが、同時代の文献である Göltzsch (1563: 1) に *Als man thet beschreiben Tausent Jar / fünff hundert Dryvndsechßig zwar* と記されていることから、この言い回しを類推し、Jar を補った。脚韻の関係からみても、次の行末の *furwar* と Jar はうまく合致する。

¹¹⁹ クレベール (1989: 116) を参照。

ると、鷺鳥は焼かれても 100 年後に蘇ることになっている。この 100 年という具体的な数字は、フスが火あぶりにされた年から 100 年と考えると、1515 年となり、当時すでにヴィッテンベルク大学にてカトリック教会の墮落などを講じていたことも含め、24 行目にあるように、マルティン・ルターをさしていることがわかる。そうであるならば、蘇った白鳥はルターであることになる。ではその白鳥はなんであろうか。聖書という観点から述べると、白鳥は汚れた生き物の一つとして列挙されているにすぎず、特別な意味は付加されていない。¹²⁰ キリスト教においては、深い意味のない白鳥は、「ケルト人やゲルマン人たちが伝えるローカルな神話・伝承に、ギリシア神話の重い権威」¹²¹ が混じりあって、今日に至るまでの白鳥というシンボルを形成してきた。輝きをもつ白さや太陽など、象徴するものはさまざまであるが、ここで興味深いのは錬金術との関わりだ。4 段階に分かれている「賢者の石」の工程のうち、それぞれが色と鳥のコードで説明される。その 3 段階目が白鳥による白の過程であり、白く輝く水銀が他の金属と素早く結びつく性質が、白鳥の白い翼と連想されたことによる。この白鳥の段階を経ると、不老不死の石を得ることが出来る。¹²² この不老不死の概念は、最終行にある *ewig* 「永遠に」とも関係する。さらに錬金術に関連するのは雁も同じである。ギリシア人やケルト人の信仰では、雁は人類に鉄の作り方を教えたとして、秘伝を授ける鳥とみなされていた。¹²³ その上、錬金術はカトリック教会においては、異端と見なされていた。

霊的錬金術師は、賢者の石をキリストと同一視するのみならず、自分自身をもこの両者と同一化していく。ここに異端性が含まれていることは明らかである。ルターは、実際の効用のためにも、またキリスト教の教義を検証するためにも、錬金術を称えた数少ない高位の教会人のひとりである。

エリアーデ (2002: 471)

この点においても、カトリックとルター派の違いを明らかに示す為に錬金術をほのめかしていると考えられる。

このようにみていくと、鷺鳥と白鳥の諷諭の根底には民間信仰と、錬金術という科学の背景があるように思われる。信仰はそれを信じる者にとっては権威となり、科学的証明も

¹²⁰ ミルワード (1992: 322) を参照。

¹²¹ 上村 (1990: 121)

¹²² 錬金術については、村上 (1990: 127-128) を参照。

¹²³ この点については、クレベール (1989: 117) を参照。

権威を持つものである。この二つの権威をテキスト内で示すことで、聞き手に対してフスの正当性への信頼を絶対的なものにしようとしたのではないかと考えることができる。

30行目と32行目における *Gott* 「神」の使用は、キリスト教の中でも最高の権威付けを意味しており、神と共にあるのはフスやルターの側であることを、ここでもう一度聞き手に確認させる効果を持っている。

3.4.2. 印刷ビラ『ルターの敵対者』の分析

この章で分析対象とする印刷ビラの基本情報とテキストは、次の通りである。

- a. タイトル：ルターの敵対者
- b. 作者：不詳
- c. 年代：1521年頃
- d. 翻訳：森田安一

<図像>

出典：森田安一 (1993) 『ルターの首引き猫』 山川出版社. (巻末資料2)

<言語テキスト>

(ドイツ語の言語テキストは筆者が文字に起こした。)

図上、左から

Doctor Murnar. Argentinien.	シュトラースブルクのムル馬鹿博士
Doctor bock Emser Lips(e)n:	山羊博士ライプツィッヒのエムザー
Leo papa .x. Antichrist:	教皇レオ、反キリスト
Doctor Eckius. Ingelstatensis:	インゴールシュタットのエック博士
Doctor Lemp. Tubingensis:	テュービンゲンのレンプ博士

図中央、左から

Lieber Eck nymm also von mir zu gut

Ich waiß noch ein gutten Cardinals hut

Magstu den Luther Concludieren

Will ich dir dein Servkopff mit ziren

愛するエックよ、さあ、わたしからの好意を受けなさい。

さらにわたしは枢機卿の帽子についても心得ている。

もしあなたがルターを打ち負かすことができれば

わたしはその豚の頭をそれで飾ってあげよう。

Herr Löw all bübrey vnd faule sachen

Kan(n) ich durchs gelt widerumb gerecht mache(n)

Mit meiner Sophistrey vnd grossem geschray

Haw ich den Luther vnd Gots wort entzway

レオ様、すべての破廉恥な行為といかがわしい問題を

わたしは金でふたたび正しくしてみせます。

多くの詭弁と仰々しい叫び声で

わたしはルターと神の言葉とをぶちこわしてみせます。

図下、左から

Der Bapst wolt auch ein mauser ban

Des nam sich Doctor Murnar an.

M(読み取り不可能) auß hin vnd her vnd widerumb

Noch ist der Luther gerecht vnd frumm.

教皇はネズミも一匹破門にしたがっている。

ムル馬鹿博士がその仕事をひきうけ

あちこちあちこち動いたけれど

ルターはなお正しく、信仰深いのだ。

Ach junckfraw Bock wie stinckst so hart

Nach keuschait in deinem langen part.

Ich glaub daß dein Theology

Sey merers teyls bocksteitzlerey.

ああ、処女の山羊さんよ、なんでそんなに強烈に臭うのか

お前の長い髭のなかに貞節の匂いが。

わたしは思う、お前の神学は

ほとんど山羊のダラダラ話学だ。

Der irdisch Got vnd Antichrist

Hat vil gepraucht bißher der list.

Mit gewalt und geytz falsch Curtisey

Ach Christ von hymel mach vns frey.

地上の神・反キリストは

これまで多くの策略をめぐらしてきた

暴力、吝嗇（りんしょく）、偽りの佞臣（ねいしん）を用いて。

ああ、天におられるキリストよ！わたしたちを自由にしてください。

Recht wie ein Saw lebt Doctor Eck

Wan er hat wein vnd edelweck.

Sein Lo(g が抜けたと考えられる)ick thut probieren mer

Dan(n) Bibel gschrift vnd Christus ler.

エック博士はまさに豚のように生きている

かれがワインを飲み、上等パンを食べるときには。

かれの論理は聖書やキリストの教え以上に

多くを論証するという。

Herr Doctor Lemp Euangelist

Mit neyd vnd zorn ein boser Christ.

Er wuet vnd pilt recht wie ein hundert.

Der gschrift hat er gar wenig grunde.

レンプ博士は巡回説教者

妬みと怒り狂う悪しきキリスト者。

かれはまさに犬のように猛り狂い、吠えたてるが、

かれの主張はほとんど聖書に基づいていない。



図像において、言語テキストは上下段にわかれて書かれており、この印刷ビラでは、図像とテキストの割合はおよそ7対3ほどである。一番上に書かれているのは、それぞれ描かれている5人の人物の名前であり、そしてその5人というのがルターの敵対者達を指している。しかし頭の様子が少しおかしい。図像左から、頭が猫のトーマス・ムルナー (Thomas Murner)、山羊のヒエロニムス・エムザー (Hieronymus Emser)、ライオンの教皇レオ10世 (Leo)、豚のヨハン・エック (Johann Eck)、そして犬のヤーコブ・レンプ (Jakob Lemp) である。これらの動物は、単に何の理由も無く当てはめられたのではない。まずムルナーの図像から分析する。彼は、その名前がオノマトペとして風刺的にもじられた。つまり、*Murnar* の *mur* は猫の鳴き声であり、¹²⁴ また *nar* は *Narr* という「愚か者」を意味し、「阿呆猫」と同じ発音になると皮肉られた。¹²⁵ ムルナーは、フランシスコ会の修道士であったため、修道服を着ている。また、これは教皇レオ10世を除く他の3人にも当てはまることであるが、「博士」を意味するベレー帽を被っている。¹²⁶ さらに、口にはねずみを一匹くわえているのだが、これは言語テキスト内で言及されているように、ルターを表したも

¹²⁴ Scribner (1981: 74) を参照。

¹²⁵ ムルナーの名のもじりについては、森田 (1993: 230) を参照。

¹²⁶ Scribner (1981: 15) を参照。

のだ。そして右手には、書物（聖書とは言いきれない）を手にしている。ムルナーは「桂冠詩人、神学博士、法学博士の肩書きをもつ一方、市井に交わって教育、啓蒙、布教活動」¹²⁷を行い、「教育的・啓蒙的用途の為に書かれた専ら散文的な著述類と、時代に共通する性格として教訓的傾向を強く帯びるとはいえ専ら韻文で著された文学的作品、及び宗教的意図が前面に出る論争的文書」¹²⁸という幅広い著作活動を行っていた。またルター同様、非常に高い教育を受け、言語の面、そして文学的においても、かなりの才能を持っていた。¹²⁹ このことを示すために、書物を持たせたと考えられる。

エムザーは山羊を意味する彼の名と、¹³⁰ 彼の紋章に山羊が描かれていたことに由来している。¹³¹ また、牡山羊はきつい体臭や不潔さ、あからさまな獣性を持ち、¹³² さらに中世においては悪そのものに置き換えられ、古典的な悪魔をあらわす図像は山羊の角と足を持っている。¹³³ ここからエムザーに対し、悪魔の印象も付随させることができる。エムザーは右手に紙を持っている。これは当時、彼が教父、そしてエラスムスの諸著書の翻訳者として認められていたこと、¹³⁴ そして1520年から27年にかけてルターの個々の著作に対し、多くの反論文書を書いたこと¹³⁵などの執筆活動を示唆するものとして考えてよいだろう。

次に中央の教皇レオ10世だが、これはLeoがラテン語でライオンを意味すること、またその残忍さが、ライオンと同義として考えられた結果だと言える。¹³⁶ 教皇レオ10世は、豪華な生活を思わせるきらびやかな衣装を身にまとっている。また頭には教皇を象徴する三重冠をかぶり、手には教皇杖を持っている。この教皇レオ10世は1520年に教勅によってルターに破門警言し、翌1521年にはルターを破門した張本人である。¹³⁷

エックについては諸説あるようだ。彼の名Eckを様々にもじり、例えばKeckとして「向こう見ずな」、Dr. EckとしてそこからDreckが導き出され、「汚物、ふん、泥」を連想させた。もしくはGeckとして「うぬぼれ屋、気どり屋」などという揶揄があったそうだが、

¹²⁷ 新井（1984: 6）

¹²⁸ 新井（1984: 6）

¹²⁹ Nitta（2008: 174）を参照。

¹³⁰ Scribner（1981:74）を参照。

¹³¹ Scribner（1981:74）と森田（1993: 155）を参照。

¹³² クレベール（1989: 77）を参照。

¹³³ クレベール（1989: 79）を参照。

¹³⁴ シュトゥッペリヒ（1984: 356）を参照。

¹³⁵ 『キリスト教人名辞典』（1986: 285）を参照。

¹³⁶ Scribner（1981: 75）と森田（1993: 196）を参照。

¹³⁷ 『キリスト教人名辞典』（1986: 1850）を参照。

一番有力なのは *Eck* から *Ecker* という「どんぐり」の単語を結びつけ、どんぐりを食べる動物、つまり「豚」を当てはめたものである。¹³⁸ 左手にはどんぐりを握っているため、¹³⁹ *Ecker* というもじりがこの印刷ビラにおいて示唆されていることは間違いないであろう。豚は本質的に汚い動物とされ、¹⁴⁰ それは旧約聖書における汚れた動物として特徴づけられている。¹⁴¹ ことに関わると考えられる。さらに、どんな餌でも大量に呑み込むという豚の能力¹⁴² も含めて、豚の汚さと、どんな物でも構わず取り込もうとする貪欲な姿勢を、エックに重ねている。

最後にレンプだが、実際のところなぜ犬が使用されたのかはよくわかっていない。彼に対する名前もじりの揶揄はある。それは *Lemp* を *Lumpen* とし、「ぼろ、がらくた」とした。しかし、犬とはやはり結びつかない。¹⁴³ Scribner (1981) はこの印刷ビラにおいて、レンプは手に持つ骨に関して、喧嘩好きでやかましく口論する、噛みつく野犬として描かれていると述べている。¹⁴⁴ 確かに神話の世界では、犬は攻撃的な性格を持つ動物として描かれ続けており、¹⁴⁵ この性格とレンプの性格を同一視していると考えられる。

ここまで見てきてわかったことは、図像全体にあるちぐはぐさである。敵対者の5人にはそれぞれ修道服を着せ、ベレー帽をかぶせ、また教皇レオ10世には豪華な衣装を着させている。さらに、きらびやかさを増す額縁まで描く一方で、5人の頭は動物に置き換えられ、ここでの大きなコントラストが図像の中に滑稽さと皮肉を生んでいる。

では、今度は言語テキストに目を向けよう。ルターの敵対者の紹介ではまず、ムルナーとエムザー、そしてエックとレンプが、それぞれ脚韻を踏んでいる。教皇レオ10世だけがどちらの脚韻とも合わないが、そうすることで、ここではかえって目立っている。これは、彼の名前を強調させることで、教皇レオ10世が5人の中でも、特に一番の悪者であることを示していると考えられるだろう。また、エムザーは初めはルターに対し友好的であったものの、1519年のライプツィヒ討論会後は敵対関係となった。¹⁴⁶ この討論会をきっかけとしたために、*Lips(e)n* と修飾したようである。次に教皇10世には *Antichrist*「反キリスト」

¹³⁸ エックの名のもじりについては、森田 (1993: 158) を参照。

¹³⁹ Scribner (1981: 75) を参照。

¹⁴⁰ クレベール (1989: 130) を参照。

¹⁴¹ ミルワード (1992: 322) を参照。

¹⁴² クレベール (1989: 130) を参照。

¹⁴³ レンプの名のもじりについては、森田 (1993: 164) を参照。

¹⁴⁴ Scribner (1981: 75) を参照。

¹⁴⁵ クレベール (1981: 23) を参照。

¹⁴⁶ 藤代 (2006: 138) を参照。

と記述されている。ここで明確に、カトリック教会の教皇はキリストとは真逆の存在であることを主張している。また、聞き手は「我々こそが正しいキリスト教徒」であるという、カトリック教会との差別化を図っている。次にエックの名前を見てみる。ライプツィヒ討論会はルターとエックのための討論であり、当時エックはインゴルシュタット大学の教授であった¹⁴⁷ ことから *Ingelstatisensis* と修飾されたと考えることができる。またレンプもテュービンゲン大学教授であり、¹⁴⁸ このことから *Tubingensis* を使用したと言える。

では次に図の中央部分を見ていく。まず気がつくのは、ここからはどの言語テキストにも2つずつの脚韻が使用されているということである。左側のテキストは教皇レオ10世からエックに対するテキストであり、それは1行目に使われている *Lieber Eck* 「愛するエックよ」という呼びかけ表現の中にうかがえる。2行目には枢機卿の帽子がメトニミー (*Metonymie*) として使用されており、その帽子はここでは枢機卿の地位を意味している。また、この *Cardinals* 「枢機卿」も3行目にある *Concludieren* 「打ち負かす」もラテン語法 (*Latinismus*) の使用である。¹⁴⁹ 当時は、学識のある者は皆ラテン語を使用していた。ここでラテン語法を用いることで、教皇レオ10世のことばの中に上流階級であることを示している。しかしながら、ラテン語は当時の民衆にはほとんどなじみがなく、大衆性もない。ここではラテン語を使うような、民衆とは階級が違う人であるから、民衆のことは何にもわかっていない、というような批判的な意味を含んでいるとも考えられるだろう。つまり、ラテン語法によって教皇レオ10世と、聞き手である民衆の距離をより大きくしようと狙ったのだ。図像分析の中で述べたように、豚は元々汚らしい動物である。4行目において、豚の頭を飾ると言うことで、矛盾さに強調を置き、聞き手の注意を惹きつけている。これはつまり「残忍な」教皇レオ10世によって「汚れた」「食欲な」エックでさえも枢機卿になることができってしまう、ということを民衆に伝えようとしている。

今度は *Herr Löw* 「レオ様」という呼びかけがあることから、エックから教皇レオ10世に対するテキストであることがわかる。図中央の左、1行目に *all* 「全ての」を使って次に続くものを誇張している。図中央の右、4行目には *Haw* とあり、*hauen* 「打つ」であることがわかる。これは非常に乱暴な単語であり、野蛮語法 (*Barbarismus*) に含むことができる。カトリック教会を擁護する、知識ある大学教授という表の顔に対し、彼の内面は非常に野蛮であり教養が低いことを、この *hauen* を使うことで暴きだそうとしていると考えら

¹⁴⁷ 藤代 (2006: 138) とシュトゥッペリヒ (1984: 355-6) を参照。

¹⁴⁸ 森田 (1993: 162) を参照。

¹⁴⁹ ラテン語法については、ラウスベルク (2001: 77) を参照。

れる。

ここから、図像の中で一番下に位置しているテキストの分析を行っていく。これは一番上のテキストと同様に、ルターの敵対者たちが描かれている真下に位置したテキストが、その人物の説明となっている。では左から順に見ていく。最初はムルナーに対するテキストである。3行目に *hyn vnd her vnd widerumb* 「あちらこちら」と記述されており冗語法 (Pleonasmus) と言ってよいだろう。ムルナーはルターを捕まえるために俊敏な猫と同様、必死にことを進めたが、ルターを未だ捕まえられない様子を強調させている。つまり、ルターには責めるべき事柄が見つからず、4行目に書かれているように、彼が常に正しい行いをしていることを、強調する効果を持っている。

次に左から2つ目のエムザーを見ていく。1行目の最初に *Ach* 「ああ」という感嘆法 (Ausruf) が使用されている。感嘆法による情動は、装われたもの、もしくはうわべだけのものと考えられるから、¹⁵⁰ 1行目と2行目に対する皮肉への強調と考えられる。山羊は「淫蕩な性質」¹⁵¹ を持つものとしても知られており、1行目において *Bock* 「オスヤギ」を *junckfraw* 「処女」と修飾することで矛盾語法 (Oxymoron) により、さらにエムザーの本来のだらしない生活を聞き手に知らせようとしている。これは2行目にある *keu(n)schait* 「貞節」にも当てはまる。

次のテキストすなわち、下の中央に位置しているのは教皇レオ10世に対するものである。ここでも1行目に *Antichrist* 「反キリスト」と教皇レオ10世を名付け、聞き手にもう一度教皇レオ10世のキリストとは真逆の位置づけを確認させている。これにより、*Der irdisch Got* 「地上の神」は本来 *Got* という単語が持つキリスト教における最高權威の地位を奪われているだけでなく、教皇レオ10世が *Antichrist* の中の *Got* という、最も軽蔑すべき存在であることを示している。1行目のテキストで聞き手に対する教皇レオ10世への信頼を根絶しようとしている。また3行目には *gewalt vnd geytz falsch Curtisey* 「暴力、吝嗇、偽りの佞臣」というように列挙されている。これまで教皇レオ10世がいかに多くの、そして偽りの行為を「反キリスト」として行ってきたかということを、列挙することで強調している。4行目の最初には、エムザーのテキスト1行目で使用されたように、*Ach* 「ああ」という感嘆法が皮肉的に用いられている。さらに *Christ von hymel* 「天におられるキリスト」は1行目の *Der irdisch Got vnt Antichrist* 「地上の神・反キリスト」と対比的に置かれており、聞き

¹⁵⁰ プレットによれば、「レトリックの視点から見れば、感嘆法は一つの技巧である。すなわち、その根底にある情動は装われたもの (geheuchelt) であり、うわべだけのもの (simuliert)」(2000: 147) である。

¹⁵¹ クレバー (1989: 79)

手に、天にいるキリストこそが真のキリストであることを強調する効果を持っている。

したん右から2つ目、エックに対するテキストの1行目には、*Recht wie ein Saw*「まさに豚のように」と述べられ、直喩 (*Vergleich*) が使用されている。さらに *Recht*「まさに」で修飾することでより強調し、その信憑性を高めようとしている。図像分析で豚の性質にもふれたが、テキスト内で明確に豚とエックの貪欲さの共通性を、直喩を使って述べることで、聞き手へのよりの確なエックの性格理解を促そうとしている。

最後に下の一番右に位置する、レンプに関するテキストを見る。2行目には *Christ*「キリスト者」とあるが、それを修飾しているのが *boser*「悪しき」であり、さらに *Mit neyd vnd zorn*「妬みと怒り狂う」で修飾している。ここで教皇レオ10世のように、*Antichrist* と記さないのは、「キリスト者」を装った悪も存在する、ということを表すためではないかと考えられる。さらに3行目では、エックのときと同じように、*recht wie ein hundert*「まさに犬のように」と直喩を使い、犬の攻撃性や凶暴性と、レンプの性格が関連していることを表している。

3.4.3. レトリック分析からの考察

以上、2種類の印刷ビラを分析してきたが、図像と言語テキスト双方の随所に、レトリックの手法が効果的に用いられていることが明らかになった。しかし、どの印刷ビラも、ただ単にレトリックがいくつも集積されているだけではなく、それぞれが関連し合いながらテキストを作り上げている。

1番目に分析をおこなった『ヨハン・フス』の印刷ビラでは、カトリック教会に対し、自らの命をかけて批判をしつづけたフスを題材として事実を述べることで、フスの正当性、ひいてはプロテスタントとしての、宗教改革者達の主張の正当性を伝えようとしている。その正当性は、古くからの民間信仰と、科学的権威で裏付けられることでさらに高まる。また、*Christ* や *Gott* の多用も、非常に効果的と言える。キリスト教が生活の基盤であったとも言える当時の民衆にとって、キリストの名や神という表現が関連しているだけで、権威をもったものと感じ、ある種、盲目的に信用していたのであろう。そして同じような語彙を反復させることでより聞きやすさを与えた。なぜなら「反復は生のリズムそのもの」

¹⁵² であり、「脈拍、呼吸、一步一步、活動と休息」¹⁵³ であるからだ。さらに、これとは逆の効果を狙ったものが、*Antichrist* や *Teufel* とカトリック教会を結びつける方法である。このように明確な対比を用いることで、聞き手により強く印象づけることができる。フスの印刷ビラには、事実を根底にしっかりと据えて、論理的に民衆を説得しようという性格を見てとることができる。

2 つ目の印刷ビラ『ルターの敵対者』では、まず図像に娯楽性を多く含んでいることがわかる。5 人の敵対者に動物の頭をさせることで、笑いを誘う要素とし、また少々グロテスクさも加えられている。インパクトのあるものは記憶への手助けとなることから、¹⁵⁴ 人々を楽しませながらこの印刷ビラの印象づけを行っている。また、この動物の頭を「仮面」と捉えることもできる。樋口 (2005) によれば、「仮面が人格を支配」¹⁵⁵ し、「仮面は人格そのものである」¹⁵⁶ と言う。まさにこれらの動物の仮面は、顔を覆い、仮面の下にある本当の顔を隠すという機能を持っていながら、ルターの敵対者 5 人そのものの姿を表しているのだ。さらに樋口 (2005) によれば、仮面を使用することで、「隠すことの中に、裏返された誇張法的一端を見る」¹⁵⁷ ことができると述べている。つまり、5 人の敵対者に見合った仮面を被せることで、誇張法の働きが生まれ、かえってそれぞれ 5 人の本性を、より際立たせて表現することができる。

言語テキストに関しては、揶揄が目立つ。この攻撃的な姿勢や文体は、当時の 16 世紀の社会と関係している。¹⁵⁸ 当時宗教改革者らは、勢いをつけてきたものの、依然としてプロテスタント (新教徒) はカトリック教会よりも政治的、社会的に下に位置づけられていた。¹⁵⁹ 不利な立場にあった宗教改革者らは、カトリック教会の権威と秩序をくつがえすために教会の地位を強く打ちのめす必要があった。¹⁶⁰ そのため、宗教改革者たちはカトリック教会側を感情的に刺激するよう、挑発的に、そして直接的に述べていた。¹⁶¹ このような社会的影響が、印刷ビラにも反映され、カトリック教会を大いにあざける印刷ビラが登場した。また、その風刺性は動物メタファーを多く織り交ぜたものでもあり、テクス

¹⁵² 瀬戸 (2002: 105)

¹⁵³ 瀬戸 (2002: 105)

¹⁵⁴ オング (1991: 149-150) を参照。

¹⁵⁵ 樋口 (2005: 20)

¹⁵⁶ 樋口 (2005: 20)

¹⁵⁷ 樋口 (2005: 27)

¹⁵⁸ Nitta (2008: 183) を参照。

¹⁵⁹ Nitta (2008: 183) を参照。

¹⁶⁰ Nitta (2008: 183) を参照。

¹⁶¹ Nitta (2008: 183) を参照。

ト内においても、娯楽性が存在すると同時に、皮肉で満ち溢れている。例えば教皇レオ10世とキリストを明確に区別する対比法であったり、抽象概念を説明するのに用いられるメタファーを、特定された人物に使用し、よりわかりやすい内容を作り上げている。この印刷ビラでは、娯楽的要素で民衆を惹き付け、積極的なカトリック教会への過度の揶揄をもって、民衆に教会の腐敗を知らしめようとしたと言える。

このように、分析してきた2つの印刷ビラはそれぞれ「カトリック教会=敵」と「宗教改革者=味方」という区別をつけ、プロテスタントである宗教改革者の正当性を主張し、また、カトリック教会の腐敗を批判している。聴衆を納得させるには、「激しい感情をかき立てること」¹⁶²が必要である。つまり宗教改革者達は、まず、少しでも多くの民衆の心を宗教改革へと動かすことを目的に、民衆の心を掻き立てようとした。彼らの図像とテキスト双方におけるレトリックの手法が、印刷ビラの内容を何倍も効果的に民衆に示し、書き手と読み手（聞き手）との心的距離を近づけるのに効果があったと考えられよう。

¹⁶² (プレット 2000: 20)

4. 新聞における構文

4.1. 「最新報告」と週刊新聞の比較

さて、第3章で分析した17世紀初頭の週刊新聞の記事において、マイクロレベルの「近いことば性」の要素があまり多くは観察されなかった。また、マクロレベルにおいては主文よりも副文の数が多かったことや、1つの基礎文を構成する単語数の値がきわめて多かったことにより、最終的な「近いことば性」の値が2.76%という結果になった。

ここでは、17世紀初頭の週刊新聞のテキストを、同時代の「最新報告」のテキストと共時的に比較することによって、週刊新聞の特徴を見出したいと思う。分析対象とする「最新報告」は、1610年に流布した「アンリ4世の殺害」(,Wärhafftige erzehlung/ wilcher gestalt der Aller Christlicheste König in Franckreich vnd Navarra / Heinrich der vierte in der Häuptstadt/ Paris Jahmerlicher weise ist ermordt vnd vmbracht worden. ') (フランスのアンリ4世が殺害された事件について書かれている)である。総単語数は、394語である。¹⁶³

4.1.1. 受動態の頻繁な使用

Demske-Neumann (1996)によれば、週刊新聞において「目を引くのは、受動的な構造が高い頻度で」出現することである。¹⁶⁴ここで言及されている受動態は、a) werden/sein + 他動詞の過去分詞、b) sein + zu + 不定詞、c) lassen + sich + 不定詞の3つの形式である。¹⁶⁵1610年に流布した最新報告「アンリ4世の殺害」では、以下のように受動態が2例見られる(下線は筆者による)。

2) die [sic!] Hertz [...] gestochen gewesen¹⁶⁶

心臓は 刺されていた

¹⁶³ 出典：Harms, Wolfgang (Hg.) (1980): *Die Sammlung der Herzog August Bibliothek in Wolfenbüttel, kommentierte Ausgabe. Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. Jahrhunderts. Vol. 2. Historica. München, p. 146.*

¹⁶⁴ Demske-Neumann (1996: 94)

¹⁶⁵ Demske-Neumann (1996: 94) を参照

¹⁶⁶ 定動詞は省略されている。

3) [...] ist der Mörder [...] gefangen worden

殺人者は 捕まえられた

一方、週刊新聞「[1609年] 3月18日付けのウィーンからの報告」には、以下のように受動態が13例確認できる。¹⁶⁷

4) diese fürsichtigkeit gebraucht worden

このような慎重さが 必要とされた

5) so oft einer [...] vnderschieden worden

ひとつ（項目）に 署名される ときはいつも

使用回数から使用頻度を算出するために、Ágel/Hennig (2016) の「近いことば性」測定モデルの「基礎文」の概念を用いる。テキストにおける1基礎文あたりの受動態の使用頻度をパーセントで算出すると、以下の通りである。

表 30：受動態の実数と頻度

	17世紀の「最新報告」： 1610年「アンリ4世の殺害」	17世紀の週刊新聞： 1609年「3月18日付けのウィーンからの報告」
受動態の使用数	2	13
基礎文の総数	40	50
1基礎文あたりの受動態の使用頻度	5%	26%

17世紀の「最新報告」では40の基礎文の内、2文が受動態である（5%）のに対し、17世紀の週刊新聞では50の基礎文の内、13文（26%）が受動態である。つまり、17世紀の週刊新聞には、17世紀の印刷ビラよりもはるかに高い頻度で受動態が使用されていると言える。

¹⁶⁷ 示した例にはどちらも定動詞が省略されている。

4.1.2. 複合的な名詞句および前置詞句の使用

次に、複合的な名詞句そして前置詞句の使用についてみていこう。Straßner (1997) によれば、17 世紀初頭の週刊新聞には、「複合的な名詞句が目立って」¹⁶⁸ 使用されているという。複合的な名詞句を使用することで、「要約された形式の中で、出来事の詳しい状況を述べ」¹⁶⁹ ることができる。さらに、「接尾辞 *-ung*¹⁷⁰ による名詞を伴う前置詞句 [...] その他の名詞化¹⁷¹ を伴った前置詞句も要約することに貢献する」¹⁷² と指摘されている。

まず、17 世紀の「最新報告」では、以下のような、「～すること」を表す動作名詞を伴う前置詞句が 2 つ使用されている。

6) wegen gedachter Krönung

上述の戴冠のために

7) durch verhinderung eines Wagens

(別の) 馬車による妨害によって

次に、17 世紀の週刊新聞での使用例は、次のとおりである。

8) durch bemühung der Mehrerischen Stende

メーレンの諸身分の人々の尽力によって

9) mit fürweissung ihrer Privilegien

(皇帝の) 特権の提示とともに

10) die Ersetzung der Oberkeit vnd Empter aus jhrer May: Cämmerer vnd geheimer Rächten

国王陛下の財務長官と枢密顧問官からのお上および各役職の代替

¹⁶⁸ Straßner (1997: 37)

¹⁶⁹ Straßner (1997: 37)

¹⁷⁰ 接尾辞 *-ung* を使用することで、動詞から名詞を派生することができる。

¹⁷¹ 接尾辞 *-heit* は、形容詞や名詞に使用することで名詞を派生することができる。

¹⁷² Straßner (1997: 38)

11) nach gelegenheit jhrer qualidet

それぞれの特性のあり方に応じて

このように、週刊新聞には、動名詞を伴う名詞句と前置詞句の使用が4回見られる。動名詞を伴う名詞句および前置詞句の使用回数は、17世紀の週刊新聞のほうが「最新報告」よりも多いことになる。さらに、複合的な名詞句という観点から、いくつの単語で名詞句が構成されているのかをみってみる。分析対象ごとに、名詞句の構成単語数の平均値を割り出してみると、「最新報告」では平均構成語数が3.5語、週刊新聞では8.25語という結果が得られる。動作名詞を伴う名詞句の実数と平均構成語数は、以下の表の通りである。

表 31：動作名詞を伴う名詞句の実数と平均構成語数

	17世紀の「最新報告」： 1610年「アンリ4世の殺害」	17世紀の週刊新聞： 1609年「3月18日付けのウィーンからの報告」
名詞句の使用数	2回	4回
平均構成語数	3.5語	8.25語

以上により、週刊新聞には「最新報告」と比べ、相対的に長い名詞句がより多く使用されていると言える。このことは、「最新報告」よりも週刊新聞のほうが「近いことば性」が低いことを示している。

4.1.3. 数珠つなぎ複合文の使用

次に、「数珠つなぎ複合文」の使用についてみていこう。数珠つなぎ複合文 (abperlendes Satzgefüge) という構文は、「主文の後に副文の複合体がつながっていく」¹⁷³ 構文のことを意味している。すなわち、先頭の主文を出発点とし、いくつもの副文が後方へと続く文のことを意味している。つながる一つ一つの文が、次の図のようにまるで連なる数珠のように見えるからである。

¹⁷³ Demske-Neumann (1996: 78)

図 4 : 数珠つなぎ複合文の図式化



Polenz (2013) によれば、数珠つなぎ複合文においては、「報告される出来事を中心部分となる主文のあとに、二つ以上の副文 [...] が続いている」。¹⁷⁴ Demske-Neumann (1996) は、「1609 年の Relation と Aviso から選出したコーパスに基づきながら量的な評価を行うと (36885 語からなる総数で 1445 文)、複合文という複合構造に関しては、1609 年のテキストにおいて数珠つなぎ構造タイプが目を見くほど高い頻度で使用されていた (63.5%)」¹⁷⁵ と主張している。このことから Demske-Neumann (1996) は、「この数珠つなぎ複合文の高い使用頻度は、17 世紀の新聞における複合文の典型的な構造であるということに帰することができる」¹⁷⁶ と述べている。

17 世紀の「最新報告」には、数珠つなぎ複合文は確認できない。一方、17 世紀の週刊新聞には、数珠つなぎ複合文が次のように計 4 回確認できる。

12) Alhie stehen alle sachen Gott lob wol (主文) / dann auff 12. diß [...] eine vergleichung geschehen (副文) / welche Tactaion [...] gewehrt. (副文)

ここでは、ありがたや、すべてが上手くいっている (主文)。というのも今月の 12 日に [...] ある調停が行われたからである (副文)。その調停は [...] 承認された (副文)。

13) [...] diese vergleichung aber hat Erzherzog Leopoldo [...] sehr mißfallen (主文) / deßwegen sie darwider protestiert, haben aber nichts damit außgericht (副文) / dann diese fürsichtigkeit gebraucht worden (副文) das man jeden puncten ab sonderlich tractiert. (副文)

[...] この調停はしかし、大公レオポルド [...] にとっては全く気に入らないことであつた (主文)。そのことに対して、大公らは異議を申し立てたのだが、それは無駄であつた (副文)。というのも、次のような慎重さが必要とされたから (副文)。それは、それぞれの項目が別個に論じられるということである (副文)。

¹⁷⁴ Polenz (2013: 398)

¹⁷⁵ Demske-Neumann (1996: 79)

¹⁷⁶ Demske-Neumann (1996: 79)

14) Sonst vernimbt man beyläufftig soviel (主文) / das Kön: May: [...] vrsachen [...] zu bewegt haben (副文) / [...] weil dieselbe [...] einiger rechten hülff nit vergewisset/ vnd [...] in so grossen Schulden läßt stecken. (副文)

さらに付随的に次のことが聞こえてきている (主文)。それは、[暗殺の] 原因が国王陛下をして [...] するようにし向けたということである (副文)。なぜなら、その人が [...] 付き添いの者が信頼の置ける人物であるかを確認することをせず [...], これほどに大きな責任を負わせたからである (副文)。

15) [...] diese zulassung oder bewilligung soll sich [...] weiter nicht erstrecken (主文) [...] als [...] sie sich derselben mit fürweissung ihrer *Privilegien* hinfüro gebrauchen mögen (副文) / inmittelst aber die neue *exercitia* [...] bescheid einstellen (副文) / dargegen aber alle 4 Stende [...] den freyen außgang vngehindert haben [...] solle. (副文)

[...] この許可もしくは承認は、次のこと以上に広げられるべきでない (主文)。つまり [...] 彼らがそれを特権の提示によって実行できるとき以外は (副文)。新しい法令によって [...] 通知が中止されることによって (副文)。しかし、それに対して、4つの身分の人々は [...] 妨げなく自由ができるのである (副文)。

この結果をまとめると、以下の表の通りである。

表 32 : 数珠つなぎ複合文の使用数

	17 世紀の「最新報告」： 1610 年「アンリ 4 世の殺害」	17 世紀の週刊新聞： 1609 年「3 月 18 日付けのウ ィーンからの報告」
数珠つなぎ複合文	0 回	4 回
副文の数		主文+副文 2 つ (2 件) 主文+副文 3 つ (2 件)

17 世紀の週刊新聞には、一つの主文に対して二つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が二つ、さらに三つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が二つ観察される。この構文は、「最新報告」には見られないものである。この数珠つなぎ複合文の機能として、先頭の主文によっ

て出来事の現状を示し、後続する副文によって出来事の時間、原因、条件、付帯状況等を正確に伝えるということが挙げられる。すなわち、週刊新聞では、伝達上の正確さに重点が置かれていると考えられる。

以上の考察から、今回の分析対象に限ったことではあるが、17世紀の週刊新聞は同時期の「最新報告」と比べて、受動態、動作名詞を伴う名詞句・前置詞句が多く、さらにはまた数珠つなぎ複合文も伴うことが、構文上の特徴とすることができるであろう。

4.2. 17世紀初頭と18世紀末の新聞における構文比較

この節では、通時的な考察を行いたい。17世紀初頭の週刊新聞《Relation》のテキストと、それからおよそ200年後の18世紀末の日刊新聞である『パイロイト新聞』のテキストを、構文に着目しながら比較する。分析対象とするのは、17世紀については、1609年の1月から12月までの各週刊新聞からそれぞれ記事の一つずつ選出したもの¹⁷⁷、18世紀については、1786年に刊行された『パイロイト新聞』の中から1月から12月までの各月からそれぞれ記事の一つずつ選出した。

4.2.1. 副文の使用

まず、副文に着目して分析を行う。17世紀初頭の週刊新聞《Relation》では、どの程度の副文が使用されていたのであろうか。まずは、分析対象のひとつである1609年の1月8日、Cölnからの記事（全343語）を、以下に示す。

Zeitung auß Cöln/ vom 8. Jenner Anno 1609.

DJe Spannische Besatzung den Rhein hinab/ vnd der orten schreyen starck nach Gelt vnd wollen einmal bezahlt sein/ weil sie vernommen daß die Flotta in Spannia reich einkommen/ vnd fordern die Teutschen allein 9. Thonnen Gold für jhren außstand man besorgt aber sie werden schwerlich dritthalb darvon bekommen/ das wirdt wider ein newen auffstand verursachen/ wie sich dann schon etlich darzu vermercken lassen/ vnd weil der anstand inner 3. tag auß/ vnd man nichts gewiß von

¹⁷⁷ すなわち、1月8日(Cöln)、2月6日(Venedig)、3月9日(Prag)、4月16日(Cöln)、5月8日(Venedig)、6月18日(Cöln)、7月3日(Wien)、8月1日(Rom)、9月11日(Venedig)、10月5日(Prag)、11月6日(Venedig)、12月3日(Cöln)の12記事である。

weiterm hört/ wird das Brandschätzen vnd Plündern wider angehen. Seider jünst haben wir nichts besonders vernommen/ allein melden die Brieff auß Holland/ den biß *Vltimo Frebruarij prolongirten Treves* oder Stillstand/ zwischen den Spannischen vnd Stadischen/ darbey angezeigt wird/ das von beydentheilen abermals ein neue zusammenkunfft auff *Primo Februarij* zu Breda angestellt worden/ vmb zu ersuchen/ ob vielleicht die sachen möchten verglichen werden/ dessen Beschluß öffnet zeit. Der Raht allhie hat sich bißhero auff Jüngst angezeigten puncten/ der Statt beschwerden vnd rechnung belangend/ noch nicht *Resolvirt*, sagen aber/ daß sie sich beschweren/ der Statt *Secreten* der gantzen Burgerschafft/ vñ in sonderheit den Zünfften zuerkennen zugeben/ zubesorgen die Gemeine sich damit nicht werde *Contentiren* lassen/ sagt vnd gibt vor/ soll sie bezahlen/ wölle sie auch wissen/ wo die beschwerden vnd *gravamina* herkommen/ wie es nun ablaufen wird lehret zeit Man sagt Kay: May: habe der Churfüsten von Trier vnd Mayntz gesanden/ in dieser sachen zwischen de(n) Raht vnd der Gemeinde vnderhandlung zu pflegen/ *deputirt*, vnd weil die Burgerschafft von jren habende(n) *privilegien* vn(d) Freyheiten im geringsten nit weichen will/ sondern alles inhalts/ deß verbundbriefs/ welcher sie den weg klerlich weist/ zu halten gedencket Vergangen Drey König Abend hat ein Erbar Raht eine *Proceßion* nach S. Mergen/ vnd zun heyligen Drey Königen in Thum gehalten/ welche *Proceßion* im *Transfix* Brieff Jählichen zuhalten verordnet/ vnnd gleichwolln 80. jahren oder mehr nicht geschehen/ also haben sie diesen puncten im *Transfix* Brieff ein genügen gethan/ da sie nun in allem so fein folgenden/ ist nicht zu zweiffeln/ das alle streittige sachen in der still/ vnd mit gutem frieden möchten verglichen werden.

次にこのテキストから観察された副文は、以下の表のとおりである。

表 33 : 17 世紀初頭の週刊新聞における副文の例 ¹⁷⁸

場所と日付	語数	副文
1609 年 1 月 8 日 Cöln	343	-HS- weil... , daß... sie... , -das... , wie... weil... -HS

¹⁷⁸ HS とは *Hauptsatz* (主文) のこと。なお、以下副文は、主文と視覚的に区別しやすいように囲みをしておく。

		-HS-darbey ¹⁷⁹ ... -das (= dass)... -ob... -dessen... -die... -daß... -wie...-HS -soll...bezahlen -wo ... -weil... -welcher...(weil 内で) -HS-welche... -HS-da... -das...
--	--	---

上に示した 1609 年 1 月 8 日付けの週刊新聞の記事においては、合計で 20 の副文が観察される。343 語からなる記事であるので、100 語あたり副文が 5.8 文あったことになる。¹⁸⁰ 同様にして 17 世紀初頭の週刊新聞における 12 記事の副文の出現割合を示すと、次の表のようになる。

表 34 : 17 世紀初頭の週刊新聞における 12 記事の副文の出現割合 (100 語あたり)

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	平均
5.8	2.1	2.9	3.4	4.6	4.2	3.4	2.3	6.4	4.0	4.0	3.7	3.9

この結果から、17 世紀初頭の週刊新聞では平均して 100 語あたり 3.9 文の副文が観察されることになる。

次に、1786 年 1 月 2 日に刊行された『バイロイト新聞』の中から 1785 年 11 月 24 日、Petersburg からの記事 (全 233 語) を例にして分析を行う。まずは、テキスト全文を以下

¹⁷⁹ Ebert et al. (1993) によれば、関係文において「先行詞が人の場合には前置詞+der が使用され、無生物の場合には da(r)-+前置詞が現れる」(Ebert/Reichmann/Solms/Wegera/1993: 446)。また、シュトラスナー (2002) は当時の新聞の特徴として「文を連結し複合化する手段として、特に代名詞的副詞を伴った継続的關係文 (weiterführender Nebensatz mit Pronominaladverbien) が重要な役割を果たす」(シュトラスナー 2002: 100) と述べている。このように、darbey は初期新高ドイツ語期において、関係文を導く関係詞として機能した。

¹⁸⁰ ここで算出した値は、このあと対数尤度比の計算において副文使用頻度を比較するために再度使用する。

に示す。¹⁸¹

Petersburg, vom 24 Nov.

Die Danziger Sache ist noch nicht völlig ausgemacht. Unser Minister am Berliner, Grafen von Ostermann erhalten, um es dem Preuß. Ministerio zu übergeben. Dieß Memoire enthält Vorstellungen und fordert einige Erläuterungen über die unter Vermittlung des Ruß. Hofes, zwischen St. Königl. Preuß. Majestät und dem Magistrat von Danzig geschlossene Convention. Die Antwort, so der König von Preussen auf dieses Memoire ertheilte, war nicht befriedigend; daher der Russische Vicekanzler ein zweytes an den Botschafter der Kayserin bey dem König von Preussen gelangen ließ. Es scheint aber, diese zweyte Note seinen weitem Erfolg als die erste gehabt zu haben; der König von Preussen scheint entschlossen, nichts an der Convention zu ändern und sich buchstäblich an dieselbe zu halten. Es wäre flug von der Stadt Danzig, wenn sie Geduld hätte; da diese Stadt sich beschwert, daß Sr. Majestät die Werbung noch nicht aus Danzig abgeruffen habe, so wäre ihr vielleicht zu rathen, vonietzo nicht darauf zu bestehen, daß diese Werber augenblicklich rappellirt werden, denn der Magistrat muß sich nicht zu sehr auf fremde Unterstützung verlassen; er muß nicht glauben, daß unser Hof sich bloß um eines fremden Interesse willen, mit dem zu Berlin compromittiren werde; die Umstände, worinn sich die Angelegenheiten von Deutschland befinden, und viele andere triffthige Gründe, erlauben dem Ruß-Hof nicht, sich zu weit in Sachen einzulassen, die von so geringen Belang sind und ihn bloß indirecte angehen.

副文の使用を示すと、以下の表のようになる。

¹⁸¹ 分析対象としたのは 1786 年における以下の 12 記事である ; 1 月 2 日刊行・1785 年 11 月 24 日 (Petersburg)、2 月 2 日刊行・1 月 4 日 (Madrid)、3 月 2 日刊行・2 月 17 日 (London)、4 月 1 日刊行・3 月 28 日 (Donau)、5 月 4 日刊行・4 月 25 日 (Haag)、6 月 3 日刊行・5 月 30 日 (Donau)、7 月 8 日刊行・6 月 19 日 (Paris)、8 月 5 日刊行・7 月 25 日 (London)、9 月 2 日刊行・8 月 8 日 (Madrid)、10 月 3 日刊行・9 月 27 日 (Wien)、11 月 7 日刊行・10 月 31 日 (Maynz)、12 月 2 日刊行・11 月 16 日 (Neapel) である。

表 35 : 18 世紀末の『パイロイト新聞』における副文の例

場所と日付	語数	副文
1785 年 11 月 24 日 Petersburg (1786 年 1 月 2 日)	233	-so ... -daher ¹⁸² ... -wenn ... -HS-da ...-daß ... -daß... -daß... -worinn... -die... -(die)...

1786 年 1 月 2 日に掲載されていた記事では、副文が 10 観察された。233 語からなる記事であるので、100 語中、副文が 4.0 文使用されていたことになる。18 世紀末の『パイロイト新聞』について 12 の記事の副文の割合をそれぞれ示すと、以下の表のとおりである。

表 36 : 18 世紀末『パイロイト新聞』における 12 記事の副文の出現割合

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	平均
4.0	3.2	2.8	4.5	4.7	3.7	3.4	2.8	3.5	1.2	3.1	4.4	3.4

この結果から、1788 年の『パイロイト新聞』では平均して 100 語中、3.4 文の副文があることになる。

17 世紀初頭の週刊新聞には 100 語中 3.9 文の副文が、18 世紀末の『パイロイト新聞』には 3.4 文の副文が観察された。ここで、対数尤度比 (Log-likelihood) によって、17 世紀と 18 世紀の分析結果として得られた 3.9 と 3.4 という 2 つの副文使用の平均値に有意差があるのかどうかを統計学的に見てみる。そこで得られる対数尤度比は、2.04 という値である。この 2.04 という値は、5% 基準 (100 回に 5 回錯誤することのある可能性) で 2 つの値に有意差があることを示す値である 3.84 よりも低い数値であるので、17 世紀初頭と 18 世紀末

¹⁸² ここでの *daher* は、関係詞として副文 (関係文) を導いている。当該のテキストは *Die Antwort, so der König von Preussen auf dieses Memoire ertheilte, war nicht befriedigend; daher der Russische Vicekanzler ein zweytes an den Botschafter der Kayserin bey dem König von Preussen gelangen ließ.* (下線は筆者による) となっている。

の新聞テキストにおける副文使用の割合には、5%基準で有意差が認められないということが出来る。

4.2.2. 数珠つなぎ複合文

Demske-Neumann (1996) は、17 世紀の週刊新聞における統語的な構造の分析を行っている。Demske-Neumann (1996) は Admoni (1980) の分類に従い、4 つの複合文のタイプを示した。一つ目は「数珠つなぎ複合文」(abperlendes Satzgefüge) であり、「主文の後に複数の副文がつながっていく」¹⁸³ 構文のことである。Demske-Neumann (1996) は、この数珠つなぎ複合文の例として以下のテキスト (A) を示している (以下に示すテキスト A ~D は、Demske-Neumann (1996: 79) を引用したものであり、括弧内のテキスト情報は Demsken-Neumann (1996) による。また、太字は Demske-Neumann (1996) によって示されたものであり、主文であることを示している。)

A) **Sonsten verlautet aus Polen/** daß der Schwedische Ambassadeur etlich und 40. puncten am Polnischen Hoff eingegeben hätte/ warvon die gewißheit mit nechstem erfolgen wird.
(Relation 1667 26,3)

二つ目は、geschlossenes Satzgefüge と呼ばれる構文である。この構文では、「主文の前に (前域) に副文がある」。¹⁸⁴ そこで、ここでは geschlossenes Satzgefüge を便宜的に「副文が先行した複合文」と呼ぶことにする。Demske-Neumann (1996) は、以下のような文を geschlossenes Satzgefüge として示している。

B) weilen die Ungarn einige Regimenter zu Ihrer Kays. Maj. Beschützung underhalten wollen/
als¹⁸⁵ **solle der Landtag zu Odenburg vorgehen und die Residentz in der Neustatt verbleiben.** (Postzeitung 1667 110,21)

¹⁸³ Demske-Neumann (1996: 78)

¹⁸⁴ Demske-Neumann (1996: 78)

¹⁸⁵ 工藤・藤代は、「Frnhd.では、そもそも語源的に同じ so, als, also がまだ厳密に区別されずに用いられている」(工藤・藤代 1992: 106) と述べている。よって、ここで使用されている als は、副文に後続する主文の先頭に置かれた so と考えられる。なお例文 C) も同様。

さらに三つ目は、**zentriertes Satzgefüge** である。この複合文では、「副文が主文の前域と後域に分かれている」¹⁸⁶ 構文のことである。便宜的にこのようなタイプの構文を「主文が中央に配置された複合文」と呼ぶことにする。Demske-Neumann (1996) によれば、以下のような文がこの構文に該当する。

C) Weilen der Bischoff zu Tournay in wärender belägerung gestorben/ **als ist von Ihrer Majestät dessen Vetter darzu ernentt worden/** deme Sie auch alle zuvor gehabte Privilegien confirmirt. (Relation 1667 104,11)

そして四つ目が、**gestrecktes Satzgefüge** である。この複合文では、「主文が副文によって少なくとも一度中断されている」¹⁸⁷ 構文のことを指す。ここでは便宜的に「主文が分断された複合文」と呼ぶことにする。Demske-Neumann (1996) によれば、以下のような文がこの構文に該当する。

D) **Im Haag ist von Zeit der Staaden von Holland Abwesenheit/** so doch ehist wieder erwartet werden/ **wenig vorgangen/** (Postzeitung 1667 28,27)

本論文の 4.1.3.章で既に示したように、Demske-Neumann (1996) によれば、数珠つなぎ複合文の使用が 17 世紀の週刊新聞において典型的である。また芹澤 (2013) は、17 世紀の週刊新聞において使用された数珠つなぎ複合文に関して、「先頭の主文に出来事の現状を示し、後続する副文によって出来事の時間、原因、条件、付帯状況などを正確に伝えるという傾向が挙げられる」¹⁸⁸ ことを指摘している。

このような先行研究を踏まえ、実際に 17 世紀初頭の週刊新聞テキストの分析を行ってみる。では、実際に本論文の分析対象である 17 世紀初頭の週刊新聞から、数珠つなぎ複合文の例を挙げる。

16) Es schreiben die von Ambsterdam/ **daß** die Kauffhandlung vnd Nahrung/ daselbst vnd ander orten [...] täglich abnemen/ vornemlich/ **weil** sich jetzt so viel Meerräuber auff dem Meer

¹⁸⁶ Demske-Neumann (1996: 78)

¹⁸⁷ Demske-Neumann (1996: 79)

¹⁸⁸ 芹澤 (2013: 242)

erzeigen/ **welche** immer die Kauffahrende Schiff plundern/ (1609年6月18日 Cöln)

アムステルダムの人びとは以下のように書いている。すなわちアムステルダム及びその他の場所での商行為と食糧事情は、[...]日に日に低下しているということだ。それはとりわけ、現在なんとも多くの海賊たちが海に出現しているからである。その海賊たちは常に商船を襲い、略奪をしている。(太字は筆者による。以下同様)

ここでは、主文のあとに、*daß*、*weil*、*welche* による副文がつながれている。本論文では、(16)のように複数の副文からなる構造を一個の数珠つなぎ複合文として数えることとする(つまり、(16)には1例の数珠つなぎ複合文があるのであって、3例あるのではない)。

以下に示す表のように、1609年1月8日の週刊新聞では20の副文が使用されているなかで、主文(HS)に対して2つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が5例観察される。また、1786年1月2日の週刊新聞では7観察された副文のうち、2つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が1例観察される。

表 37 : 17世紀初頭の週刊新聞と18世紀末の新聞における数珠つなぎ複合文

場所と日付	語数	副文
1609年 1月8日 Cöln	343	-HS- weil... , daß... (=数珠つなぎ複合文) - sie... , - das... , wie... (=数珠つなぎ複合文) - weil... -HS -HS- darbey... - das (= dass)... (=数珠つなぎ複合文) - ob... - dessen... - die... - daß... - wie... -HS - soll...bezahlen - wo ... (=数珠つなぎ複合文) - weil... - welcher...(weil 内で) -HS- welche... -HS- da... - das... (=数珠つなぎ複合文)

1785 年 11 月 24 日 Petersburg (1786 年 1 月 2 日)	233	-so ... -daher... -wenn ... -HS- da ... - daß ... (=数珠つなぎ複合文) - daß... - daß... - worinn... - und (worinn 内で) - die...
--	-----	--

その他の、数珠つなぎ複合文が観察されたテキストの例も、以下に示す（文内の太字は筆者による）。ただし、(17),(18)の例は上の表で Cöln のテキストで観察された内の 2 例である。

17) Die Spanische Besatzung den Rhein hinab/ vnd der orten schreyen starck nach Gelt vnd wollen einmal bezahlt sein/ **weil** sie vernommen **daß** die Flotta in Spannia reich einkommen/
(1609 年 1 月 8 日 Cöln)

ライン川下流のその土地のスペイン占領地は、お金を口々に要求し、そして将来報酬が支払われていることを主張している。というのも、スペインの占領下では次のことが知らされていたからである。すなわち、艦隊がスペインで多くの収入を得ているということである。

18) Seider jünst haben wir nichts besonders vernommen/ allein melden die Brieff auß Holland/ den biß *Vltimo Frebruarj prolongirten Treves* oder Stillstand/ zwischen den Spanischen vnd Stadischen/ **darbey** angezeigt wird/ **das** von beyden theilen abermals ein neue zusammenkunft auff *Primo Februarj* zu Breda angestellt worden/ (1609 年 1 月 8 日 Cöln)

最近は、我々は特に何も聞き知らされていない。ただし、オランダからのその手紙はもっぱら 2 月末までに延期された休戦つまり、スペイン人と都市の人びととの間の膠着状態を報じている。その際には次のことが知らされている。すなわち、双方の側によって再び新たな会議が 2 月 1 日に Breda で行われることになったということだ。

19) Brieff auß Meiland melden der *Conte Fuentes* habe/ dem *Francisco de Auilo* seinem Obristers Kämerling die *Posses* der Marggraffschafft *Vogera* ein zuraumen verordnet/ *alda* ist auch ein Frantzosischer gesandter angelant **der** zeigt an/ **das** der Hertzog von *Mantua* durch mittel des Königs in Franckreich vom Großtürcken Paßporten erlangt nach Jerusalem vnd Heiligem Grab zureißen/ **deme** ein Türckischer *Chiaus* zu seiner leibt *Guardi* solle zugeordnet werden/ (1609年2月6日 Venedig)

ミラノからの手紙は次のことを報じている。すなわち、Fuentesの伯爵がAuiloのフランシスコに対して、側近が、辺境伯領であるヴォゲーラを所有する権利を認めるよう命令した、ということである。そこにフランスの公使も到着し、彼が次のことを知らせる。すなわち、マントヴァの侯爵がフランスの国王を通じて大トルコからエルサレムそしてキリストの墓へ行くための通行許可証を獲得したということである。そしてマントヴァの公爵の護衛として、侯爵にトルコの使者を一人つけるようにということである。

20) Zu Florenz ist der Herzog von *Nevers* sampt seinem Gemahl angelant/ **welcher** von dem Jungen Prinzen vnd seinem Gemahl gantz städtlich empfangen vund (**welcher**) in der alten Großherzogen *Palazza* einbegleitet/ ihme auch zu Eheren ein schöne Schiffart von 300 Barchen zuhalten vnd zusehen angestellt worden. (1609年2月6日 Venedig)

フィレンツェに *Neveres* の侯爵が侯爵夫人とともに到着した。侯爵は若い王子とその夫人によって非常に豪華に出迎えられた。そして大公の古い宮殿に案内された。そして300艘の見事なパレードを催し、見せることで、彼には敬意も表された。

21) Auff 7. biß zu 8. vhr haben die Böheimische Stende *Subutraq* jhre Kay: May: *resolution* vber den Religions puncten angehört/ **welche wie** sie sagen noch ärger als die erste gewest/ **derwegen** sie einhellig beschlossen/ morgen früh in still vnd zufor in der Ritterstuben zu erscheinen/ vnd jhre May: auff's vnderthenigst vmb die vertröste Freystellung der Religion zubitten/ (1609年3月9日 Prag)

7時から8時までボヘミアの諸身分は、皇帝陛下の元で行われた宗教の項目に関する決議を傾聴していた。その項目は彼らが述べたように、最初の決議よりもよりひどいものであった。そのため、次のことが満場一致で決議された。すなわち翌日、密かに

前もって騎士の部屋に来ることと、そして女王陛下に、希望を待たされた宗教の自由[化]を謹んでお願い申し上げることである。

今回分析した 17 世紀初頭の週刊新聞の総計 12 の記事においては、総単語数 3,517 語の内、数珠つなぎ複合文は 17 観察された。一方、18 世紀末の『パイロイト新聞』では総単語数 3,370 語の内、数珠つなぎ複合文は 7 観察された。総単語数はほぼ同数であるなかで、18 世紀末の新聞では、数珠つなぎ複合文の使用がほぼ半分となっている。

4.2.3. 動作名詞を使用した名詞句

4.1.3.で示したように、少なくとも本論文で扱った分析対象のテキストに関しては、数珠つなぎ複合文を 17 世紀の週刊新聞の言語的特徴と見なすことができる。では、18 世紀末の新聞には、なんらかの言語的特徴がみられないのであろうか。そこでここからは副文という概念からは少しはなれ、句の構造に注目してみたいと思う。その際、とりわけ動作名詞¹⁸⁹ が(名詞句の)先頭に置かれた名詞句に着目する。

今回の分析対象である 1786 年 1 月 2 日の『パイロイト新聞』には、次のような名詞句が観察される。

22) Dieß Memoire enthält Vorstellungen und fordert einige Erläuterungen über die unter Vermittlung des Ruß. Hofes, zwischen St. Königl. Preuß. Majestät und dem Magistrat von Danzig geschlossene Convention. (『パイロイト新聞』1785 年 11 月 24 日 Petersburg (1786 年 1 月 2 日) からの報告)

この備忘録は苦情を含み、そして ロシア宮廷の 仲介 のもとでプロイセン王室の陛下とダンツィヒの市参事会間で締結された協定に関するいくつかの解説 を要求している。

(下線は筆者による)

下線が引かれている個所の中核には動作名詞が使用されており、一つの名詞句となっている。この動作名詞を中核に置いた名詞句では、どこで、誰がという内容が、描写されている。18 世紀末の『パイロイト新聞』にはこの他にも、以下のような動作名詞を中核に置い

¹⁸⁹ 本論文では、Bußmann (2002) が述べている Nomen Actionis のうち、接尾辞 -ung によって派生した名詞を動作名詞として把握する。

た名詞句が観察される。

23) Die Schriststeller von Chili haben stets behaupten, daß der von den Uafrigen [...] mehr Geld und Blut gekostet habe, als die Eroberung des ganzen übrigen Amerika.

チリの文筆家は常に次のことを主張している。それは、Uafrig たちのその人が、[...] その他のアメリカ大陸すべてを獲得したよりも、より多くのお金と血を犠牲にしたということである。(『バイロイト新聞』1786年2月2日 Madrid (1786年1月4日)からの報告)

24) [...] und die Spanischen Eroberungen sind vielleicht, ihren Umständen nach, mit weniger Grausamkeit, als viele andere dergleichen ältere und neuere Unternehmungen der erobernden Nationen [...]

そして少し前、侵略をしている国々が行ったその他多くの同様の行為と比較してみると、スペインが行ったその侵略は、その状況から判断するとそれほど残虐では無いかもしれない。(『バイロイト新聞』1786年2月2日 Madrid (1786年1月4日)からの報告)

25) Den Spanischen Familien in jenen Gegenden, haben diese umherschweifenden Völker, nach Ermordung ihrer Slaven, 20 biß 60000 Stück Vieh geraubt oder gestöbet;

さまようこの人びとは、かの地域にいるスペインの家族たちから、彼らの奴隷を殺害した後で、20頭から60000頭の家畜を略奪したか、もしくはその家族たちから家畜を追い散らした。(『バイロイト新聞』1786年2月2日 Madrid (1786年1月4日)からの報告)

26) Diese Woche wird Hr. Pitt dem Unterhause seinen Finanzplan vorlegen, von dem man [...] weiß, daß eine reine Million Pfund Sterling, die der Minister in Cassa hat, zu Ankaufung von so viel Stocks oder Cronpappieren werde verwendet werden.

今週、ピット氏は下院に彼の財政計画を提出した。その計画については[...]次のことがわかっている。すなわち、その大臣が現金で所持しているきっかり1億ポンドが、非常に多くの国庫債券すなわち英国債を購入するために使用されるということだ。

(『バイロイト新聞』 1786年3月2日 London (1786年2月12日) からの報告)

27) Ein anderes öffentliches Blatt meldet aus Privatbriefen von Wien (als ein Raisonement der Wiener Politiker) der Königl. Preuß. Gesandte, Hr. von Podewills, habe St. Majestät dem Kayser die stärkste Versicherung von der Neigung des Königs gegeben, [...]

別の官公新聞はウィーンからの非公式な手紙に基づいて伝えている（ウィーンの政治家たちの推測として）。プロイセン王室の公使であるフォン・ポデーヴィルス氏は、皇帝陛下に対し、国王が敬意を表したことを非常に強く保証し[...] (『バイロイト新聞』 1786年4月1日 Donau (1786年3月28日) からの報告)

このような動作名詞を中核に置いた名詞句の使用は、17世紀初頭の週刊新聞では、12記事(3,512語)の内2例しか観察されないが、18世紀末の『バイロイト新聞』では12記事(3,370語)の内、20例観察される。したがって、本論文で対象としたテキストの限りにおいて、17世紀初頭に比べて18世紀末の新聞のほうが動作名詞を使用した名詞句の使用割合が高いといえることができる。

4.3. 総括

4.3.1. 構文と句の構造変遷

これまでの分析結果を踏まえると、17世紀初頭の新聞テキストと18世紀末の新聞テキストを比較すると、副文の使用頻度においては両者に違いがみられなかったが、次のような違いが観察されたとと言える。すなわち、数珠つなぎ複合文の使用頻度に関しては、18世紀末の新聞は17世紀の新聞と比べて少ないが、動作名詞を中核に置いた名詞句に関しては、18世紀末の新聞は17世紀の新聞と比べて使用頻度が高い。

Polenz (2013) によれば、「16世紀から18世紀においては、法律語、学問語、専門語において論証的行為を明確に表現するために、文レベル(接続詞、従属接続詞、代名詞的副詞)そして文成分レベルでの接続要素が増加した」¹⁹⁰ という。本論文で扱った17世紀初頭の週刊新聞テキストの場合、「文レベルでの接続要素」、とりわけ従属接続詞を使用した

¹⁹⁰ Polenz (2013: 299-300)

接続要素 (*dass* や *weil* など) が多く使用されている。17 世紀の週刊新聞では、副文を連ねていくことで、生じた出来事に関する時間、原因、条件、付帯条件などを明確にそして正確に伝えたと言える。Polenz (2013) は、19 世紀になると、「16 世紀から 18 世紀の不明確で過剰な従属形式は大幅に避けられ、それゆえ複合文構造はわかりやすくなった」と説明を続ける。¹⁹¹ このことはすなわち、従属接続詞の多用によって高い文語性(「遠いことば性」)を保持していた 16 世紀から 18 世紀のテキストが、19 世紀になるとその文語性が緩和され、「わかりやすい」テキストになったという意味であると理解できる。本論文で分析した 18 世紀末の新聞テキストでは、副文使用の頻度自体は 17 世紀初頭の週刊新聞と変わらなかったが、数珠つなぎ複合文の使用頻度は減少していたことがわかっている。つまり、18 世紀末の『パイロイト新聞』は、文構造の複合性という観点においては相対的に「わかりやすい」テキストになっていることになる。

しかしながら、ここで注意しなければならないのは、18 世紀末の新聞テキストは数珠つなぎ複合文の使用が減少した一方で、動作名詞を使用した名詞句の使用が 17 世紀初頭の新聞テキストと比較してより高くなっているという点である。ここでは、動作名詞を中核に置いた名詞句は、前置詞句をいくつも連ねることで、長く複雑な名詞句を構成している。このことはすなわち、時代の流れとともに、生じた出来事を伝える方法として、副文を連ねる構成から、句を連ねる構成へと変化したと解釈できるということである。数珠つなぎ複合文が果たしていた付帯状況等(理由、原因、時間、様態など)の表現内容が、「～すること」を表す動作名詞を中核に置いた名詞句によって担われるようになることで、副文が名詞句に縮約され、情報をコンパクトに伝えることができるようになった。複合文の使用が減少したからといって、テキストが「わかりやす」くなったという相関関係にあるとは単純には言えないであろう。

4.3.2. 時間軸に沿って「物語る」テキスト

ここで、テキストの構造という観点を入れて考察してみたい。Werlich (1975) は、5 つのテキストタイプ、すなわち「語り (Narration)」、「記述 (Deskription)」、「論証 (Argumentation)」、「説明 (Exposition)」、「指示 (Instruktion)」¹⁹² を知覚心理学的な観点

¹⁹¹ Polenz (2013: 303)

¹⁹² Eroms (2008: 80)、川島 (1994: 1025)

で区別した。この分類に基づき Eroms (2008) は、「テキスト化の戦略」という考え方を提唱した。Eroms (2008) によれば、「テキスト化の戦略」とは、「テキストを構築する際の上位原理であり、[...] テキストの一部もしくはテキスト全体を形成する上での操縦桿」¹⁹³ のような役割を果たす。Eroms (2008) は、次の 4 つの「テキスト化の戦略」の型を提示した。すなわち、「語り (Erzählen)」、「記述 (Beschreiben)」、「論証 (Argumentieren)」そして「指示 (Anweisen)」である。この 4 つの型について、Eroms (2008) は以下のように述べている。「語りの型によって過去の事柄が伝達され、記述の型によって事物、人、実情などが無時間的に表現される。また、論証の型では、テキストの受け手を将来的にある行為を起こさせるようにし、指示の型では、受け手に同時的に行為を遂行させる」。¹⁹⁴ どの「テキスト化の戦略」の型を用いるのかによって、テキストの方向付けを決定することができるわけである。しかし注意しなければならないのは、4 つの型のどれか 1 つのみから構築されているテキストは稀であって、実際のテキストにおいてどの型が優勢であるかが問題となるということである。¹⁹⁵

Eroms (2008) は、上に見たように「語りの型によって過去の事柄が伝達される」と述べている。¹⁹⁶ さらに Eroms (2009) は、「語りのテキスト化の戦略が優勢であるテキスト種は口頭による出来事の報告や童話、新聞報道、小説」¹⁹⁷ などであると言う。これらの点を踏まえると、18 世紀末の新聞テキストは、Eroms によって分類された「語り」の型が優勢的に使用されているテキストであり、生じた出来事を伝え、時系列に沿って出来事の描写を行うテキストである。それはまるで、再現 VTR のように、すなわち動画的に出来事を描写するという特徴を持っているとも言えよう。

¹⁹³ Eroms (2008: 81)

¹⁹⁴ Eroms (2008:82)

¹⁹⁵ Eroms (2008: 82) を参照。

¹⁹⁶ Eroms (2008: 82)

¹⁹⁷ Eroms (2009: 1598)

5. 1800 年前後におけるドイツ初期のモード雑誌

5.1. モード雑誌の誕生

18 世紀になると、印刷物を取り巻く諸状況が変化し始めた。その背景としては、18 世紀のヨーロッパが、「宮廷のみならず、多くの都市において、人びとの能動的、受動的文化消費行動が絶頂期を迎えた時代」¹⁹⁸ であったことが大きく関係していると言えるだろう。ノルト（2013）は、18 世紀に「文化的供給の広がりと多様性」¹⁹⁹ が存在し、「劇場やコンサート、展覧会などでの直接的な文化体験のほか、新聞、雑誌、書物、複製版画など、いわば間接的に文化を知覚するための多様な手段が形成」されたことを指摘している。²⁰⁰ このような時代の中で、定期刊行雑誌として『豪奢とモードのジャーナル』（„Journal des Luxus und der Moden“）が 1786 年に登場する。このモード雑誌は、とりわけ贅沢や流行といった側面から人生をよりよく送るための情報を扱った、実用テキストの一つである。印刷物は、時代の流れの中で徐々に娯楽をも伝達する術としてその機能を拡大していったのである。

5.1.1. 「モード」の範囲

ドイツ語の「Mode」ということばは、フランス語の *à la mode* から派生²⁰¹ している。1800 年前後のドイツにおいてモード（Mode）はどのように捉えられていたのだろうか。同時代に書かれたアーデルングとカンペのドイツ語辞典における Mode の定義は、次のとおりである。

社交生活において取り入れられた振る舞い方のことで、習慣、慣習を意味する。狭義においては、[時と共に]²⁰² 変わる衣服のまとい方や装身具の類い全般の付け方を指す。かつては、Weise という語も使用された。

Adelung (1798: Bd.3. 254)

¹⁹⁸ ノルト（2013: 3）

¹⁹⁹ ノルト（2013: 4）

²⁰⁰ ノルト（2013: 4）

²⁰¹ Kuhles（2000: 493）

²⁰² [] 内の記述は筆者による補足である。

社交生活において取り入れられた、好ましく美しいと一般にみなされる振る舞い方のこと。特に、ひろく受けいれられてはいるが〔時と共に〕²⁰³ 変わる衣服のまとい方や装身具の付け方のこと。

Campe (1809: Bd.3. 327)

したがって、1800年前後のドイツにおいては、Mode は、狭義では衣服と装身具を指したが、広義では社交生活において一般に好ましいとされる振る舞い方全般を指したことがわかる。この広義の Mode の意味に対応して、『豪奢とモードのジャーナル』は、流行の衣服・装飾品だけでなく、家具や演劇、庭園芸術、旅行、健康、経済など多岐にわたるテーマを扱った。²⁰⁴ 当時、雑誌全般の読者としては、読書能力があり、読書に費やせる時間を多く持った「教養のある上流階層」が想定されていた。²⁰⁵ このことは、『豪奢とモードのジャーナル』についても当てはまると言えるだろう。

ノルト (2013) は、当時は人びとが劇場や展覧会等に赴き「直接的」に文化に触れることができる時代であった一方で、「新聞、雑誌、書物、複製版画など、いわば間接的に文化を知覚するための多様な手段が形成」²⁰⁶ されたことを指摘し、当時のヨーロッパに文化の商業化を見いだしている。このような時代の中で、贅沢や娯楽そしてモードに特化した定期刊行雑誌『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) が 1786 年にベルトーフ (Friedrich Justin Bertuch, 1747-1822) とクラウス (Georg Melchior Kraus, 1737-1806) によってドイツ、ワイマールにて刊行され始める。

この『豪奢とモードのジャーナル』は、各都市の当時の流行や贅沢品を読者に伝えるという機能を果たしたと同時に、文化の商業化という当時の情勢を巧みに利用し読者に当時の流行の商品を宣伝、及び購買させようという狙いがあった。このモード雑誌には、「独立した折り込み広告として、いわゆる「インテリゲンツ・ブラット」²⁰⁷ が付随され、出版業者のほか、手工業生産者や商人らが、それぞれの製品について宣伝を打っていた [...] 奢侈品は、見本市と問屋制度を巧みに利用したベルトーフの「公国産業組合」を通じて、容易に取り寄せることができた。『贅沢とモードの雑誌』を熟読し、ベルトーフのもとに商品を注文することで、人びとはヨーロッパの物質文明および消費文化の世界に自ら参加

²⁰³ [] 内の記述は筆者による補足である。

²⁰⁴ Kuhles (2000: 495) を参照。

²⁰⁵ 赤木 (2008: 3) を参照。

²⁰⁶ ノルト (2013: 4)

²⁰⁷ ただし、この「インテリゲンツ・ブラット」は 1811 年の 1 月号を最後に付随されなくなった。

することが可能になった」。²⁰⁸

5.1.2. タイトル変更と編者交代

ワイマールで発行されたモード雑誌『豪奢とモードのジャーナル』は、1786年から1827年の間、月刊誌として42年間刊行され、1年次当たり平均して700頁の大きさであった。²⁰⁹ 外形としては八つ折り判（Oktav）で発行され、これは当時の雑誌には一般的な大きさ²¹⁰であった。²¹¹ 値段は「1年次ごとに4ターレル、のちに8ターレル」²¹²ほどであった。

タイトルの変更が何度か行われている。当初1786年に『モードのジャーナル』（„Journal der Moden“）として創刊された雑誌は、翌年1787年に『豪奢とモードのジャーナル』（„Journal des Luxus und der Moden“）というタイトルに変更され、このタイトルを保持しながら1812年まで発行される。この26年間で同一のタイトルが使用された最も長い記録となった。1813年には『豪奢とモードと芸術物のためのジャーナル』（„Journal für Luxus, Mode und Gegenstände der Kunst“）というタイトルに変えられたが、これは1813年のみの使用に終わった。1814年から1826年までは『文学、芸術、豪奢、モードのためのジャーナル』（„Journal für Literatur, Kunst, Luxus und Mode“）として刊行された。そして最後の年である1827年には『文学、芸術、社交生活のためのジャーナル』（„Journal für Literatur, Kunst und geselliges Leben“）というタイトルでその42年続く雑誌を締めくくった。このようなタイトルの変遷は、当時の変化する社会や文化に柔軟に対応しようとする姿勢の表れとも見て取れるだろう。

このモード雑誌は、1786年に前述したFriedrich Justin BertuchとGeorg Melchior Krausによって創刊された。二人は創刊時から編者を務めていた。Krausはとりわけ雑誌の挿し絵を担当し、当初の銅版画の作成を一手に担っていた。1786年から1806年にかけては創刊者であるBertuchが編者を務めた。その後、Bertuchはその役を息子であるCarl Bertuchに任せ、息子が没する1815年まで務めさせた。このあと編者がめまぐるしく変わっていくこ

²⁰⁸ ノルト（2013: 81）

²⁰⁹ Kuhles（2000: 494）を参照。

²¹⁰ 赤木（2008: 2）を参照。

²¹¹ 最後の1827年の第42巻のみ、大判で発行された。

²¹² Kuhles（2000: 492）

となり、²¹³ 1815 年以降はこの雑誌は「モードと豪奢という内容との関連性は徐々に緩くなり、[...]娯楽雑誌となって」²¹⁴ いった。

5.2. 空間軸に沿った事物テキスト

5.2.1. 副文および句構造

まずは、18 世紀のモード雑誌テキストも副文という観点から見ていくことにしよう。1786 年から 1789 年までの 4 年間それぞれ創刊号のみ 4 月号、その他は 5 月号の女性の服装に関する記事を分析した。それぞれの記事はいくつかの記事から構成されているため、最終的に 4 年間で合計 13 の記事が対象となっている。女性の服装を扱った各記事において、どれほどの頻度で副文が使用されたのかを以下の表にまとめた。記事の内訳は、表内の通し番号 1 から 3 が 1786 年 4 月号の記事、4 から 6 までが 1787 年 5 月号の記事、7 から 10 までが 1788 年 5 月号の記事、そして 11 から 13 までが 1789 年 5 月号の記事となっている。

表 38 : 18 世紀末のモード雑誌における副文の出現割合

記事番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	平均
副文の値	3.5	4.6	2.2	2.3	3.4	2.9	2.7	5.1	0.4	3.5	3.1	0.9	1.9	2.8

今回分析した 13 の記事（全 4,721 語）の場合、100 語中、副文は 2.8 文あったという結果が得られる。この値を 18 世紀末の『パイロイト新聞』の、100 語中 3.4 文と比較し、対数尤度比の値を割り出すと 2.98 という値が得られる。この 2.98 という値は、5%基準（100 回に 5 回錯誤することのある可能性）で 2 つの値に有意差があることを示す値である 3.84 よりも低い数値である。すなわち、今回得られた副文使用の割合である 18 世紀末のモード雑誌の値 2.8 と 18 世紀末の新聞の値 3.4 には、5%基準において有意差はないということが

²¹³ 1815 年だけ Heinrich Döring が編者となり、1816 年から 1822 年までの間、Bertuch の娘婿である Ludwig Friedrich von Froiep が編者となった。1823 年には Edmund Ost が編者となったが長くは続かず、1823 年の途中から 1827 年までを Stephan Schütze が編者として務めた。

²¹⁴ Kuhles (2000: 494)

できる。

次に、18世紀末の新聞テキストに特徴的であると確認できた動作名詞を中核に置いた名詞句の観点からモード雑誌テキストを分析してみると、動作名詞を中核に置いた名詞句は13記事（全4,721語）の中で2例しか観察されない。以下にその例を示す。

28) Diese Haube hat ihren Ursprung und Namen der glücklichen **Genesung** einer hohen und allgemein geliebten Teutschen Fürstin zu danken. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

この縁なし帽は、その由来と名前を皆から愛されているドイツの伯爵夫人が、幸運にも病気から快復したことに負っています。

29) In **Ansehung** der Schuhe, trägt man noch immer *Sabos Chinois* mit Falbala, oder Schuhe mit Band-Rosen; (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

靴に関しては、依然としてひだのついた中国の靴、もしくはバラ色のリボンがついた靴が履かれます。

このような使用頻度の違いは、同じ18世紀末であっても新聞テキストとモード雑誌テキストには、動作名詞を使用した名詞句の使用という点において違いがあったということを示唆している。たしかに、モード雑誌テキストには動作名詞を使用した名詞句はほとんど使用されていない。しかし、よく注意して見ると、同じ句であっても、動作名詞ではない名詞によって作られる前置詞句がモード雑誌にいくつも使用されている。例えば、次のような例である。

30) Um den Kopf ein Rehgraues Band mit weißen Saume, das vorn auf der Stirn von einer goldnen Schnalle gefaßt, unter dem Federbusche in eine große Schleife gebunden wird und über die Krampe bis auf die Achsel herab hängt. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

頭の周りには白い縁取りのある ノロジカ灰色のリボン。そのリボンは 額正面で金の留め金によって 留められ、羽の束の下で大きなリボン結びに むすばれ、そして 帽子の

つばを超えて肩まで 垂れ下がっています。(テキスト内の囲みおよび下線は筆者による)

下線で示した前置詞句では品物が何で出来ているのか、品物の形状がどうであるかという情報を描写している。このような描写は以下に示すようにいくつも観察される。

31) Die Dame trägt ferner einen grauen Naturel-Castor-Huth, mit grauen und schwarzen Federn an der linken Seite. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

さらにこの女性は左側に灰色と黒色の羽がついた灰色の天然ビーバーの毛皮を使った帽子を被っています。

32) Auf dem weißen Bande läuft ein Stab hin, (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

白いリボンの上には杖が伸びており、

33) Um den Kopf ist Rosa Crepe-Flor in sehr großen und reichen Bauschen gepufft, davon hinten die beyden Enden bis auf die Schultern herabhängen. (『豪奢とモードのジャーナル』

(„Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

頭の回りには非常に大きくたっぷりとバラ色のクレープ紗がふくらんでおり、そこから後方に両方の端が肩まで垂れ下がっています。

34) Große Baigneusen²¹⁵; sind eine Art von Dormeusen, von weißen Flor, mit einem ungeheuer großen Flor-Schleyer, der über den ganzen Rücken bis unter die Tailee hinabhängt.

(『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)

大きな Baigneusen とは；白い紗でできていて、非常に大きな紗のベールが着いたナイトキャップです。そのベールは背中全体を覆い、腰の下まで垂れ下がっています。

²¹⁵ テキスト内の下線が付された語は、アンティカ体で標記されていることを意味する。以下同様。

35) Vornüber der Stirn steht eine sehr große doppelte Schleife von breiten Nacarar-Bande mit schwarzen Zacken, davon die Ende zu beyden Seiten über den Schleyer herabstiegen. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786年4月号)
額の上には黒いギザギザが着いた幅広の明るい赤橙色のリボンでできたとても大きな二重のリボンがあります。そのリボンの端が両側へとベールの上から垂れ下がっています。

18世紀末の新聞テキストでは、「～すること」を表す動作名詞を使用した名詞句（前置詞句）によって、時間、原因、条件、付帯状況などが表されていたのに対し、モード雑誌での前置詞句は、事物の形状や位置を示す役割を担っていると解釈することが可能である。

5.2.2. 「記述する」テキスト

4.3.2において、Eroms (2008) による「テキスト化の戦略」についてすでに触れた。Eroms (2008) は「語りのテキストが時間軸に沿っているのに対し、記述のテキストは原則的に空間軸に沿っている」²¹⁶ としている。記述テキストに典型とされる一つに、Eroms は、例えば事典のような情報を提供する実用テキストを挙げている。²¹⁷ 今回分析した18世紀末のモード雑誌テキストでは、前置詞を使用して、空間の中で事物の形状や素材、位置を示しており、Eroms (2008) の「記述」の型が優勢的に使用されていると考えられる。当時のモード雑誌テキストには時間的に物事が変化するという経過が考慮されておらず、まるである瞬間を捕らえた静止画を描写しているかのようである。

5.3. モード雑誌テキストの「近いことば性」

5.3.1. 分析対象の基本情報

本節では、『豪奢とモードのジャーナル』を Ágel/Hennig (2006) の「近いことば性」測定モデルに依って分析してみたい。分析を行うにあたり、雑誌創刊年である1786年の1

²¹⁶ Eroms (2008: 88)

²¹⁷ Eroms (2008: 91) を参照。

月号、そして半年後の6月号を分析の対象とした。どれも女性の服装を扱った記事であるが、とりわけ女性の帽子に関する記述がなされているもの、各々挿絵が付随しているもの、²¹⁸ そしてテキストの総単語数がおおよそ同程度のものであるという共通の条件のもとに記事を選出した。

表 39：分析対象の基本情報

	テキスト A	テキスト B
年代、月号	1786 年 1 月号	1786 年 6 月号
総単語数	228	285

まずは分析対象とする2つのテキストをそれぞれ以下に示しておく。

(テキスト A)

2. Hüthe, trägt man jetzt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur *grande parure*; häufig Stroh-Hüthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor, die mit einem Perlen-Knopfen gefaßt, und hinten in eine große Schleife gebunden wird, davon die Enden zwey bis drey Finger breit über den Rand des Huthes herabhängen. Auf der linken Seite eine *Touffe* von vier kurzen weißen Federn, aus welcher eine große ferbige Schwung-Feder heraussteigt, die *Follette* oder *la Dominante* heißt, (Tab. 1. No. 1.) Meist ist die Garnitur des Huthes von der Farbe des Kleides; außer wenn zwey Mode-Farben, wie in T. 1. No. 1. violet und dunkelgrün (*gros verd*) zusammentreffen. Auf Hüthen die mit Atlas, Taft oder Flor überzogen sind, trägt man Band, Flor und Blumen, sowohl Guirlanden als einzelne Zweige. Der Huth mit der großen Schleife auf T. 2. heißt *à la Cheruhin*. Zum *Deshabille* tragen die Damen gewöhnlich runde englische Castor-Hüthe, oder *Jackey en Ourson*, schwarz oder grau, mit hohen und oben platten Kopfe, (*á forme carree*) die Krämpe 5 bis 6 Zoll breit; entweder Kopf und Krämpen ganz rauch, oder nur mit einem rauchen Rande. Um jenen wird meistens ein schwarzes Band mit einer brillantirten Stahlschnalle, die an der Seite auf einer großen Band-Rose liegt; um letzteren aber bunte Mode-Bänder mit Schleifen,

²¹⁸ 当該のモード雑誌では、創刊年には各月に必ず帽子の描かれた挿絵（とりわけ2月号以降、全体像の挿絵に加え、胸から上だけを取り上げた挿絵が付随されるようになった）に関する記述がなされていた。このことから、共通性をはかるために、挿絵が付随している女性の帽子のテキストを対象とした。

getragen.

(テキスト B)

Man ist jezt in Paris in dem Geschmacke alle Hauben ungeheuer groß zu tragen, und den Flor auf dem Kopfe oder den Capot in gewißen Formen zu puffen. So hat man Poufs de gaze *en rocher*, wo der Flor wie Felsenflippen und Gletscher in Berg und Thal geformt ist; oder *à pointes de Diamans*, wo er in lauter Facetten und Rauten erscheint u. s. w. Diese neue Erfindung ist von der berühmten Putzmacherin *Dlle. Roussand*, Mde. de Modes, rue du Theatre francois. Die weiten und langen Flor-Schleyer welche hinten bis zur Taille hinab hangen, sind beynahe so groß, daß sich eine Dame so gut als in einen Mantel hineinwickeln könnte. Vorzüglich groß sind sie an den Baigneusen, die man jezt gewöhnlich zu Pierrots oder en *Négligé* trägt. Wir liefern eine dergleichen *Baigneuse* auf Taf. *XVII. fig. 2*. Sie ist von klaren Flor, mit großen Schleyer der hinten bis zum Gürtel herabhängt. Vorn über der Stirn steht eine große gesperrte Schleife von Citron-Bande mit schwarzen Saume; davon die beyden Enden auf die Schultern herabfallen. Sie kleiden gewißen Gesichtern und Figuren sehr gut. — Indeßen ist doch der Geschmack an den großen Hauben in Paris nicht allgemein, und man trägt auch welche von mittler Größe die sehr schön sind. Eine von der schönsten und simpelsten Form ist eine *Toque à la Turque*, die wir auf Taf. *XVIII.* hier liefern. Sie ist von weißen gestreiften Flor-Linon, hat vorn rund herum kleine Perlen-Gehänge, und an der lincken Seite ein Paar Doppel-Festons von größern Perlen; die Flügel hangen kaum bis zu den Schultern herab, und drauf sind ein Paar grüne Perlen-Zweige und ein Zweig kleine Blume gesteckt. Unsere Leserinnen werden aus der Figur Taf. *XVIII.* sehen, daß sie sehr gut kleidet.

5.3.2. 「近いことば性」の算出

では、テキスト A (1786 年 1 月号)、そしてテキスト B (1786 年 6 月号) を、Ágel/Hennig (2006) の測定法によって分析してみよう。まずは、語・句のマイクロレベルである。Ágel/Hennig (2006) が定めて基準に従い、「近いことば性」の要素を数え上げた結果、テキスト A ではマイクロレベルの「近いことば性」の要素として考えられる要素は 7 観察された。以下の表でそれぞれの要素を示す。

表 40 : テキスト A におけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素 とカウントされる項目	「近いことば性」の要素 の分類
jezt	時の副詞
trägt	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
trägt	時制の直示表現
heißt	時制の直示表現
tragen	時制の直示表現
wird getragen	時制の直示表現

テキスト A では *jetzt* のような「時の副詞」や、動詞における「時制の直示表現」が「近いことば性」の要素に数え上げられる。テキスト A では7つの要素が数え上げられる。

次にテキスト B について見ていこう。テキスト B においても、マイクロレベルの「近いことば」の要素として数え上げられるものを以下の表にまとめた。

表 41 : テキスト B におけるマイクロレベルでの「近いことば性」の要素

「近いことば」の要素 とカウントされる項目	「近いことば性」の要素 の分類
ist	時制の直示表現
jetzt	時制の直示表現
(ist)	時制の直示表現
hat	時制の直示表現
(hat)	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
sind	時制の直示表現
sind	時制の直示表現
wir	人称の直示表現
liefern	時制の直示表現

ist	時制の直示表現
steht	時制の直示表現
kleiden	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
trägt	時制の直示表現
ist	時制の直示表現
wir	人称の直示表現
hier	場所の直示表現
ist	時制の直示表現
hat	時制の直示表現
(hat)	時制の直示表現
hängen herab	時制の直示表現
sind gesteckt	時制の直示表現
unsere	人称の直示表現
werden sehen	時制の直示表現

テキスト B では、マイクロレベルの「近いことば性」の要素が 25 観察される。テキスト B では動詞に関する要素の他に、wir などの人称代名詞（「人称の直示表現」）が「近いことば性」の要素として観察される。以下の表に、テキスト A と B のマイクロレベルの「近いことば性」の数値を示す。

表 42：マイクロレベルでの「近いことば性」の値

	テキスト A	テキスト B
年代、月号	1786 年 1 月号	1786 年 6 月号
総単語数	228	285
近いことば性の要素	7	25
マイクロレベルの近いことば性の値	4.76%	13.80%

マイクロレベルの「近いことば性」では、テキスト B、A の順に高い「近いことば性」の値が得られる。

マクロレベルでは、基礎文という概念が中心となる。しかしながら、以下に示すように動詞を伴わない表現がいくつかみられる。例えばテキスト A の *Hüte trägt man jetzt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur grande parure; häufig Stroh-Hüte mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor*, における、*häufig Stroh-Hüte mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst* や *um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor* である。このような表現を、次に示す DNS（「遠いことば的な文相当表現 (Distanz-Nicht-Satz)」）とはみなさず、ここでは NNS として数え上げる。²¹⁹ DNS とは、「遠いことば的な文相当表現 (Distanz-Nicht-Satz)」を意味し、見出し語や手紙の呼称形式などがこのカテゴリーに含まれる（これが少ないほど、近いことば性が高いことになる）。例えば、1786 年のテキストには 2. *Hüte* 「2. 帽子」(1786: 17) といった見出し語が確認される。²²⁰ また、今回の分析対象のテキストには、I-UBS（「別の基礎文によって統合的に中断された基礎文」）の要素は観察されなかった。

このような分類のもと、それぞれの要素がいくつあるのかを数え上げていく。それぞれのテキストにおけるマクロレベルでの「近いことば性の」要素を、以下の表に示す。

表 43 : テキスト A におけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
2. Hüte,	DNS
trägt man jetzt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge nur nicht zur <i>grande parure</i> ;	E-1
häufig Stroh-Hüte mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst;	NNS
um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine beide Binde von Farben-Flor,	NNS

²¹⁹ 名詞文 (Nominalsatz) としてとらえ、コブラの省略とも考えることも可能だが、本分析では NNS の要素とする。

²²⁰ 本論文で分析対象としたテキストの中で、DNS が観察されたのはこの 1 回のみであった。

die einem Perlen: Knopfen gefaßt	E-x
und hinten in eine große Schleife gebunden wird,	E-x
davon die Enden zwey bis drey Finger breit über den Rand des Huthes herabhängen	E-x
Auf der linken Seite eine <i>Touffe</i> von vier kurzen weißen Federn	NNS (verblos)
aus welcher eine große ferbige Schwung Feder heraussteigt,	E-x
die <i>Follette</i> oder <i>la Dominante</i> heißt, (Tab. 1. No. 1.)	E-x
Meist ist die Garnitur des Huthes von der Farbe des Kleides;	E-1
außer wenn zwey Mode-Farben, wie in T. 1. No. 1. violet und dunkelgrün (<u><i>gros verd</i></u>) zusammentreffen	E-x
Auf Hüthen die mit Atlas, Laft oder Flor überzogen sind, trägt man Band, Flor und Blumen, sowohl Guirlanden als einzelne Zweige.	E-1
die mit Atlas, Laft oder Flor überzogen sind	E-x
Der Huth mit der großen Schleife auf T. 2. heißt a <i>la Cheruhin</i>	E-1
Zum <i>Deshabille</i> tragen die Damen gewöhnlich runde englische Castor-Hüthe, oder <i>Jackey en Ourson</i> , schwarz oder grau, mit hohen und oben platten Kopfe, (<u><i>á forme carree</i></u>) die Krämpe 5 bis 6 Zoll breit; entweder Kopf und Krämpen ganz rauch, oder nur mit einem rauchen Rande.	E-1
schwarz oder grau,	NNS (verblos)
(<u><i>á forme carree</i></u>) die Krämpe 5 bis 6 Zoll breit;	NNS (verblos)
entweder Kopf und Krämpen ganz rauch, oder nur mit einem rauchen Rande.	NNS (verblos)
Um jenen wird meistens ein schwarzes Band mit einer brillantirten Stahlschnalle; die an der Seite auf einer großen Band-Rose liegt;	E-1

um letzteren aber bunte Mode: Bänder mit Schleifen, getragen	
um letzteren aber bunte Mode: Bänder mit Schleifen,	E-1
die an der Seite auf einer großen Band: Rose liegt;	E-x

テキスト A では、NNS が 6、基礎文 1 が 7、基礎文 x が 8 そして DNS が 1 観察される。

次にテキスト B におけるマクロレベルの「近いことば性の」要素を、以下の表に示す。

表 44 : テキスト B におけるマクロレベルの分類

テキスト内における該当部分	分類
Man ist jezt in Paris in dem Geschmacke alle Hauben ungeheuer groß zu tragen	E-1
und (ist) den Flor auf dem Kopfe oder den Capot in gewißen Formen zu puffen.	E-1
So hat man Poufs de gaze <i>en rocher</i> ,	E-1
wo der Flor wie Felsenflippen und Gletscher in Berg und Thal geformt ist;	E-x
oder (hat man) <i>à pointes de Diamans</i> ,	NNS (verblos)
wo er in lauter Facetten und Rauten erscheint u. s w.	E-x
Diese neue Erfindung ist von der berühmten Putzmacherin Dlle. Roussand, Mode. de Modes, rue du Theatre francois.	E-1
Die weiten und langen Flor-Schleyer welche hinten bis zur Taille hinab hangen, sind beynahe so groß,	E-1
welche hinten bis zur Taille hinab hangen,	E-x
daß sich eine Dame so gut als in einen Mantel hineinwickeln könnte.	E-x
Vorzüglich groß sind sie an den Baigneusen	E-1
die man jezt gewöhnlich zu Pierrots oder en Négligé trägt.	E-x
Wir liefern eine dergleichen <i>Baigneuse</i> auf Taf. XVII. fig. 2.	E-1

Sie ist von klaren Flor mit großen Schleyer	E-1
der hinten bis zum Gürtel herabhängt.	E-x
Vorn über der Stirn steht eine große gesperrte Schleife von Citron-Bande mit schwarzen Saume;	E-1
davon die beyden Enden auf die Schultern herabfallen.	E-x
Sie kleiden gewißen Gesichtern und Figuren sehr gut.	E-1
Indeßen ist doch der Geschmack an den großen Hauben in Paris nicht allgemein,	E-1
und man trägt auch welche von mittler Größe	E-1
die sehr schön sind.	E-x
Eine von der schönsten und simpelsten Form ist eine Toque a la Turque	E-1
die auf Taf. XVIII. hier liefern.	E-x
Sie ist von weißen gestreiften Flor-Linon,	E-1
hat vorn rund herum kleine Perlen-Gehänge	E-1
und (hat) an der lincken Seite ein Paar Doppel-Festons von größern Perlen	NNS (verblos)
die Flügel hängen kaum bis zu den Schultern herab,	E-1
und drauf sind ein Paar grüne Perlen-Zweige und ein Zweig kleine Blume gesteckt.	E-1
Unsere Leserinnen werden aus der Figur Taf. XVIII. sehen	E-1
daß sie sehr gut kleidet.	E-x

テキスト B では、NNS が 2、基礎文 1 が 18、そして基礎文 x が 10 観察される。テキスト A と B のそれぞれのマクロレベルにおける結果を元に、以下にそれぞれの数値を表 45 に示す。

表 45 : マクロレベルにおけるそれぞれの要素の実数

	総単語数	NNS	全ての基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	DNS	I-UBS
テキスト A	228	6	15	7	8	1	-
テキスト B	285	2	28	18	10	-	-

これらの値から以下の 4 つの計算式に当てはめて計算を行うと、それぞれ以下の表に示すようなパーセンテージが得られる。

表 46 : マクロレベルでのそれぞれの「近いことば性」の値

分析対象	a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 (主文) / 基礎文 x (副文)	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文 (I-UBS)	d) 総単語数 / NNS + DNS + 全基礎文
テキスト A	54.14%	3.76%	-	-38.73%
テキスト B	4.52%	31.62%	-	-18.13%

テキスト A にも B にも I-UBS が観察されなかったため、c) の計算式は考慮されない。このような結果から、マクロレベルでのそれぞれのテキストの「近いことば性」の値は次の表のようになる。

表 47 : マクロレベルの 4 つの計算値

	テキスト A	テキスト B
マクロレベルの値	6.39%	6.0%

マクロレベルでは、相対的に見てテキスト A と B に同程度の「近いことば性」が含まれている。結果として、テキスト A、B の順にマクロレベルでの「近いことば性」の値が順位付けられる。

ミクロレベル・マクロレベルをそれぞれ平均化して、最終的なテキストの「近いことば性」

性」の値を以下の表に示す。

表 48： 最終的な「近いことば性」の値

	テキスト A (1786 年 1 月号)	テキスト B (1786 年 6 月号)
マイクロレベル値	4.76%	13.80%
マクロレベル値	6.39%	6.0%
最終的な 近いことば性の値	5.57%	9.9%

最終的な「近いことば性」の数値を見ると、今回の 2 つの分析対象ではテキスト B のほうがテキスト A よりも「近いことば性」が高いといえることができる。テキスト B では、マイクロレベルにおいて *wir* や *unsere* といった人称の直示表現が「近いことば性」の要素として数え上げられている。他方、テキスト A には、人称の直示表現は観察されない。人称の直示表現の有無が「近いことば性」の値の高さに大きく関わっていると考えられる。また、テキスト A と B のマクロレベルにおいて、一つの基礎文を作る単語の数の項目（マクロレベルにおいて算出される d) の項目）がマイナスの値となった。また、テキスト A において多くの NNS が観察されたが、カウントされた基礎文 1 の方が基礎文 x の数よりも少なかったためにマクロレベルの値を平均してしまうと、さほど高いマクロレベルでの値とはならなかった。

5.4. モード雑誌における使用語彙に関するコーパス言語学的分析

モード雑誌に収められた女性の服装に関するテキストには、どのような語彙が頻出しているのだろうか。本節では、この点に関して、コーパス言語学的手法で分析することとする。

5.4.1. 分析データ

コーパス分析を行うにあたりコンコーダンスとして AntConc を使用する。石川 (2012) はこの AntConc について、「フリーウェアであること、直感的に使用できること、ユーザーとの意見交換により頻繁に改良が行われていること、仕様の透明性が高いこと、ユーザーが検索条件をカスタマイズしやすいこと、処理が高速なことなど、理想的なコンコーダンスに期待される多くの特徴を備えて」²²¹ いると述べている。

分析の対象とするデータは、1786 年 (創刊号)、1790 年、1795 年、1800 年、1805 年、1810 年そして 1814 年の 7 年分の女性の服装に関する記事である。それぞれ分析対象は約 5 年の間隔を有している。以下の表に、それぞれの記事の総語数をまとめた。

表 49：分析対象の年代と総語数

年代	総語数
1786 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	16,312 語
1790 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	24,429 語
1795 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	22,303 語
1800 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	26,634 語
1805 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	16,263 語 (61,044 語) ²²²
1810 年 (1 月号から 12 月号、全 12 記事)	15,587 語
1814 年 ²²³ (10 月号を除く、全 11 記事)	11,788 語

分析対象とする 7 年分のテキストは、それぞれ年ごとに総語数に違いがある。1786 年の創刊号はおよそ 1 万 6 千語であるが、それから 4 年後、9 年後、14 年後である 1790 年、1795 年そして 1800 年は、総語数が 2 万語を超えている。そして、1814 年では 10 月号のみ、女性の服装に関する記事が掲載されていなかったために、他の年よりも 1 ヶ月分少ないデー

²²¹ 石川 (2012: 98-99)

²²² 分析対象とする女性の服装に関する記事が 1 年間を通して、「雑録およびモード報告」(Miscellen und Modenberichte) というタイトルとなっており、独立した形式で扱われていなかった。そのため、全てを合わせると 61,044 語という総語数であったが、女性の服装に関する記事については 1 万 5 千語ほどの総語数となった。

²²³ 分析対象として 1814 年を選んだのは、本論 5.1.2. においてすでに述べたように、1815 年以降はこの雑誌は「モードと豪華という内容との関連性は徐々に緩くなり、[...] 娯楽雑誌となって」(Kuhles 2000: 494) いたことを考慮して、1815 年以前のモード雑誌を対象とするためである。

タとなっている。上記7年分のデータ、およそ13万語のデータを「JLM („Journal des Luxus und der Moden“) 女性モードコーパス」と名付けておく。

5.4.2. 高頻度語の検索

ここでのコーパス分析は、女性の服装に関するモード雑誌の記事における語の頻度について分析を行うものである。²²⁴ コーパス分析を行うにあたり、まずは分析対象となるテキストの「レマ化」を行った。²²⁵ レマ化に関しては石川（2012）は次のように述べている。

語彙論では、実際にテキストに出現した形と、それらを集約・抽象化した形を区別することがあります。前者を表記形 (word form) と呼びます。後者には、表記形における各種の活用系 (inflected form) を基本形 (base form) に集約したレマ (lemma)、各種の表記形の原型となる語彙素 (lexeme)、辞書の見出しとなる見出し語 (headword) などがあります [...] まず、語彙体系の中に SING という語彙素が潜在的に存在していると考えます。それが鋳型となって、実際のテキストの中で前後の文脈に沿う形で sing, sings, sang, singing といった表記形が具現化し生成されます。そしてそれらを要約する分類上の単位として SING というレマが作られ、それを辞書に記載する場合に sing という見出し語が立つわけです。[...] 単語の頻度研究などでは、基本形と活用形の関係をまとめたレマテーブル (lemma table) を用意し、表記形をレマ単位に変換するレマ化 (lemmatization) の作業が行われます。レマ化により、活用形個々の頻度は基本形頻度に集約されます。

石川（2012: 140-141）

レマ化をすることで、テキスト内にてさまざまに活用されて出現する単語が、一つの単語とみなされる。そのため、後述する「単語頻度検索」を行う際に、それぞれの活用形が一つの同一の単語として検索されることが可能となる。

そこで、レマ化を行ったテキストを AntConc を使用して、まずは「単語頻度検索」を行った。「単語頻度検索」とは、「コーパスを構成するすべての語の頻度を調査し、頻度順に

²²⁴ 語彙のコーパス分析を行うにあたって、高田（2011）によるヒトラー演説のコーパス分析を参考とした。

²²⁵ レマ化をする際には、東北学院大学のサイト (<http://mmt1.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/tree-tagger/>) を使用した。このサイトでは、定冠詞や不定冠詞などは女性形が基本形として採用されている。

構成語を並べたリストを作成する検索技術のこと」²²⁶ であり、「頻度検索によって作成される一覧表は頻度表 (frequency list)、単語表 (word list)、語彙表 (vocabulary list) などと呼ばれ」²²⁷ ている。

まずは 1786 年の「単語頻度検索」の結果として、高頻度語上位 30 語を以下の表で見える。なお、検索するにあたり、品詞は区別していない。また、以下の頻度表は、頻度の降順で並んでいる。

表 50 : 1786 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	810	17	an	64
2	und	384	18	werden	58
3	eine	279	19	dies	57
4	sein	248	20	sehr	56
5	von	238	21	auf	54
6	in	217	21	groß	54
7	mit	179	23	neu	50
8	sie	150	24	als	49
9	zu	138	24	Dame	49
10	man	101	26	um	46
11	oder	97	26	wie	46
12	tragen	90	28	schwarz	45
13	haben	85	28	wir	45
14	Mode	77	30	Flor	44
15	auch	75	30	noch	44
16	so	65			

²²⁶ 石川 (2012: 92)

²²⁷ 石川 (2012: 92)

1786 年の女性の服装に関する記事において、最も高い頻度で出現するのは **die**（定冠詞）であることが表から明らかになった。²²⁸

次に品詞に注目して見てみると、5 位には **von**、6 位には **in**、7 位には **mit**、9 位には **zu**、17 位には **an**、21 位には **auf**、そして 26 位には **um** という前置詞が抽出されていることがわかる。5.2.1.での分析では、1786 年から 1789 年のモード雑誌において、女性の服装に関する記事には前置詞句が高い頻度で使用されていることを明らかにした。上位 30 位にあげられた前置詞の多くは品物の素材や形状（どこに何があるのか）を記述するための空間の中で位置などを記述する際に使用される前置詞だと言えるかもしれない。また、12 位にある **tragen** という動詞に注目してみると、数ある動詞の中で、**tragen** が最も高い頻度で使用されている動詞であることは、服装に関する記事ならではの特徴と言えるであろう。14 位にある **Mode** という名詞は、流行を扱う雑誌においては重要なキーワードである。また、24 位の **Dame** は、女性の服装に関する記事において特徴となる名詞である。さらに 30 位の **Flor** も素材を表す名詞として服装に関する記事に特徴的な名詞といえるだろう。21 位の **groß**、23 位の **neu**、28 位の **schwarz** のように大きさを表す形容詞、新しさを表す形容詞や色に関する形容詞も流行の服装に関する記事において特徴となる語である。

1786 年の女性の服装に関する記事の「単語頻度検索」を行なったのと同様に、1790 年、1795 年、1800 年、1805 年、1810 年そして 1814 年の女性の服装に関する記事の「単語頻度検索」も行った。それらの結果を以下の表 51 から表 56 に示すこととする。

表 51 : 1790 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	1341	16	weiß	94
2	und	655	17	sich	89
3	eine	378	18	ich	83
4	sein	326	19	so	82
5	von	316	20	tragen	78

²²⁸高頻度語のリストを作成する際に、**unknown** や **card** という語が抽出された。**unknown** は、ひげ文字で書かれたデータを文字読み取り（OCR=Optical Character Recognition）ソフトでラテン文字に変換した際に、ソフトによって読み取れなかった単語のことを指している。また、**card** は数字を表している。時折、数字がこのように **card** として処理されることがある。本論文においてはこれら **unknown** や **card** は高頻度語リストには含めなかった。

6	in	314	21	auch	76
7	mit	237	22	dies	73
8	sie	236	22	sehr	73
9	zu	179	24	welche	71
10	oder	107	25	nicht	70
11	man	101	26	ihr	69
12	werden	100	27	alle	68
13	an	95	28	als	65
13	auf	95	28	Mode	65
13	haben	95	30	schwarz	64

1790 年においても、最も高い頻度で現れる語は定冠詞である。また上位 30 位以内には、von、in、mit、zu、an、auf のような前置詞が見て取れる。さらに weiß や schwarz といった、色に関する形容詞も抽出されている。tragen という動詞も 1790 年においても 30 位以内に含まれており、Mode という名詞も同様である。また、1786 年には wir という一人称複数形が 30 位以内に観察されていたが、1790 年になると、wir は 30 位以内には含まれていない。しかし一方で、ich という一人称単数形が観察されている。

表 52 : 1795 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	1233	16	ihr	86
2	und	529	17	dies	85
3	eine	336	18	als	83
4	in	322	18	nicht	83
5	von	282	20	aus	79
6	sein	270	21	Mode	78
7	zu	199	22	auch	69
8	sie	176	23	an	60
9	mit	169	23	dass	60

10	haben	117	23	man	60
10	ich	117	26	alle	59
12	werden	110	27	ganz	57
13	auf	102	28	für	56
14	sich	92	29	oder	56
15	so	89	30	es	53

1795 年もやはり、最も高い頻度で抽出される語は定冠詞となっている。von、zu、mit、auf、an といった多くの前置詞も 1786 年、1790 年同様使用されていることがわかる。また、一人称単数形の ich は 1790 年から継続して 30 位以内に含まれている。そして、1795 年の上位 30 位には動詞 tragen が含まれなくなった。

表 53 : 1800 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	1666	16	oder	100
2	und	538	17	auch	97
3	in	447	18	dies	88
4	eine	380	19	aus	79
5	sein	360	20	nicht	78
6	von	285	20	so	78
7	zu	233	22	noch	76
8	mit	220	23	um	74
9	sie	152	24	alle	73
10	auf	132	24	Mode	73
11	man	120	26	als	70
12	haben	117	26	ihr	70
13	sich	114	28	er	58
13	werden	114	28	über	58
15	an	111	30	neu	57

1800年の高頻度語リストにおいても定冠詞が最も高い頻度で抽出された。また9種類の前置詞も抽出されている。Mode という名詞、さらに neu という形容詞も観察された。1800年の高頻度語リストではそれまで30位以内に含まれていた一人称単数形もしくは一人称複数形は見られなくなっている。

表 54 : 1805 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	1286	16	man	81
2	und	467	17	auch	78
3	eine	316	18	an	77
4	in	303	19	dies	68
5	von	261	20	Luxus	65
6	sein	235	20	tragen	65
7	mit	228	22	er	62
8	zu	146	22	haben	62
9	sie	142	24	als	61
10	Mode	125	25	Dame	60
11	oder	100	26	sich	57
12	Journal	90	27	dass	52
13	so	87	28	ihr	50
14	auf	85	29	wie	49
15	werden	83	30	nicht	48

1805年のリストでも、定冠詞が最も高い頻度で使用されていることがわかる。6種の前置詞が30位以内に含まれており、また、Mode、Journal、Luxus といった名詞も含まれている。さらに、1790年以降、1795年、1800年には高頻度リストの30位以内に入っていなかった動詞 tragen が、1805年には20位となっている。

表 55 : 1810 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	1035	16	auch	61
2	und	364	17	an	56
3	in	257	17	auf	56
4	von	246	19	Mode	55
5	sein	236	20	sehen	51
6	mit	183	21	nicht	50
7	eine	169	22	alle	49
8	zu	140	23	aus	47
9	man	99	24	als	46
10	sie	97	25	noch	45
11	haben	70	26	dies	44
12	sich	68	27	tragen	42
13	werden	66	28	es	41
14	so	65	28	welche	41
15	oder	64	30	wie	40

1810 年の高頻度語リストでも、定冠詞が最も頻出する語として示された。また、7 種類の前置詞が観察され、1810 年以降には高頻度語リストの上位 30 位に入らなかった動詞 *sehen* が 1810 年には 20 位に観察されている。さらに 1805 年に引き続いて、動詞 *tragen* も観察されている。

表 56 : 1814 年の高頻度語リスト

	抽出語	出現数		抽出語	出現数
1	die	784	16	auf	66
2	und	324	17	nicht	64
3	in	194	18	oder	62
4	sein	190	19	haben	58

5	eine	184	20	Mode	55
6	sie	152	20	sich	47
7	von	146	22	Hut	39
8	zu	145	23	noch	38
9	man	116	24	aus	37
10	mit	104	25	als	36
11	dies	86	26	es	35
12	an	75	26	sehr	35
13	so	72	28	Farbe	33
13	werden	72	28	Kopf	33
15	auch	67	28	um	um

1814年においても、最も頻度の高い語は定冠詞であることが示された。そして8種類の前置詞が、高頻度語リストの30位以内に挙げられている。さらに **Mode** や、**Hut** のような品物に関する名詞、色を表す名詞 **Farbe**、そして身体部位に関する名詞 **Kopf** も含まれていることがわかる。

以上のようにおよそ5年間隔、7年分の女性の服装に関する記事において、上位30位までの高頻度語をリスト化した結果、7年間分のコーパス分析によってそれぞれ共通する高頻度語が明らかになった。例えば、どの年代においても少なくとも5種類以上の前置詞が上位30位以内に含まれていることが言える。また、名詞という観点から観察すると、名詞 **Mode** が7年間を通して上位30位以内に含まれていることがわかる。

そこで、本章では上記のうち、モード雑誌に特徴的であろうとされる名詞 **Mode** に着目する。²²⁹ そして、**Mode** という名詞はどのような形容詞と最も結びつきが強いとされるのかを明らかにしていく。このような目的のために、コーパス分析におけるTスコアを使用し、**Mode** という名詞がどのような語と共起するのか、そして、共起する関係性がどのくらい強いのかを測定する。

²²⁹ ただし、対象となるのは **Mode** という一語の他に **Mode-Farbe** 「流行色」や **Winter-Mode** 「冬の流行」なども含まれている。

5.4.3. 共起関係の測定

石川（2008）によれば、「Tスコアとは、平均値の差の検定に使用される統計量に基づくもので、2語の共起が偶然の確率を超えて有意なものであるかどうかを測る指標である」（石川 2008: 109）という。さらに、「一般に、Tスコアが2以上であれば、有意水準の5%を満たし、意味のある組み合わせと解釈される」²³⁰ということから、本章でも2という値を採用することとする。

また、語と語の共起関係を測定する際、検索語と共起関係にある共起語は「検索語の右にある語の位置を順にR1, R2, R3,...(または+1, +2, +3,...)、左にある語の位置を順にL1, L2, L3,...(または-1, -2, -3,...)」²³¹とされるのが一般的である。検索語からどの程度の範囲までを共起関係とするのかは自由に設定できるが、「コロケーション研究では、一般にL4、R4あるいはL5、R5程度の範囲までが用いられることが多い」²³²という。本分析では、Modeという名詞を修飾する形容詞を明らかにするという目的のために、Modeという語の左側(L)に着目する。その上で、齋藤・中村・赤野（2005）に基づき、共起関係の範囲をL4（すなわちModeという名詞の4つ前までの語を検索する範囲とする）と設定することとする。

レマ化した1786年のテキストからAntConcを使用してTスコアの値を算出したところ、Tスコアが2以上の値として以下の語が抽出された。

表 57 : 1786年の記事内における名詞Modeに対するTスコア

抽出語	Tスコア	出現数
die	6.76027	56
Journal	5.24606	28
neu	3.51292	13
von	2.04485	7

²³⁰ 石川（2008: 110）

²³¹ 齋藤・中村・赤野（2005: 131）

²³² 齋藤・中村・赤野（2005: 131）

1786年における名詞 Mode の T スコアを算出した表において、4つの語 die、Journal、neu、von という語が Mode という語と共起関係が強く、意味のある組み合わせであることが示されている。Mode と形容詞という観点では、neu 「新しい」という語が強い共起関係にあることがわかる。(neu という形容詞がどのように使用されているのか実際にテキストを分析するにあたって、上記の出現数以上の使用が観察された。おそらくレマ化を行うにあたり、いくつかとりこぼされたと考えられる。) 実際のテキストを観察すると、原級 neu として 10 回の使用が観察される一方で、最上級の neuest 「最新の」という形での使用は、16 回観察される。例えば、以下のような文である。

36) Müffe von Satin Goffré mit schwarzen Samtbande und Perlen garniert, sind neue Mode.

(1786年5月号)

黒色のタフタリボンと真珠で装飾された Goffré サテンでできたマフは新しいモードです。

37) Die neuesten Mode-Farbe sind jetzt Queue de Serin. (Canarian-Vogel-Schwanz.) (1786年1月号)

最新のモード色は目下、Queue de Serin (カナリア鳥の尻尾) です。

38) Von neuester Mode hingegen sind die gemahlten Strohhüte. (1786年8月号)

それとは反対に最新モードのものは、彩色が施された麦わら帽子があります。

原級 neu と最上級 neuest の使用を合わせると、計 26 回の形容詞 neu が観察された。

以下にそれぞれ 1790 年、1795 年、1800 年、1805 年、1810 年そして 1814 年の Mode についての T スコア (L4) をまとめたものを、表 58 から表 63 に示す。

表 58 : 1790 年の記事内における名詞 Mode に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
die	6.05286	46
Journal	4.76352	23
allgemein	2.19317	5
neu	2.14532	5

1790 年において Mode と強い共起関係にある形容詞として **allgemein**「一般的な」と **neu**「新しい」が抽出された。2 つの形容詞がどのように使用されているのか実際にテキストを分析すると、1786 年の分析同様、表内の出現数以上の使用が観察された。**allgemein** に関しては、**allgemein** が 4 回、最上級の **allgemeinst**「最も一般的な」という形は 2 回使用されており、計 6 回の使用が確認される。例えば、次のような文である。

39) Die allgemeinen Moden unserer Londner Damen, [...] sind fast ganz Französisch; sonderlich in Halbs-dress oder Negligee. (1790 年 8 月号)

我々のロンドン女性の一般的なモードは、[...] そのほとんどがすっかりフランス式です；とりわけハーフドレスかネグリジェの場合において。

40) Die allgemeinste Mode-Form ist jetzt a la Casque, (die Sie auch schon haben,) von Taft oder Flor, und die gewöhnlichste Farbe hellblau; (1790 年 8 月号)

最も一般的なモードの形は、現在はタフタもしくは紗でできた a la Casque（兜状のもの）（あなた方がすでにお持ちの）です。そして最もありふれた色は水色です。

また、**neu** に関しては原級 **neu** の形で使用されているのは 8 回、最上級 **neuest**「最新の」の形で使用されているのは 6 回観察される。以下に、観察された文を示す。

41) Ich sende Ihnen nachfolgende einzelne Bemerkungen über neue Mode und Geschmack in Kleidung und Equipagen, (1790 年 11 月号)

私はあなた方に、衣服や身の回りの品におけるモードと嗜好について、いくつか次のコメントをお伝えします。

42) Eine der neuesten Moden sind Gillets von weißen Sammt, (1790 年 8 月号)

最新のモードの一つは白いピロードでできたジレーです。

neu という形容詞は 1790 年の分析対象において、合計 14 回の使用が観察された。

次に 1795 年の名詞 Mode に関する T スコアを見てみる。

表 59 : 1795 年の記事内における名詞 Mode に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
die	6.15164	49
von	3.07202	12
neu	2.75691	8
alle	2.53835	7
Bild	2.41410	6

1795 年でも、neu という形容詞が Mode と強い共起関係にあることが明らかになった。neu に関して実際にテキストを見てみると、原級 neu が 6 回、最上級である neuest が 3 回観察された。例えば次のような文である。

43) Von hiesigen neuen Moden kann ich Ihnen nichts sagen, [...]. Dagegen gebe ich Ihnen lieber ein paar Züge aus der neuesten Moden-Chronik Englands und Frankreichs, (1795 年 2 月号)

当地の新しいモードに関しては、あなた方に何もお伝えすることができません、[...] それよりむしろ、あなた方には英国とフランスにおける歴代の最新のモード・ニュースから、ほんのいくつかの傾向を提供いたしましょう。

原級と最上級、合わせて計 9 回の neu の使用が観察された。

次に 1800 年の T スコアはどうだろうか。表により、その結果を示す。

表 60 : 1800 年の記事内における名詞 Mode に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
die	7.56959	69
von	2.45814	8
bild	2.42999	6

1800 年における Mode に対する T スコアでは、これまでの結果とは異なり、強い共起関係を持つ形容詞は抽出されなかった。1786 年、1790 年、1795 年の結果にて抽出された neu という形容詞は、1800 年では形容詞の中で最も高い T スコア (1.65779、出現数 3 回) を得たが、T スコアの基準値として設定している 2 を超えることはなかった。そのため、強い共起関係を持つとは言えない。そこで neu の使用法を確認するために、実際にテキストを分析すると、最上級 newest の形で 5 回観察された。例えば次のような文である。

44) Die neueste Mode in Bändern sind weiße Atlasbänder, (1800 年 3 月号)

リボンにおける最新のモードは白いサテンのリボンです

1800 年のテキストでは、上記のような最上級の形での使用が観察された。

では次に 1805 年の T スコアを以下の表に示す。

表 61 : 1805 年の記事内における名詞 Mode に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
die	11.18190	147
und	6.71013	53
Luxus	5.55476	32
neu	3.03022	10

1805 年の T スコアの結果では意味のある共起関係として形容詞 neu が抽出された。neu は、原級 neu として 9 回、そして最上級 newest として 3 回使用されている。例えば次のような文である。

45) Ich habe allezeit bemerkt, daß in der Zeit, wo der scheidende Winter mit dem Kommenden Frühjahre tauscht, eine gewaltige lange Pause in der neuen Mode entsteht; (1805 年 5 月号)
 私は常に気がついていたのですが、去りつつある冬が、来たる春と交代する間に、ひどく長い中休みが新しいモードに生じています。

46) Übersicht der neuesten Moden am Schlusse des Jahres 1804. (1805 年 1 月号)

1804 年の終わりに最新のモードを概観

1805 年のテキストでは **neu** という形容詞が計 12 回使用されている。

次に 1810 年のテキストを見てみる。

表 62 : 1810 年の記事内における名詞 **Mode** に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
die	5.94022	44
von	2.44213	8
neu	2.17449	5

1810 年の T スコアの結果をから、形容詞 **neu** が **Mode** と強い共起関係にあることがわかる。実際のテキストを分析すると原級 **neu** が 3 回、最上級である **neuest** が 2 回使用されていた。以下に使用例を示す。

47) Neue Moden in Paris. (1810 年 7 月号)

パリの新しいモード

48) Jetzt zu den neuesten Moden. (1810 年 1 月号)

今度は、最新のモードについて

計 5 回の **neu** という形容詞の使用が観察された。

最後に 1814 年の T スコアを以下の表に示す。

表 63 : 1814 年の記事内における名詞 Mode に対する T スコア

抽出語	T スコア	出現数
und	4.31459	22
die	3.23725	18
Luxux	2.98186	9
in	2.24681	7

1814 年の T スコアでは Mode と有意の共起関係を持つ形容詞は抽出されなかった。ちなみに、形容詞の中で最も T スコアが高かった形容詞は neu であり、T スコアは 1.65980、そして出現数は 3 回という結果であった。実際にテキストを分析してみると、原級としての neu の使用が 3 回、最上級の neuest は 1 回、計 4 回観察された。例えば次のような文である。

49) Gegenwärtig beschäftigt sich das schöne Geschlecht vorzugsweise mit der Nation, der sie vor einigen Monaten die Befreiung von einem schweren und drohenden Unglück verdankte, und gewiß ist es, um das Andenken der Tage von Großbeeren und Dennewitz zu erhalten, daß die neueste Mode in schwabischen Hüten besteht. (1814 年 1 月号)

現今女性たちはとりわけ国家と関わりがあります。数ヶ月前に女性が重大で恐ろしい不幸から解放されたのも国家のお蔭です。また確かなのは、グロースベーレンやデネヴィッツでの日々を回想し続けるために、最新のモードがシュヴァーベン帽子であったということです。

50) Wer sich noch nicht dieser neuen Mode unterwirft, trägt den Chinesischen Kopfputz, (1814 年 11 月号)

この新しいモードを未だに受け入れていない人は、中国の頭飾りを身に着けています。

以上、T スコアを使用して、名詞 Mode と強い共起関係にある形容詞を分析してきた。1800 年そして 1814 年を除く 5 年分のモード雑誌では、どれも neu 「新しい」という形容詞が Mode と強い共起関係にあることが明らかになった。確かに 1800 年と 1814 年のテキストでは、Mode と neu の共起関係に有意性は見出せないという結果となったが、多様にある形容詞の中で常に最も高い T スコアを有したのは neu であったことに違いはない。では、

どうして Mode (流行) はこんなにも「新しさ」と結びつくのだろうか。ここでもう一度、本論 5.1.1 章でも言及した当時の Mode を定義したアーデルングとカンペのことばを部分的に引用したい。

狭義においては、[時と共に] 変わる衣服のまとい方や装身具の類い全般の付け方を指す。Adelung (1798: Bd3. 254)

特に、ひろく受け入れられてはいるが [時と共に] 変わる衣服のまとい方や装身具の付け方のこと。Campe (1809: Bd3. 327)

アーデルングやカンペが定義づけているように、Mode には変化が常に生じている。それゆえ、モード雑誌の読者は常に変化する Mode の最先端を目指しているのだろう。そのために、当時のモード雑誌の書き手は、自身の書く記事には「新しい」流行や「最新の」流行の情報が掲載されていることを伝えるために Mode と neu という語を頻繁に結びつけたと考えられる。また、カンペの言う「ひろく受け入れられて」という定義は、1790 年に Mode と共起関係があると示された形容詞 allgemein に反映されていると言えるだろう。

5.5. モードを魅せる語彙と表現

5.5.1. 扱うテキストの基本情報

モード雑誌の本質は、そこに扱われたモードを魅力的な物だと読者に思わせることであろう。上 (5.2.2.) に、モード雑誌は「記述」するテキストであると書いた。「記述」のテキストの代表的なものが事典のテキストであることでわかるように、記述するテキストは単調なテキストになりがちである。²³³ここで本節では、女性の服装に関する記事において、モード品を魅力的に見せるためにどのような語彙と表現が使用されているのかについて分析を行いたい。分析の対象とするのは、創刊年の 1786 年 4 月号 (テキスト D とする)、と 1787 年 5 月号 (テキスト E とする)、さら約 30 年の時代を隔てた 1814 年 5 月号 (テキス

²³³ Eroms (2008: 92) を参照。

ト F とする) そして 1815 年 5 月号 (テキスト G とする) のテキストである。²³⁴

本節での分析対象に関する基本的な情報を以下の表に簡単にまとめると、表のようになる。

表 64 : 分析対象に関する詳細

	年・月	総単語数	総文数
テキスト D 全体	1786 年 4 月号	854	35
テキスト D-1		389	12
テキスト D-2		101	4
テキスト D-3		361	19
テキスト E 全体	1787 年 5 月号	754	34
テキスト E-1		474	22
テキスト E-2		179	7
テキスト E-3		98	5
テキスト F 全体	1814 年 5 月号	995	32
テキスト F-1		852	27
テキスト G	1815 年 5 月号	148	9

モード雑誌のテキストでは、ある衣服の部分がどのようになっているのか、どのような色や素材でできているのかなどを記述することで、モードである衣服を読者に伝えている。実際にテキスト内で言及されている衣服 (対象物) を手に取り、見るができない読者に、まさに衣服を可視化し、「見せて」いるもしくは「魅せて」いるのである。例として 1787 年のテキスト E-1 を見てみる。

²³⁴ テキストを分析する際に、テキストを比較する際に扱われる衣服におおよその統一がある方が良く考えて、全て春の衣服を扱う 4 月の記述に限定した。1786 年以外のテキストでは、それぞれの月において前月の内容を扱っているため、5 月号を対象としている。また、扱う衣服毎に通し番号とタイトルを付け、それぞれのテキストが独立した状態を保持している 1786 年と 1787 年のテキストについては、それぞれの通し番号毎にテキストを D-1、D-2 のように細分化し、それぞれを一つの独立したテキストとして分析を行うこととする。

51) Sie besteht aus seiner leichten Binde von Milchflor, in Form eines Turbans, um die sich ein breites weiß und lilas gestreiftes Band schlingt und an der linken Seite herab hängt.

その縁なし帽子は白い紗でできた軽い帯でできています。それはターバンの形状になっており、その周りには幅広の白と藤色の縞模様のリボンが巻き付けられていて、左側に垂れ下がっています。

このテキストでは当時のモードであるとされた縁なし帽子がどのような形状であるかを詳細に記述している。このように、モード雑誌では、衣服がどうであるかという記述が中核をなしている。

しかしながら当時のモード雑誌は、単に衣服の詳細な描写だけを記述しているだけではない。では、どのような表現法を使用して、モードの何を伝えているのだろうか。以下、その詳細を見ていくことにする。

5.5.2. 推奨

今回の分析テキストでは、直接的に品物を宣伝するような記述が見られる。それが、「推奨するに値する (empfehlenswert)」という形容詞と推奨する (empfehlen) という動詞を使用したテキストである。

52) [...] die Elle à 16 Gr., ihrer Haltbarkeit in der Wäsch wegen sehr empfehlenswerth; [...]

(そのギンガムは) 1 エレ[あたり]16 グロッシェンしますが、洗濯をしても丈夫なのでとても勧めるに値します。(1814年、テキスト F-1)

53) Sollten wir wohl nötig haben sie unsern schönen Landsmänninen noch besonders zu empfehlen?

それ [英国女性の真の服装] を、我々のすばらしい同郷の女性たちに、ことさら推奨する必要などありまじょうか。(1786年、テキスト D-1)

サール (2006) における発話行為の 5 つの分類 (すなわち断定型、指令型、行為拘束型、表現型、宣言型) をもとに、Hinderlang (1983) はそれぞれの型に該当するような動詞を

列挙している。Hinderlang (1983) によれば、「推奨する (empfehlen)」は指令型の発語内行為の動詞である。²³⁵ すなわち推奨することは、「話し手が当の行為によって聞き手に何かを行わせようと試みる」²³⁶ ことである。モード雑誌において推奨が行われる場合には、書き手が品物を推奨することで、読者に当該の品物に対する欲求を起こさせたり、また当該の品物を購入させようと促す狙いがあると考えることができる。

5.5.3. 高価値語

Janich (2003) においては、Römer (1968) の広告に関する論文が取り上げられ、その論文内に提示された「高く価値づける語 (Hochwertwort)」に関して述べられている。また、Hochwertwörter という用語以外にも「echt、ideal、genial、phantastisch、vollendet などのような付加語的形容詞に対しては、高く価値づける形容詞 („hoch-wertendes“ Adjektiv) ということばが用いられている」²³⁷ という。「高価値語」²³⁸ は「価値のある事柄を示したり、商品名として使用」²³⁹ され、また「比較級もしくは最上級という文法構造を含まないという特徴を持って」²⁴⁰ いる。「高価値語を使用することで、事柄の非常にポジティブな側面にに基づきながら、事柄の価値が引き上げられる」²⁴¹ のである。すなわち、「高価値語」それ自体に付随するプラスの価値によって、「高価値語」が使用された事柄にもプラスの価値がつけられるようになるのである。このような「高価値語」を用いた表現は、以下のテキストにおいて観察される。

54) Das wichtigste Stück dieser Tracht ist die große Schärpe, welche wie ein Mantel umgethan, auf der Brust sich kreuzt, hinten in einem leichten Knoten geknüpft wird, und sodann in zwey reichen schönen Enden herabhänget.

この衣装のもっとも重要な部分は大きなエシャルプです。それはマントのように羽織られ、胸元で交差し、背中で簡単な結び目で結ばれており、二つのたっぷりとした美しい端の形をして垂れ下がっています。(1786年、テキスト D-1)

²³⁵ Hinderlang (1983: 46)

²³⁶ サール (2006: 21)

²³⁷ Janich (2003: 120)

²³⁸ 本論文では、「高価値語」と「高価値語形容詞」を合わせて「高価値語」として扱うこととする。

²³⁹ Janich (2003: 120)

²⁴⁰ Janich (2003: 120)

²⁴¹ Janich (2003: 120)

55) Sie ist einem wohlgewachsenen Körper überaus vorteilhaft, zeigt eine schöne Taille, durch das unten enge und oben weite und etwas lockere Corset, in ihrer ganzen Grazie und hat überhaupt das edle prunklose Ansehn einer geschmackvollen Simplicität, und Wohlanständigkeit, welches die Reize des schönen Geschlechts so sehr erhöht.

それはよく発達した身体にとっても好都合ですし、下部は狭く、上部は広い、いくらかゆるいコルセットによってウエストを気品よく美しく見せます。そしてまったく趣味の良いつつましさと、端正さを備えた、上品で華美すぎない外見です。その外見は女性の魅力をとても高めます。(1786年、テキスト D-1)

56) Ihre Grundfarbe ist ein äußerst brillantes Purpurroth [...]

その地の色は非常にすばらしい深紅色です (1814年、テキスト F-1)

57) Sie ist, wie alle hiesige Hofkleider, sehr reich, und giebt einen edlen Anstand.

この服は全ての当地の宮廷服のように、とても豪華であり、上品さを与えます。(1815年、テキスト G)

(54) では形容詞 *schön* 「美しい」が観察され、(55) では、形容詞 *vorteilhaft* 「よく似合う」、*schön* 「美しい」、*edel* 「上品な」、*prunklos* 「華美すぎない」、*geschmackvoll* 「趣味の良い」、そして名詞 *Simplicität* 「つつましき」、*Wohlanständigkeit* 「端正さ」、(56) では *brillant* 「すばらしい」という形容詞、そして (57) では *reich* 「豪華な」、*edel* 「上品な」という形容詞の「高価語」が観察される。実物を見ることができない読者にとって、書き手による品物に対する評価の記述は大いに重要な点である。モード雑誌の書き手は、このような「高価語」を用いることで、読者に品物のよりよい魅力を伝えようとしたと考えられる。

5.5.4. 比較級・最上級

分析したテキストの中には、比較級や最上級を使用することで、書き手が対象物に対する評価に段階をつけていると考えられる事例がある。

58) [...] die englischen aber haben einen feineren und weicheren Stoff [...]

しかし英国の製品はより良質でより柔らかい素材です

(1814年、テキスト F-1)

(58) においては、「より良質 (*feiner*) でより柔らかい (*weicher*) 」という比較級が使用されている。Ortner (1981) は、「形容詞の比較級を用いてある対象物を特徴づけることは、その他の対象物を無価値化し、そして減価するという結果になる」²⁴² と述べている。比較級を使用することで、一つの対象物を際立たせ、他の対象物を排除することができるのである。同様のことは最上級に関しても適合する。²⁴³ 分析対象のうち、最上級を使用した文を以下に挙げる。

59) Von Hauben ist dermalen die neueste und merkwürdigste das *Bonner à la Circassienne paree* (Taf. 13. Fig. 2.) die gefällt und sehr gut kleidet.

縁なし帽子の中では、目下、最新で注目すべき、すなわち魅力的なチェスセス風ボンネット帽があります。それは好まれ、とても素敵に着用されます。(1787年、テキスト E-1)

60) [...] denn ein Federbusch [...] ist einfarbig gewiß immer am schönsten.

というのも、羽の束は単色が間違いなく常に最も美しいからです。

(1787年、テキスト E-1)

61) Aber die schönste Art von englischen Zitzen waren unstreitig die 7/4 breiten, sogenannten Perses.

しかし英国チンツのなかでも一番美しいのは、疑う余地無く、4分の7幅のいわゆるペルシアです。(1814年、テキスト F-1)

Ortner (1981) によれば、このような最上級の使用は、1960年代、1970年代のモード雑誌にはほとんど観察されないという。「最上級は、相対的に減多に使用されない。なぜなら

²⁴² Ortner (1981: 226)

²⁴³ Ortner (1981: 226) を参照。

『優位性独占の宣伝行為 (Alleinstellungswerbung)』はモードジャーナルでは可能ではないからである」。²⁴⁴ しかしながら、今回の 1800 年前後のモード雑誌には、相対的に最上級が比較級よりも多く観察される。このことは、1800 年前後の当時は「優位性独占の宣伝行為」が問題なく実行可能であったと考えられる。そのため、今回の分析対象では、最上級が比較的多く使用されることにつながったと推測される。1800 年前後においては、モード雑誌の書き手は、自らが見た品物に対して、最上級を使用した評価をそのまま読者に伝えることを認容していたと言える。

5.5.5. 程度を高める表現

Ortner (1981) は「副詞、語形変化をしない形容詞そして分詞は、既に価値のある性質を持つ単語に対して使用されると、さらにその価値の程度を高めることに貢献する」²⁴⁵ と述べている。今回の分析対象では、以下の 3 つの例が観察される。

62) Sie ist einem wohlgewachsenen Körper überaus vorteilhaft, zeigt eine schöne Taille, durch das unten enge und oben weite und etwas lockere Corset, in ihrer ganzen Grazie und hat überhaupt das edle prunklose Ansehn einer geschmackvollen Simplicität, und Wohlanständigkeit, welches die Reize des schönen Geschlechts so sehr erhöht.

それは成熟した身体にとってもよく似合いますし、下部は狭く、上部は広い、いくらかゆるいコルセットによってその気品の中に美しいウエストを見せています。そして全体として趣味の良いつつましさと、端正さを備えた、上品で華美すぎない外見です。その外見は女性の魅力をとっても高めます。(1786 年、テキスト D-1)

63) Ihre Grundfarbe ist ein äußerst brillantes Purpurroth [...]

その下地の色は非常にすばらしい深紅色です (1814 年、テキスト F-1)

²⁴⁴ Ortner (1981: 225)。また、「優位性独占の宣伝行為 (Alleinstellungswerbung)」とは、「宣伝文を介して、宣伝者が[...] 彼の企画、商品もしくは職務の遂行でもって、彼の最高の業績を一般市場において得ようとする」(Seeborn 1999: 5) ことであり、その際には宣伝文に「高い頻度で最上級の表現が投入される」(Seeborn 1999: 5)。

²⁴⁵ Ortner (1981: 227)

64) Sie ist, wie alle hiesige Hofkleider, sehr reich, und giebt einen edlen Anstand.

この服は全ての当地の宮廷服のように、とても豪華であり、上品さを与えます。(1815年、テキスト G)

(62) では *überaus* 「とても」という副詞が *vorteilhaft* 「似合う」を、(63) では *äußerst* 「非常に」という副詞が *brilliant* 「すばらしい」を、そして (64) では *sehr* 「とても」という副詞が *reich* 「豪華な」を修飾している。どれも単独で使用される *vorteilhaft* 「似合う」、*reich* 「豪華な」と *brilliant* 「すばらしい」という形容詞よりもその程度が高められている。書き手は比較級を使用する以外にも、上記に見たような程度を表現する副詞等を使用し、品物の評価に段階をつけていると言える。

5.5.6. 五感に訴える形容詞

実物に触れることができない読者にとって、五感に訴えるような表現が使用されると、品物をより鮮明に想像しやすくなる。

65) [...] die englischen aber haben einen feineren und weicheren Stoff [...]

しかし英国の製品はより良質でより柔らかい素材です

(1814年、テキスト F-1)

66) Besonders war diese Mannichfaltigkeit in den 5/4 breiten, dunkelgrundigen (dark grounds) sichtbar.

とりわけ、この多様さは、4分の5の幅の濃い色地のものにおいてはっきり見られました。(1814年、テキスト F-1)

(65) では書き手が実際に品物に触れ、*weich* 「柔らかい」という形容詞を使用して表現することで、読者は品物の質感を想像することができる。また、(66) では書き手が実際に品物を見たうえで、*sichtbar* 「はっきり見える」と表現することで、読者は濃い色地のものによってはっきりと引き立てられた多彩さを、より鮮明に想像することができる。

5.5.7. 物事を価値づける表現

5.5.7.1. 「モードである」こと

モード雑誌は言うまでもなく、最新の流行を発信するメディアである。したがって、ある衣服がモード雑誌に掲載されているという時点で、すでに当該の衣服はモードであることには間違いない。それでもなお、いくつかの衣服がモードであることを明示する記述が観察される。例えば、*in Mode sein* 「モードである」という表現を使用した表現である。

67) *Die Robe à la Turque sind hier noch in voller Mode.*

トルコ風ローブはこちらではまだまだモードのまっただ中です。

(1786年、テキスト D-3)

1960年代、70年代のモード雑誌を研究した Ortner (1981) は、「*in Mode sein* という述部を使用することを正当化する条件事項はすなわち、特徴づけられかつ論評された対象物が大多数の消費者によって認められていることであり、そのことから対象物が大量に普及していることである」²⁴⁶ と述べている。すなわち *in Mode sein* と表現することで、当該の品物が多くの人びとに受け入れられ、普及していることを端的に示すことができる。同様のことは、*Mode sein* という表現にも当てはまると言える。

68) *Eben so sind auch noch die Pierrots und Robes en Chemise Mode.*

同じように、円形の堅い立て衿、そしてシャツローブも今なおモードです。(1786年、テキスト D-3)

69) *Eine der neuesten Moden in London ist auch das sogenannte Colerette; [...]*

ロンドンでの最新のモードの一つは、いわゆるコルレットでもあります。いわゆるコルレットも、ロンドンでの最新のモードの一つであります；

(1787年、テキスト E-3)

²⁴⁶ Ortner (1981: 175)

また、*Mode* と並んで、*Geschmack* も *Mode* と同様の意味で使用されている例がいくつか観察される。²⁴⁷

70) Uebrigens ist es auch jezt Geschmack, Redingote, Gillet, und Rock immer von drey verschiedenen sehr abstechenden Farben zu tragen.

その他の点では、フロックコート、ギレそしてスカートの3点をそれぞれ互いに際立つ色で着用することも現在の流行です。(1787年、テキスト E-1)

71) Der Geschmack der gedruckten Zitze war in dieser Messe um so mannichfaltiger, [...]

プリントされたチンツの流行は、今回の見本市ではますます多様になっていました(1814年、テキスト F-1)

さらに *Mode werden* 「モードになる」という言い回しも、1例観察された。

72) [...] sein Versuch ist ihm so glücklich gelungen, daß die *Chapeaux de Sparterie* seit einem Monat hier allgemein Mode worden sind.

彼の試みは幸運にもうまくいきましたので、アフリカハネガヤ製の帽子は一ヶ月前から広くこちらでモードとなりました。(1787年、テキスト E-1)

また、*Mode* を使用した複合語も1例観察される。

73) Dieses Blau (Bleu-Raymond) ist eine Mitteltinte zwischen Marie-Louisen- und Indigo-Blau, und scheint in allen seidenen Zeuchen die neueste Modefarbe zu seyn.

この青色(ブルー=レイモンド)はマリア=ルイーゼ=ブルー色と、インディゴ=ブルー色の中間色で、あらゆる絹織物の中で最新のモード色であるように思われます。

(1814年、テキスト F-1)

²⁴⁷ Ortner (1981) の研究によれば、1960年代、1970年代のモード誌では、*Mode* という単語と同等の意味で *Welle* や *Boom* の使用が見られ、また (*in*) *Mode sein* と *en vogue sein* という言い回しが競合していたという結果が得られている。

モード雑誌の読者にとって、そのときそのときのモードや流行がなにであるかということは、非常に重要なテーマである。各都市のモードを目の当たりにできない読者のために、モード雑誌テキストの書き手は何が「モードである」のかを明確に記述することが求められていたと言える。

5.5.7.2. 賛同表現

上述のように、Ortner（1981）が *in Mode sein* という表現の使用条件に言及しており、ある対象物が大衆に受け入れられているかどうかという事柄も、モードを語る上で重要な要素となってくる。今回の分析対象では、「喝采・賛同」を得るという表現が観察される。

74) Beide Erzeugnisse verdienen allgemeinen Beifall [...]

2つの製品は大方の賛同を得ます。（1814年、テキスト F-1）

75) [...] welche, theils weil man sich des Gestreiften müde gesehen, theils auch ihrer Wohlfeilheit wegen (denn die Elle kostete nur 13 Gr.), am meisten Beifall fanden.

一方では縞模様が倦まれており、また一方では安価であることから（というのも1エレあたりほんの13グロッシェンしかかからないのです）、それ（英国人が提供したキャラコ）は最も喝采を博しました。（1814年、テキスト F-1）

76) Die *Casques à la Romaine, à la Bellone* u. s. w. [...] erhalten wenigen Beyfall.

ローマ風帽子やペローナ風帽子等はわずかな喝采しか得られません。

（1786年、テキスト D-3）

(74)、(75) では、ある品物に対して大半の良い評価がなされていることを叙述することで、読者に対して品物の社会的な商品価値を保証し、読者が当該の品物を購入する際に安心感を与える役割を果たすことができるといえる。一方(76) では、反対に喝采を得られないことを記述することで、当該の低い商品価値を保証していると考えられる。

5.5.7.3. 「人気」があること

またさらに、モード雑誌のテキストにはある品物が好まれているという記述も、観察される。

77) Die Form ist äußerst simple, aber eben darum geschmackvoll und gefallend.

その形状は極めて簡素ですが、まさにそれゆえに上品であり好まれています。(1787年、テキスト E-1)

78) Von Hauben ist dermalen die neueste und merkwürdigste das *Bonner à la Circassienne paree* (Taf. 13. Fig. 2.) die gefällt und sehr gut kleidet.

縁なし帽子の中では、目下、最新で最も目立った縁なし帽子すなわち、魅力的なチェスques風ボンネット帽があります。それは好まれ、とてもよく着用されます。(1787年、テキスト E-1)

79) Die 10/4 breiten feinen Cambrics mit Haarstreifen (Hair-Cords) bleiben immer zu Morgenkleidungen der Damen eine beliebte Tracht; [...]

縞模様の毛羽がついた4分の10幅の良質カナキンは、常に女性用の朝の室内着として好んで用いられる服装であり続けます；(1814年、テキスト E-1)

80) Von dem beliebten Grenadine gab es 3/4 große Tücher in grün und Bleu-Raymond von einer Kante rother und gelber Rosen umgeben, das Stück zu 8 Rthlr.

好まれているグレナディーン諸島の服地には、赤と黄色のバラの縁取りで囲まれた緑色とブルー＝レイモンド色の4分の3の大きさの服地があり、1枚8ライヒスタールでした。(1814年、テキスト F-1)

(77) では *gefallend* 「好まれている」、(78) では *gefallen* 「気に入る」、(79) (80) では *beliebt* 「好まれている」を使用することで、ある品物が好まれていることを示している。このことは、当該の衣服が大衆の賛同を得ていること、さらにはその衣服がモードであることを示すことにつながると言えるだろう。従って賛同表現同様、大衆に受け入れられて

いる品物としての位置づけが行われているといえる。

以上のように、モード記事の書き手は、記事内で使用する語彙をうまくコントロールして、衣服や装飾品などの魅力を読者に伝え、書き手と読み手との関係を近くとうとしていくことがわかった。

6. 「近いことば性」の測定法の改良をめざして

6.1. 初期新高ドイツ語期の言語現象

今まで、Ágel/Hennig (2006) のモデルを援用して、それぞれのテキストの「近いことば性」の値を測定することを試みてきた。しかしながら、このモデルは本来、1650年から2000年までの新高ドイツ語期のドイツ語を分析対象とするように構想されている。つまり、新高ドイツ語の文法規範がほぼ確定した17世紀後半以降のドイツ語について、その規範から逸脱するような言語現象に「近いことば性」という特徴づけを認定しているわけである。しかし、まだ言語の規範化・統一化への途上にあつた16世紀においては、全般に一つの規範というものが存在しておらず、さまざまな異形 (Variante) が存在していた。すなわち、この初期新高ドイツ語期においては、近いことば性を明示しているとは言えないような現象が、新高ドイツ語期の言語規範を前提とするÁgel/Hennig (2006) の測定法では「近いことば」の要素としてみなされている可能性がある。Ágel/Hennig (2006) の測定法をそのまま16世紀のドイツ語に適用したのでは、適切に「近いことば性」を測定することができない可能性がある。

6.1.1. 語末音消失

Ágel/Hennig (2006) は、語末音消失 (Apokope) の現象を、近いことばの要素とみなし、マイクロレベルにおいて1ポイントとしてカウントしている。語末音消失とは、例えば現在の規範において *ich habe* となるところが、*ich hab*²⁴⁸ のように語末音 *e* が消失した形のことを指す。しかし、この語末音 *e* が消失する現象は、17世紀前半に書かれたさまざまなテキストの中でも頻繁に生じていたことがわかっている。²⁴⁹ したがって、語末音消失の現象は、16世紀のテキストに関しては、近いことばの要素として数え上げることがはたして適切であるかどうかについて議論の余地がある。

²⁴⁸ この *ich hab* の使用は、「最新報告」の『アダム・シュテークマンの殺害行為』に観察されている。

²⁴⁹ Takada (1998: 213) を参照。

6.1.2. 多成分の動詞句

例えば *Die Bauren verwundern sich, daß wihr mit dem Leben **sindt darvonkomen**.*²⁵⁰ のように、副文中の多成分の動詞句の順序が現代ドイツ語の規範から逸脱している場合、Ágel/Hennig (2006) はマイクロレベルの「近いことば」の要素 (Serialisierung における「近いことば性」) とみなしている。16 世紀のテキストを実際に例として見てみると、「アダムの子殺し」の「最新報告」に、*Da es aber ihm nicht hat **mögen empfliehen** [...]* (太字は筆者による) とある。これは現在の規範であれば *hat empfliehen mögen* となることから、近いことばの要素としてカウントされることになる。しかし現代語とは異なり、17 世紀前半においてはこのような多成分の動詞句の様々な配列が書きことばにおいて例証されている²⁵¹ ことを考慮すると、この多成分の動詞句の語順は、16 世紀のテキストに関して、近いことばの要素とみなすことが適切かどうかについて議論の余地がある。

6.1.3. 枠外配置

さらにもう一つ、枠外配置の現象もあげられる。枠構造内に収まるはずの要素が枠の外に出されるような現象は、Ágel/Hennig (2006) において近いことばの要素としてマイクロレベルでカウントされている。しかし、「副文に於いて (中略) 初期新高ドイツ語においては、強勢のない代名詞を除いて、名詞句 (主語、目的語、時の 2 格や 3 格など)、副詞、前置詞句が枠外配置され」²⁵² ていたことがわかっている。つまりこの枠外配置の現象も、16 世紀のテキストを分析する上では、近いことばの要素としては数えることが適切かどうかについて議論の余地がある。

²⁵⁰ Ágel/Hennig (2006: 395)

²⁵¹ Takada (1998: 233-261) を参照。

²⁵² Ebert/Reichmann/Solms/Wegera (1993: 435)

6.2. 「遠いことば性」の要素

6.2.1. 受動態という構文使用

本論文 4.1.1.章でも扱った、受動態の使用に関して Ágel/Hennig (2006) のモデルに対する疑問点が生じる。先行研究で言及されているように、そして本研究での分析結果からもわかるように、17 世紀の週刊新聞には受動態が頻繁に使用されている。しかしながら、受動態は、Ágel/Hennig (2006) の「近いことば性」測定モデルには、分析対象として組み込まれてはいない。本論文で分析を行った 1609 年の週刊新聞《Relation》の記事、「3 月 18 日付けのウィーンからの報告」は、「近いことば性」に関してはとりわけ低い 2.76% という値であった。このようなテキストの中で頻繁な使用が観察される受動態は、「遠いことば性」のある要素としてみなすことができるだろう。受動態は文レベル、すなわちマクロレベルにおいてカウントされるべきであり、その数によって「近いことば性」を低くする要素として、すなわち「遠いことば性の要素」として、算出方法に組み込むことができるであろう。

6.2.2. 外来語使用という要素

モード雑誌テキストには、フランス語の使用も多く見られる。Ágel/Hennig (2006) のモデルでは、外来語もしくは借用語の使用が「近いことば性」／「遠いことば性」とどう関わるのかについては述べられていない。Eisenberg (2011) は、ラテン語の使用を「遠いことば」に、若者語に見られるような英語の使用を「近いことば」に属させている。Eisenberg (2011) によれば、フランス語は「18 世紀にドイツ語圏において最も広く普及し、ドイツ語に最も強力に影響を与えた」。²⁵³ しかし、フランス語が広く普及したといっても、当時の上層階級に限られることである。「社会的に指導的な位置にある階層はフランス語を話し、彼らのドイツ語は多くの場合たいしたものではなかった」²⁵⁴ という。このことから Eisenberg (2011) は、当時のフランス語使用が「閉鎖的な社会」において使用されたものであることを示唆している。その意味において、本論文におけるフランス語の使用を、「遠

²⁵³ Eisenberg (2011: 362)

²⁵⁴ Eisenberg (2011: 362)

いことば的な文相当表現 (Distanz-Nicht-Satz)」と類似の位置づけで、「遠いことば的な外来語 (Distanz-Fremdwort)」のようなカテゴリーを設定して、「遠いことば性の要素」として算出に關与させることがよいのではないだろうか。ただし、このことは語彙に關わることであるので、さらに慎重な方法論的考察が必要である。

6.2.3. 基礎文の総単語数を上位に置く手法の問題性

マクロレベルにおいて「近いことば性」を算出する際には、すでに示したとおり、最初に4つの値を算出する必要があった。すなわち、a) 全基礎文に対する「近いことば的な文相当表現」(NNS)の割合、b) 主文と副文の割合、c) 全基礎文に対する入れ子構造の基礎文 (I-UBS)の割合、そしてd) 一つの基礎文が何語によって構成されているか、という4つの項目である。このうち最後のd)の項目に関して、その妥当性について疑念がわく。

そこで、本論文5.3.2.において分析を行った18世紀後期のドイツモード雑誌『豪奢とモードのジャーナル』の2つのテキストの値を使用しながら、この点について論じておきたい。

まず、5.3.2.で既に示した2つのテキストA、そしてテキストBのマクロレベルに関する値の表を再度以下に示す。

表 65 : マクロレベルでの「近いことば性」の値

分析対象	a) NNS / 全基礎文	b) 基礎文 1 / 基礎文 x	c) 全基礎文 / 中断されている基礎文	d) 総単語数 / NNS 及び 全基礎文
テキスト A (1786年1月号)	54.14%	3.76%	-	-38.73%
テキスト B (1786年6月号)	4.52%	31.62%	-	-18.13%

この表のうち、(d)の項目において、例えばテキストAは-38.73%、テキストBでは-18.13%という、Ágel/Hennig (2006) が近いことばが0%として設定したテキストよりも近いことば性がさらに少ないという算出結果が得られた。しかし、テキストAとBをよく注視して

みると、一文が長い、つまり基礎文を構成する単語数が多いという単純な理由で、これらのテキストの「近いことば性」がきわめて低いとは言い切れないことがわかる。例えばテキスト A には、以下のような一文がある。

82) Hüthe, trägt man jezt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur *grande parure*; häufig Stroh-Hüthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor, die mit einem Perlen-Knopfen gefaßt, und hinten in eine große Schleife gebunden wird, davon die Enden zwey bis drey Finger breit über den Rand des Huthes herabhängen. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786 年 1 月号)

帽子は目下、非常に大きなものが被られており、いずれの服装に対しても被られませんが、正装 (*grande parure*) に対してだけは被られません；しばしば頭部が高く、色のついた帯状のもので囲まれた麦わら帽子が被られています；頭部の周りは、一本か二本の色のついた帯状のもの、もしくは、パールのボタンで留めてある色のついた紗でできた太い紐状のもので、そして後ろで大きなりボンの形にむすばれています。そこからリボンの端が、2-3 本の指幅で、帽子の縁を越えて垂れ下がっています。

この一文は 66 語から構成されており、4 つの基礎文から成り立っている。また、テキスト B においても 45 単語、そして 3 つの基礎文で構成された以下のような一文が書かれている。

83) Sie ist von weißen gestreiften Flor-Linon, hat vorn rund herum kleine Perlen-Gehänge, und an der lincken Seite ein Paar Doppel-Festons von größern Perlen; die Flügel hängen kaum bis zu den Schultern herab, und drauf sind ein Paar grüne Perlen-Zweige und ein Zweig kleine Blume gesteckt. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786 年 6 月号)

それ (*Toque à la Turque* (トルコ風縁なし帽)) は、白い縞模様の紗でできており、前方では小さな真珠の下げ飾りが巡らしてあり、左側には大きな真珠でできた一對の二重花綵があります；両翼はかろうじて肩まで達する程度にたれ下がっており、その上には一組の緑の真珠枝とさらに小さな花の枝が差し込まれています。

これらの文は確かに長い文ではあるが、長いからと言っていわゆる文語的(「近いことば性」がきわめて低い)とは言えないと考えられる。オング(1991)は、「まったく書くことを知らない」²⁵⁵ ような「一次的な声の文化」においては、「思考と表現が次のような性格を持つ傾向がある。[...] 累加的 additive であり、従属的ではない」。²⁵⁶ オング(1991)は声の文化に特有な累加的な様式の例として、『創世記』第1章から第5章の天地創造の語られ方を挙げている。「はじめに神は天と地を創造された。[そして]地は形無く、むなしく、[そして]やみが淵のおもてにあり、[そして]神の霊が水のおもてをおおっていた」。²⁵⁷ オング(1991)は、並列的に情報を加えていくような文を口語的であることを示唆している。上に示したテキストAとBの文では、前置詞句や分詞構文、動詞を伴わない構文などによって、文の後域に次々と新たな情報が累加的な「付け足し(Nachtrag)」がなされている。算出から得られた「近いことば性」の数値を見ただけでは、上に示したテキストAとBのような文は、近いことば性がきわめて低い文だと解釈されてしまう。しかし実際には、これらは「近いことば性」に特徴的とされる累加的な「付け足し」故に、文が長くなったことがわかる。基礎文を構成する単語が多い文を、一概に「近いことば性」が低いと判定することには、問題性があると言えよう。文を構成する要素が、「累加的」(並列的)であるかどうかという点も、きちんと見極める必要がある。

6.3. 「近いことば性」の最終値の表示に関わる代案

Ágel/Hennig(2006)の「近いことば性」のモデルでは、すでに述べたように、マイクロレベルとマクロレベルの平均値を最終的なテキストの「近いことば性」の値としている。確かに、当該のテキスト全体に対して一つの最終的な値を提示することで、テキストの「近いことば性」の値を明確に与えることができる。しかしながらマイクロレベルとマクロレベルを平均化してしまうことで、それぞれのレベルにおける「近いことば性」の割合の特徴を見えないものとしてしまうのは、問題があるのではないだろうか。

そこで筆者は、横軸及び縦軸の両方に関して100%率の座標軸を使い、マイクロレベルとマクロレベルの両方と最終的な「近いことば性」の値を一目で把握できる座標軸を考案し

²⁵⁵ オング(1991: 5)

²⁵⁶ オング(1991: 83)

²⁵⁷ オング(1991: 5)

てみた。本論文 5.3.2.において分析を行った 18 世紀末のモード雑誌『豪奢とモードのジャーナル』から得られた 2 つの「近いことば性」の値を使用して、この新しい座標軸を用いて「近いことば性」の値を新たな座標軸で示してみたい。

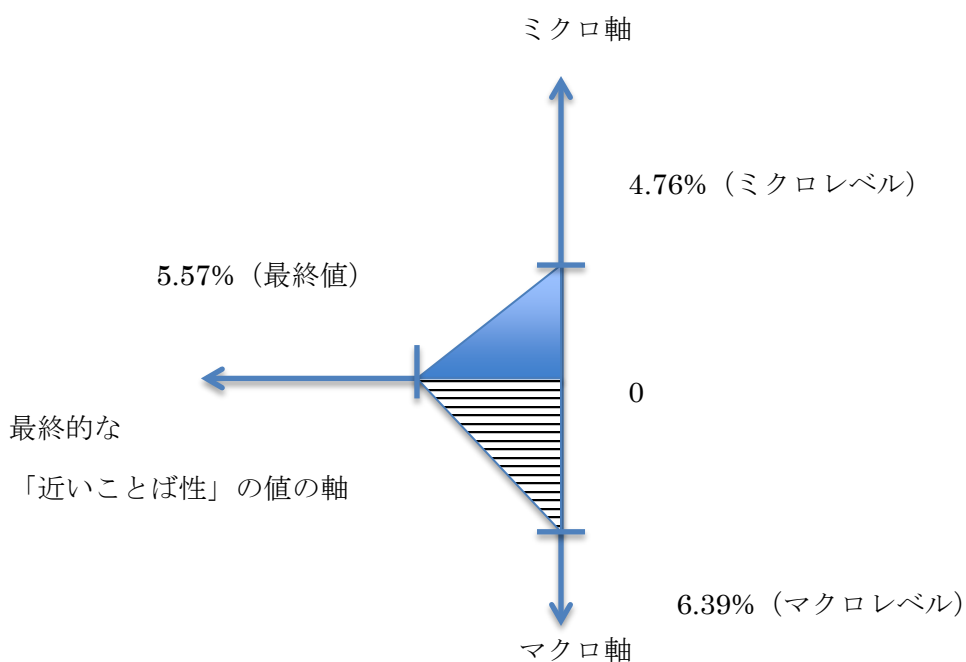
以下に、再び 2 つの分析テキスト 1786 年 1 月号 (テキスト A)、と 1786 年 6 月号 (テキスト B) それぞれのマイクロレベル値、マクロレベル値、そして最終的な「近いことば性」の値をまとめたものを表で示す。

表 66 : 最終的な「近いことば性」の値

	テキスト A (1786 年 1 月号)	テキスト B (1786 年 6 月号)
マイクロレベル値	4.76%	13.80%
マクロレベル値	6.39%	6.0%
最終的な 近いことば性の値	5.57%	9.9%

はじめに、テキスト A を描いた図 5 を参照いただきたい。

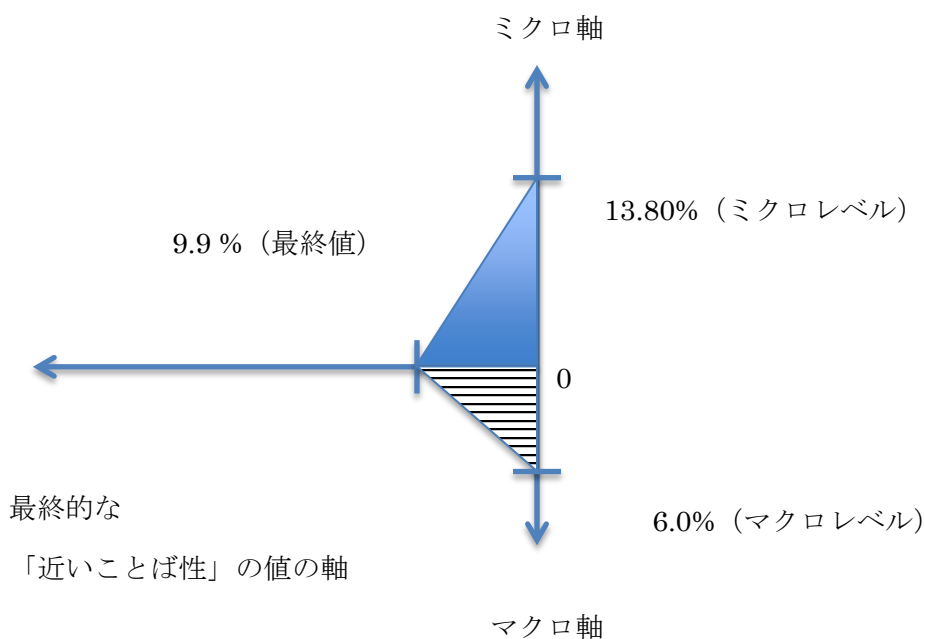
図 5 : 1786 年 1 月号 (テキスト A) の「近いことば性」から形成される三角形



この二重の座標軸では、(右端に近いことば性が0の値を置き基準とした)横軸に最終的な「近いことば性」の値を置き、上方向へ伸びる縦軸(「マイクロ軸」)にはマイクロレベルで算出された「近いことば性」の値を、そして下方向へ伸びる縦軸(「マクロ軸」)にはマクロレベルで算出された値を位置づけるというものである。この3点をそれぞれ直線で結ぶと、三角形が描かれる。この三角形の形状と面積の占める割合により、どの程度のマイクロレベルの値とマクロレベルの値によって最終的な「近いことば性」が算出されたのかを、図によって可視化することができる。その際三角形はひとつではなく、全部で3つある。1つ目は、上側(マイクロ軸)に位置しているマイクロレベルの三角形であり、2つ目は、反対に下側(マクロ軸)に位置しているマクロレベルの三角形(横線がつけられている)である。そして3つ目は、マイクロレベルの三角形とマクロレベルの三角形によって作られる、全体の「近いことば性」を示す三角形である。この図5を見ると、マイクロ・マクロレベルの値、そして最終的な「近いことば性」の値によって作られた軸上の三角形は、ほぼ二等辺三角形の図形となった。つまり、テキストAの最終的な「近いことば性」の値がマイクロ・マクロの両レベルがほとんど同等の値によって算出された数値であることが一目で把握される。

次にテキストBについてみていきたい。テキストBは、次の図6のように表すことができる。

図6：テキストBの「近いことば性」から形成される三角形



この図 6 を見ると、マイクロ側に作られた三角形のほうがマクロ側に作られた三角形よりも面積が大きいことが一目でわかる。つまりテキスト B で得られた最終的な「近いことば性」の値 (9.9%) の多くは、上方のマイクロレベルの「近いことば性」の高さによって得られた値であることが一目で理解される。そこでこのテキスト B の三角形を上部偏重三角形タイプと呼んでおこう。

以上のように、Ágel/Hennig (2006) の測定法による最終的な「近いことば性」の値だけでなく、マイクロ・マクロ両レベルの値も最終値と同等の重要性があるものとして扱い、上に示したような図で表すことで、2 つのレベルがどのように関係し合って最終値がえられたのかを一目で表すことができる。

7. 結論

本論文では、16世紀から18世紀末に至る時間的経過のなかで、種々の印刷メディアに書かれたドイツ語文章語の言語的特徴がどのように変化したのかに関して、(話しことば性であることと書き手と読み手の心理的距離が近いことの両方を言い表す)「近いことば性」という概念を中心に置いて考察を行ってきた。

16世紀において宗教改革者たちは、挿し絵が施された単票のビラを印刷し、字の読めない民衆にこれを読み聞かせる形で改革思想を普及させようとした。その際、印刷ビラに書かれた言語は耳で聞いてわかりやすい「近いことば性」の高いテキストである必要があった。分析対象とした印刷ビラ「マルティン・ルター氏の肖像」(1550年頃)は、「近いことば性」が47.94%であり、相対的に高い。例えば、*du*「汝」による神への語りかけ、*O Gott*「おお神よ」による情緒の表出、*stehe bei*「助けたまえ」による命令などは「近いことば」の要素であり、印刷ビラを読み聞かせてもらう民衆たちの感情に訴えかけ、宗教改革の正当性をより説得的に伝えるのに効果的であった。また、印刷ビラには、揶揄や風刺を交えて、対比法、誇張法、平行法、メタファーなどのレトリックの手法が使いこなされ、聞き手との距離を近く取るように心がけられている。一方、複数枚からなる小冊子の「近いことば性」は、印刷ビラと比べて低く、分析対象とした小冊子「第2の盟友」(1521年)は「近いことば性」が19.43%である。小冊子は、読み聞かせることもあったが、モノローグで黙読が想定されていたことが、「近いことば性」を下げていると考えられる。小冊子では、論理的な関係を明確に言い表す必要性から、基礎文xすなわち副文が多く使用されたことがその大きな要因であると言えよう。

16世紀中葉に、新聞報道の先駆けとされる「最新報告」というメディアが現れた。この最新報告も、印刷ビラと比べると「近いことば性」が高くはない。分析対象とした「エスリンゲンの乙女」(1549年)は4.10%、「アダム・シュテークマンの殺人行為」(1556年)は28.75%である。後者の「近いことば性」の値が前者より高い理由は、後者の最新報告では、出来事の描写に際して臨場感を狙ってか直接話法がテキスト内に盛り込まれているためである。17世紀に入ると、週刊の新聞が登場する。1609年の週刊新聞《Relation》の記事を分析すると、「近いことば性」は2.76%というさらに低い値が出る。これはとりわけ、基礎文1(主文)よりも基礎文x(副文)の方が多く、また一つの基礎文を形成する語数が多いことによる。したがって、通時的に見ると、新聞報道の言語は、17世紀に入って「近

いことば性」をさらに喪失し書きことば性を高め、書き手と読み手の心理的距離も隔てられていったと言える。

次に、構文の観点から、この17世紀初頭の週刊新聞の記事(1609年)を同時代の最新報告(「アンリ4世の殺害」、1610年)と共時的に比較すると、週刊新聞の記事のほうが、受動態、動作名詞を伴う名詞句・前置詞句が多く、また(主文のあとに副文が複数連なっていく)数珠つなぎ複合文も使用されていることがわかった。さらにまた、この17世紀初頭の週刊新聞の記事(1609年)を18世紀末の日刊新聞(『バイロイト新聞』)の記事(1785年)と構文面で通時的に比較すると、副文の使用頻度という点では両者に違いは見られなかったが、数珠つなぎ複合文の使用は18世紀末の新聞記事では半減している。それとは逆に18世紀末の新聞記事のほうに目立つのは、「～すること」を表す動作名詞を中核に置いた名詞句である。このことから、17世紀の新聞記事において数珠つなぎ複合文の果たしていた時、原因、条件、付帯状況などの描写という役割を、18世紀末の新聞記事では動作名詞を中核に置いた長く連なる名詞句が引き継いだのだという解釈が可能である。

18世紀末のモード雑誌には、動作名詞を中核に置いた名詞句はまれにしか確認できない。その代わりに、動作名詞ではない名詞によって作られる前置詞句が多数観察される。これは、18世紀末の新聞記事が出来事を時間軸に沿って「物語る」テキストであって、時、原因、条件、付帯状況などが「～すること」を表す動作名詞を中核に置いた名詞句によって表現されたのに対して、18世紀末のモード雑誌は事物を空間軸に沿って「記述する」テキストであって、描写される事物の位置関係や形状や質などが動作名詞ではない名詞による前置詞句によって表現されたからだと解釈できる。

モード雑誌の記事をコーパス言語学の方法で分析すると、前置詞の出現頻度がたしかに高いことが確認される。モード雑誌に出現する最も重要な名詞である「モード」(Mode)と統計学的に有意な共起関係にあるのは、「一般の」(allgemein)と「新しい」(neu)である。つまり、モード雑誌の記事の書き手にとって、扱う品物が広く一般に受け入れられていて、かつ新しいということ表現する必要があった。商業的な側面から見れば、当時のモード雑誌にとって、単に品物を記述するだけでなく、読者に品物の魅力を十分に伝えることも重要であったのである。しかし、「記述」のテキストは、その代表的なものが事典のテキストであることでわかるように、単調なテキストになりがちである。そこでモード雑誌のテキストの書き手は、品物の魅力を十分に伝えられるように語彙や表現をうまくコントロールして、読者との心理的距離を近づけようとした。例えば、「推奨する」という動詞

や、「理想的な」、「高貴な」、「趣味のよい」などの高価値語を使用し、また比較級・最上級の表現を多用したのがそれである。

以上のように、本論文は、ドイツにおける印刷メディアの発展に即しながら、16世紀に登場した印刷ビラと小冊子そして「最新報告」、17世紀に登場した週刊新聞、18世紀末の日刊新聞、そして18世紀末に登場したモード雑誌を、「近いことば性」という観点から考察してきた。これらのさまざまなテキストを多角的に、構文、句、語彙、修辞学的技法等の視点から分析することによって、本論文は、16世紀から18世紀にかけて標準文章語が確立していくなかでドイツ語文章語に見られた言語的諸特徴を共時的、通時的に記述することができた。そして、明らかになったのは、ドイツ語標準文章語の成立過程は、印刷メディアの一連の発展と関連していて、ドイツ語文章語の諸特徴は、それぞれの印刷メディアにおける「近いことば性」の度合いの違い、つまりどの程度話しことば的で、書き手と読み手の心理的距離をどの程度近く取ろうとするのかによって説明が可能であるということである。

参考文献

一次文献

Ware Contrafactur Herrn Martin Luthers (um 1550?)

出典: Harms, Wolfgang/Schilling, Michael (Hg.) (1997): *Die Wickiana. Die Sammlung der Zentralbibliothek Zürich, kommentierte Ausgabe*, Teil I/II (Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. Jahrhunderts, Bd. 6/7), Tübingen. S. 107.

Der ander bundtsgnosz. Vom fasten der .xl. tag vor Osteren vnd andern, wie do mit so jammerlich wirt beschwärt das Christenlich volck. (1521)

出典: Enders, Ludwig (Hg.) (1869): *Ausgewählte Schriften. Johann Eberlin von Günzburg*. Bd. 1. Halle a.S. (Flugschriften aus der Reformationszeit XI)

Bayreuther Zeitung. (1786): (参照日 2016年6月19日)

<http://bavarica.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10505361.html>

Die Mordtat des Adam Stegmann zu Obernehen in Elsaß (1556)

出典: 田辺幹之助, 佐藤直樹 (編) (1995) 『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館. 41頁.

Die Jungfrau zu Eßlingen. (1594)

出典: 田辺幹之助, 佐藤直樹 (編) (1995) 『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館. 39頁.

『ルターの敵対者』(1521年頃)

出典: 森田安一 (1993) 『ルターの首引き猫』山川出版社. 195頁.

Harms, Wolfgang (Hg.) (1980): *Die Sammlung der Herzog August Bibliothek in Wolfenbüttel, kommentierte Ausgabe. Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. Jahrhunderts*. Band 2. Historica. München. S. 146.

Gölitzsch, Johannes (1563): *Ein erschreckliche Geburt/ vnd augenscheinlich Wunderzeichen des Allmechtigen Gottes/ so sich auff den 4. tag des Christmonats/ dieses 1563. Jars/ in der nacht/ in dem Dorff Werringschleben/ In eines Erbarn hochweisen Raths/ der alten löblichen Stadt Erffurds gebiette/ zugetragen*. Erfurt.

Schöne, Walter (Hg.) (1940): *Die Relation des Jahres 1609 in Faksimiledruck*. Leipzig.

Journal der Moden (1786) (参照日 2012 年 10 月 20 日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085474

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085465

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085452

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092467

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092470

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092497

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086215

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086211

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092504

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092535

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086090

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092542

Journal der Moden (1790) (参照日 2012 年 10 月 20 日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085929

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085862

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085859

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085797

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085742

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092706

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092746

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092749

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092797

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092800

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086159

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092843

Journal des Luxus und der Moden. (1795) (参照日 2012 年 10 月 20 日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00090868

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093519
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00084924
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085340
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085328
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085266
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085266
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085134
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093128
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093168
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093209
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092004

Journal des Luxus und der Moden. (1800) (参照日2012年10月20日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093390
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092330
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00087798
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00088598
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00088535
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00088429
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094059
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094093
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094151
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00088590
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00088528
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093782

Journal des Luxus und der Moden. (1805) (参照日2012年10月20日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093846
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093998
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094002

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094023
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00093875
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00087479
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jpvolume_00055737
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094472
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094495
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094521
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094544
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094285

Journal des Luxus und der Moden (1810) (参照日2012年10月20日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092360
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094373
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086613
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086271
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094409
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094425
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086798
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086768
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086720
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094492
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00086678
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00090561

Journal des Luxus und der Moden. (1814) (参照日2012年10月20日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085685
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00094720
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085638
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085616
http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085611

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085608

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085583

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085710

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085705

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085677

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085671

Journal für Literatur, Kunst, Luxus und Mode. (1815) (参照日 2012 年 10 月 20 日)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085600

二次文献

Adelung, Johann Christoph (1793/ 1796/ 1798 / 1801): *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart*. 4 Bde. Leipzig. Nachdruck: Hildesheim/New York 1970.

Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2006): *Grammatik aus Nähe und Distanz: Theorie und Praxis am Beispiel von Nähetexten 1650-2000*. Tübingen.

Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2007): *Zugänge zur Grammatik der gesprochenen Sprache*. Tübingen.

赤木登代 (2008) 「ドイツ女性誌の系譜 — 啓蒙と娯楽の機能をめぐって —」 [大阪教育大学、『大阪教育大学紀要. I, 人文科学』第 56 巻 第 2 号、1-18 頁] .

新井皓士 (1984) 「トーマス・ムルナーに関する一考察 『文化史と文学史の狭間』ケンキウ備忘」 [『一橋大学研究年報. 人文科学研究』第 23 巻、6-33 頁] .

ベーン, マックス, フォン (2001) (飯塚信雄, 杉浦忠夫, 田崎剛, 永井義也, 両角正司, 垣本知子, 高田淑, 橘 好碩, 村山雅人訳) 『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社.

Bußmann, Hadumod (Hg.) (2002): *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart.

Campe, Joachim Heinrich (1807/ 1808/ 1809/ 1810/ 1811/ 1813): *Wörterbuch der Deutschen Sprache*. 6 Bde. Braunschweig. Nachdruck: Hildesheim/New York 1969.

チャルディーニ, ロバート・B. (2007) (社会行動研究会訳) 『影響力の武器 — なぜ、人は動かされるのか』誠信書房.

Demske-Neumann, Ulrike (1996): Bestandsaufnahme zum Untersuchungsbereich Syntax. In: Fritz,

- Gerd/Strassner, Erich (Hg.) (1996): *Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert*. Tübingen, S. 70-125.
- Ebert, Robert Peter/Reichmann, Oskar/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter (1993): *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Eisenberg, Peter (2011): *Das Fremdwort im Deutschen*. Berlin.
- エガース, ハンス (1975) (岩崎英二郎訳) 『二十世紀のドイツ語』 白水社.
- エリアーデ, ミルチャ (主編) ローレンス, サリヴァン・E. (編) (2002) (鶴岡賀雄, 島田裕巳, 奥山倫明訳) 『エリアーデ・オカルト事典』 法蔵館.
- Elspaß, Stephan (2005): *Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert*. Tübingen.
- エンゲルジング, ロルフ (1985) (中川勇治訳) 『文盲と読書の社会史』 思索社.
- Eroms, Hans-Werner (2008): *Stil und Stilistik. Eine Einführung*. Berlin.
- Eroms, Hans-Werner (2009): Stilistische Phänomene der Syntax. In: Fix, Ulla/Gardt, Andreas/Knape, Joachim (Hg.) (2009): *Rhetorik und Stilistik. Ein internationales Handbuch historischer und systematischer Forschung*. 2. Halbband. Berlin. S. 1594-1609.
- フェーブル, リュシアン/マルタン, アンリ・ジャン (1985) (関根泰子, 長谷川輝夫, 宮下志郎, 月村辰雄訳) 『書物の出現 上下巻』 筑摩書房.
- 藤代幸一 (2006) 『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥 — ザックス、デューラーと歩く宗教改革』 八坂書房.
- Gieseler, Jans/Schröder, Thomas (1996): Bestandsaufnahme zum Untersuchungsbereich Textstruktur, Darstellungsformen und Nachrichtenauswahl. In: Gerd, Fritz/Straßner, Erich (Hg.) (1996): *Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert*. Tübingen. S. 29-69.
- ヘンチェル, エルケ/ヴァイト, ハラルト (2006) (西本美彦, 高田博行, 河崎靖訳) 『ハンドブック 現代ドイツ文法の解説』 同学社.
- 樋口桂子 (2005) 『メトニミーの近代』 三元社.
- Hinderlang, Götz (1983): *Einführung in die Sprechakttheorie*. Tübingen.
- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』 大修館書店.
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- Janich, Nina (2003): *Werbepsprache. Ein Arbeitsbuch*. Tübingen.

- 川島淳夫（編）（1994）『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店。
- Koch, Peter/Wulf Oesterreicher (1985): *Sprache der Nähe — Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte*. In: *Romanistisches Jahrbuch*, 36, S. 15-43.
- Koch, Peter/Wulf Oesterreicher (1994): Schriftlichkeit und Sprache. In: Hartmut, Günther/Otto, Ludwig (Hg.) (1994): *Schrift und Schriftlichkeit: Ein interdisziplinäres Handbuch internationaler Forschung*. 1. Handbuch. Berlin, S. 587-604.
- Krempel, Lore (1935): *Die deutsche Modezeitschrift. Ihre Geschichte und Entwicklung nebst einer Bibliographie der deutschen, englischen und französischen Modezeitschriften*. Coburg.
- Kröll, Christina (1979): *Journal des Luxus und der Moden. Kolorierte Kupfer aus Deutschlands erster Modezeitschrift*. Dortmund.
- 工藤康弘, 藤代幸一 (1992) 『初期新高ドイツ語』 大学書林.
- Kuhles, Doris (2000): Das „Journal des Luxus und der Moden“ (1786-1827). Zur Entstehung seines inhaltlichen Profils und seiner journalistischen Struktur. In: Kaiser, Gerhard/Seifer, Siegfried (Hg.) (2000): *Friedrich Justin Bertuch (1747-1822). Vergleicher, Schriftsteller und Unternehmer im klassischen*. Weimar, S. 489-500.
- クレベール, ジャン・ポール (1989) (竹内信夫, 柳谷巖, 西村哲一, 瀬戸直彦, アラン・ロシェ訳) 『動物シンボル事典』 大修館書店.
- ラウスベルク, ハインリッヒ (2001) (萬澤正美訳) 『文学修辞学 文学作品のレトリック分析』 東京都立大学出版会.
- Meuche, Hermann (1976): *Flugblätter der Reformation und des Bauernkrieges: 50 Blätter aus der Sammlung des Schloßmuseums Gotha*. Leipzig.
- ミルワード, ピーター (1992) (中山理訳) 『聖書の動物事典』 大修館書店.
- 森田安一 (1993) 『ルターの首引き猫』 山川出版社.
- 永田諒一 (2004) 『宗教改革の真実 — カトリックとプロテスタントの社会史』 講談社.
- 日本基督教協議会文書事業部, キリスト教大事典編集委員会 (1968) 『キリスト教大事典』 教文館.
- Nitta, Haruo (2008): Sprachliche Einstellung im soziokulturellen Kontext des Reformationszeitalters –Luther und Murner. In: 『武蔵大学人文学会雑誌』 第 40 卷 2 号, S.156-186.

- ノルト, ミヒャエル (2013) (山之内克子訳) 『人生の愉楽と幸福 ドイツ啓蒙主義と文化の消費』法政大学出版局.
- オング, ウォルター・J. (1991) (桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳) 『声の文化と文字の文化』藤原書店.
- 小野光代 (2006) 「16 世紀ドイツの Flugschrift における語・句の重ねについて — 言語平衡論との関連において —」 [関西外国語大学『研究論集』第 83 号、143-157 頁] .
- Ortner, Hanspeter (1981): *Wortschatz der Mode. Das Vokabular der Modebeiträge in deutschen Modezeitschriften*. Düsseldorf.
- ポーレンツ, ペーター・フォン (1974) (岩崎英二郎, 塩谷饒, 金子亨, 吉島茂訳) 『ドイツ語史』白水社.
- Polenz, Peter von (2013): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Band 2. 17. und 18. Jahrhundert*. Berlin.
- プレット, ハインリヒ・F. (2000) (永谷益朗訳) 『レトリックとテキスト分析 レトリックの視点からのテキスト分析入門』同学社.
- Römer, Ruth (1968): *Die Sprache der Anzeigenwerbung*. Düsseldorf.
- 齊藤俊雄, 中村純作, 赤野一郎 (編) (2005) 『英語コーパス言語学—基礎と実践—改訂新版』研究社.
- Schilling, Michael (1990): *Bildpublizistik der frühen Neuzeit; Aufgaben und Leistungen des illustrierten Flugblatts in Deutschland bis um 1700*. Tübingen.
- Schön, Erich (1987) *Der Verlust der Sinnlichkeit oder die Verwandlungen des Lesers. Mentalitätswandel um 1800*. Stuttgart.
- Schröder, Thomas (1995): *Die ersten Zeitungen. Textgestaltung und Nachrichtenauswahl*. Tübingen.
- シュトゥッペリヒ, ロバート (1984) (森田安一訳) 『ドイツ宗教改革史研究』ヨルダン社.
- Schuster, Britt-Marie (2001): *Verständlichkeit von frühreformatorischen Flugschriften: Eine Studie zu kommunikationswirksamen Faktoren der Textgestaltung*. Hildesheim.
- Schwitalla, Johannes (1983): *Deutsche Flugschriften 1460-1525: Textsortengeschichtliche Studien*. Tübingen.
- Schwitalla, Johannes (1999): *Flugschrift*. Tübingen.
- Schwitalla, Johannes (2000): *Medienwandel und Reoralisierung. Phasen sprechsprachlicher Nähe*

- und Ferne in der deutschen Sprachgeschichte. In: Dorothea Klein (Hg.) (2000): *Vom Mittelalter zur Neuzeit. Festschrift für Horst Brunner*. Heidelberg. S. 669-687.
- Scribner, Robert W. (1981): *Flugblatt und Analphabetentum*. In: Köhler, Hans-Joachim (Hg.): *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart.
- サール, ジョン R. (1986) (坂本百大, 土屋俊訳) 『言語行為』 勁草書房.
- サール, ジョン R. (2006) (高橋要, 野村恭史, 三好潤一郎, 山田友幸訳) 『表現と意味—言語行為論研究』 誠信書房.
- Seeborn, Joachim (1999): *Gable-Kompakt-Lexikon Werbepraxis: 1400 Begriffe nachschlagen, verstehen, anwenden*. Wiesbaden.
- 芹澤円 (2011) 「宗教改革期の印刷ビラにみる説得的効果: 民衆の心をつかむレトリック」、『学習院大学ドイツ文学会研究論集』、学習院大学ドイツ文学会、第 15 号、1-30 頁.
- 芹澤円 (2014) 「ドイツ最古の週刊新聞の書きことば性をめぐって — 出来事をどのように報道するか —」 [金水敏, 高田博行, 椎名美智 (編) 『歴史語用論の世界 — 文法化・待遇表現・発話行為 —』 ひつじ書房 219-245頁.] .
- Steiner, Walter/Kühn-Stillmark, Uta (2001): *Friedrich Justin Bertuch. Ein Leben im klassischen Weimar zwischen Kultur und Kommerz*. Köln.
- Straßner, Erich (1997): *Zeitung*. Tübingen.
- シュトラスナー, エーリヒ (2002) (大友展也訳) 『ドイツ新聞学事始 — 新聞ジャーナリズムの歴史と課題』 三元社.
- 須澤通, 井出万秀 (2009) 『ドイツ語史 社会・文化・メディアを背景として』 郁文堂.
- 鈴木将史 (2000) 「フォス新聞: ドイツ語圏最初の教養新聞 (その 1)」 [小樽商科大学『人文研究』 第 99 号、61-83 頁] .
- Takada, Hiroyuki (1998): *Grammatik und Sprachwirklichkeit von 1640-1700: Zur Rolle deutscher Grammatiker im schriftsprachlichen Ausgleichsprozeß*. Tübingen.
- 高田博行, 椎名美智, 小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』 大修館書店.
- 高田博行 (2011) 「時間軸で追うヒトラー演説—コーパス分析に基づく語彙的特徴の抽出」 『学習院大学ドイツ文学会研究論集』、学習院大学ドイツ文学会、第 15 号、89-159 頁.
- 高田博行 (2013) 「書きことばと話しことばの混交 (18 世紀) 「日常交際語」という概念をめぐって」、高田博行, 新田春夫 (編) 『講座ドイツ言語学 第 2 巻 ドイツ語の歴

史』ひつじ書房.

田辺幹之助, 佐藤直樹 (編) (1995) 『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館.

上村くにか (1990) 『白鳥のシンボリズム: 神話・芸術・エロスからのメッセージ』御茶の水書房.

渡辺学 (2009) 「話しことばの特性をどのように測定したらよいのか?」、高田博行 (編) 『話しことば研究をめぐる4つの問い』〔日本独文学会『日本独文学会研究叢書』第065号、1-21頁。〕

インターネット情報

Log-likelihood and effect size calculator: <http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html>

(参照日: 2016年9月17日)

東北学院大学: <http://mmt1.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/tree-tagger/>

(参照日 2017年3月25日)